

越路六郎遺跡・越路貴船遺跡

福岡県築上郡椎田町所在遺跡の調査

福岡県文化財調査報告書 第161集

2001

福岡県教育委員会

こいじろくろう こいじきふね
越路六郎遺跡・越路貴船遺跡

－ 福岡県築上郡椎田町所在遺跡の調査 －

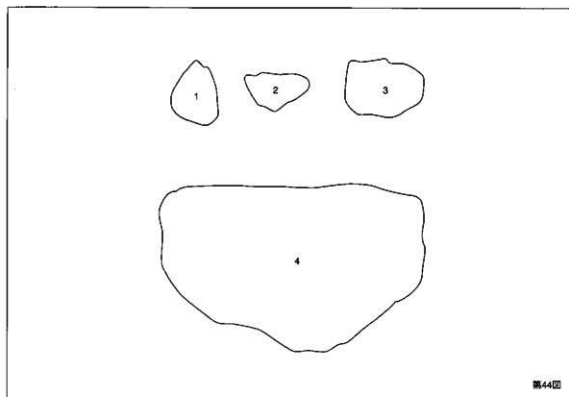
福岡県文化財調査報告書 第161集



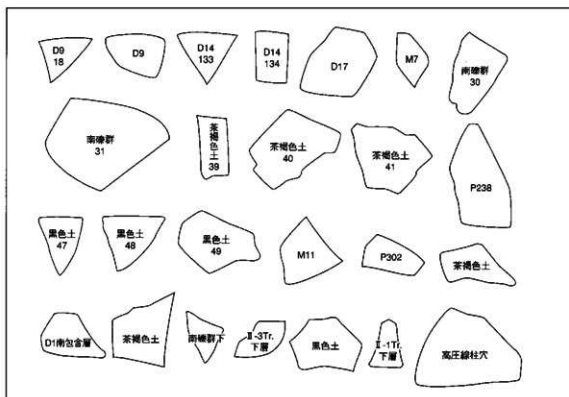
越路六郎遺跡出土旧石器



越路六郎遺跡出土越州窯系青磁等



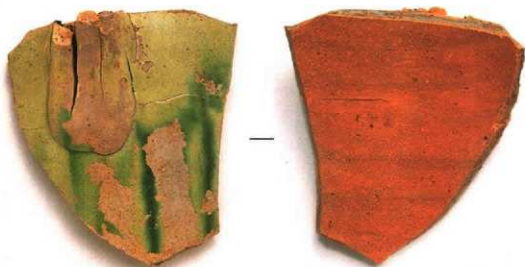
越路六郎遺跡出土旧石器



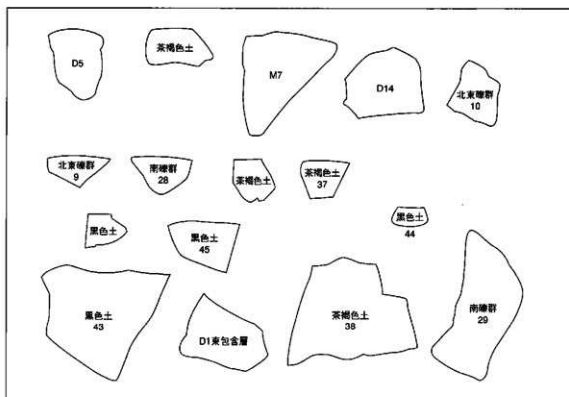
越路六郎遺跡出土越州窯系青磁等



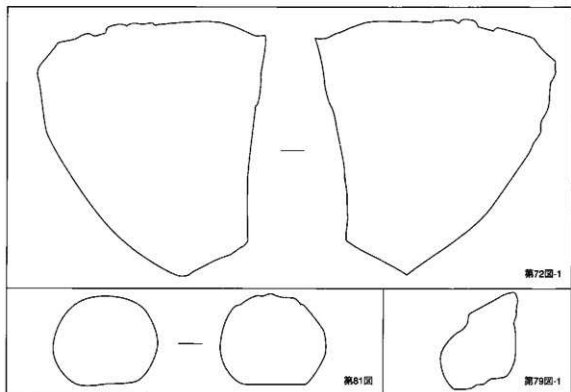
越路六郎遺跡出土緑釉・灰釉陶器



越路貴船遺跡出土特殊遺物



越路六郎遺跡出土緑釉・灰釉陶器



越路貴船遺跡出土特殊遺物

序

ここに報告する遺跡は、主要地方道椎田勝山線改良工事に伴って発掘調査されたもので、同路線に関わる調査報告としては第5冊目になります。

今回の調査地点の近くには、旧豊前国から豊後国に至る古代官道が想定されていました。調査の結果、公的な施設の存在を予想させる遺構・遺物が発見され、その後に実施された椎田町教育委員会による周辺部の発掘調査によって官道そのものも一部が確認されました。今後はそれらの総合的検討が重要な課題となるでしょう。

なお、発掘調査・報告書作成にあたっては福岡県豊前土木事務所、椎田町・同教育委員会の諸機関をはじめとして、地元有志の方々のご協力を得て、これを無事に終了することができました。深く感謝する次第です。

また、本書が教育・研究、文化財愛護思想の普及にわずかなりとも寄与できれば望外の喜びとするところであります。

平成13年3月30日

福岡県教育委員会

教育長 光安 常喜

例 言

1. 本書は、福岡県豊前土木事務所を事業主体とする主要地方道椎田勝山線道路改良工事に伴って発掘調査を実施した各遺跡の報告である。
2. 発掘調査・報告書作製は、福岡県土木部道路建設課の執行委任を受けて、教育庁総務部文化財保護課（旧指導第二部文化課）が実施した。
なお、調査・報告書作製に関して福岡県豊前土木事務所、椎田町・同教育委員会の多大な御協力を得た。
3. 出土遺物は、九州歴史資料館において、土器類を文化財保護課岩瀬正信氏の、金属器を同館参事横田義章氏の指導の下で、整理・復原を行った。
4. 掲載した図は、遺構を小池・飛野・川野礼子・三吉きよみ・佐山彰子・波辺八重子・丸山基美・緒方恵子が、遺物は小池・飛野・平田春美・棚町陽子・久富美智子・田中典子・坂田順子・堀江圭子・若松三枝子・中村洋子・栗林明美・寺岡和子・中川真理子・荒川妙・小西藍が作製したものを、豊福弥生・原カヨ子・江上佳子が製図を行ったものである。
5. 掲載した写真は、遺構を小池・飛野が、遺物は九州歴史資料館において巻頭図版を同館参事補佐石丸洋氏が、その他を同氏の指導の下、文化財保護課北岡伸一氏が撮影した。
なお、空中写真は(左)ダイワと(右)空中写真企画の委託撮影による。
6. 使用した方位は主としてⅢ-1が磁北、Ⅲ-2が座標北である。それ以外については特記した。
7. 本書の執筆はⅢ-1の大部分を飛野が、Ⅱ・Ⅲ-1の石器・石製品・土鍾と、Ⅲ-2を小池が行い、Iおよび編集は各々が担当した。

本文目次

	頁
I. はじめに	1
II. 位置と環境	5
III. 調査の内容	9
1. 越路六郎遺跡	9
2. 越路貴船遺跡	67

図版目次

巻頭図版1 越路六郎遺跡出土旧石器、越州窯系青磁等

巻頭図版2 越路六郎遺跡出土緑釉・灰釉陶器、越路貴船遺跡出土特殊遺物

図版1 越路地区周辺航空写真(1947年4月 米軍撮影)

越路六郎遺跡

図版2 1. 越路六郎遺跡全景(西上空から) 2. 越路六郎遺跡全景(南東上空から)

図版3 1. I区全景(南上空から) 2. III区全景(南上空から)

図版4 1. I・II区全景(南上空から) 2. II区全景(上空から)

図版5 1. 1号掘立柱建物跡(東から) 2. 3号掘立柱建物跡(北西から)

3. 4号掘立柱建物跡(東から)

図版6 1. 1号土坑(東から) 2. 8号土坑西側(南東から)

3. 11号土坑(東から)

図版7 1. 13号土坑(西から) 2. 13号土坑遺物出土状態(東から)

3. 13号土坑完掘後(東から)

図版8 1. 14号土坑(東から) 2. 14号土坑完掘後(南から)

3. 15号土坑(南東から)

図版9 1. 15号土坑完掘後(南東から) 2. 16号土坑(西から)

3. 16・17号土坑完掘後(東から)

図版10 1. 1号溝状遺構土層(西から) 2. 2号溝状遺構遺物出土状態(北西から)

3. II-3トレンチ土層(北西から)

図版11 1. 北東礫群(北から) 2. 北東礫群(西から)

3. 北東礫群細部(南東から)

図版12 1. 南礫群(南から) 2. 南礫群(東から)

3. I区北西隅(南東から)

図版13 1. II区高压線跡(東から) 2. III区高压線跡(南西から)

3. III区高压線跡(北西から)

図版14 出土遺物1(掘立柱建物跡、5・8・13号土坑)

図版15 出土遺物2(14号土坑)

図版16 出土遺物3(14号土坑)

図版17 出土遺物4(14~18・11・9号土坑、2・8号溝状遺構)

図版18 出土遺物5(9・16号溝状遺構、北東礫群、南礫群、茶褐色土層、黑色土層)

図版19 出土遺物6(黑色土層、柱穴、トレンチ、フイゴ羽口、高压線柱穴)

図版20 出土遺物7(鉄製品、石製品)

図版21 出土遺物8(石製品、土製品)

越路貴船遺跡

図版22 1. 越路貴船遺跡全景空中写真(西から) 2. 越路貴船遺跡全景空中写真(南東から)

図版23	1. 越路貫船遺跡調査区西北部(南西上空から)	2. 調査区中央部(南西上空から)
	3. 調査区東南部(南西上空から)	
図版24	1. 1号住居跡(北東から)	2. 1号住居跡遺物出土状況
	3. 2号住居跡(南東から)	4. 2号住居跡カマド(南東から)
図版25	1. 3号住居跡(北から)	2. 3号住居跡(西から)
	3. 3号住居跡カマド(西から)	4. 3号住居跡カマド(西から)
	5. 3号住居跡カマド煙道(南東から)	
図版26	1. 4号住居跡(西から)	2. 住居跡出土土器
図版27	1. 1号建物跡(北西から)	2. 3号建物跡(南東から)
	3. 3号建物跡(北東から)	4. 4号建物跡(北西から)
図版28	1. 6・7号建物跡(南東から)	2. 7号建物跡(北から)
	3. 7号建物跡(東から)	4. 7号建物跡地鎮土坑(南東から)
	5. 地鎮土坑出土土器	
図版29	1. 9号建物跡(南から)	2. 10号建物跡(北東から)
	3. 11号建物跡(東から)	
図版30	1. 12号建物跡(西から)	2. 1号堅穴(北東から)
	3. 1号堅穴(南から)	4. 1号土坑との境目での緑釉陶器出土状況
図版31	1. 1号堅穴製鉄遺構(南東から)	2. 1号堅穴製鉄遺構(南西から)
	3. 3号堅穴(南西から)	4. 3号堅穴(北西から)
図版32	1. 4号堅穴(北東から)	2. 6号堅穴(南西から)
	3. 7号堅穴(南西から)	4. 堅穴出土土器
図版33	1. 1号土墳墓(南東から)	2. 1号土墳墓(南西から)
	3. 1号土墳墓遺物出土状況	4. 1号土墳墓出土土器
図版34	1. 谷部の補足調査区(北西から)	2. 調査区東南部での調査風景
	3. 2号土坑(南東から)	4. 3号土坑と4号住居跡(南東から)
図版35	1. 4号土坑(南東から)	2. 5号土坑(南東から)
	3. 5号土坑堆積状況	4. 6号土坑(西から)
	5. 6～8号土坑とその周辺(北東から)	
図版36	土坑・ピット・包含層出土土器	
図版37	旧石器・石器・石製品・土製品・鉄製品	

挿図目次

	頁
第1図 周辺地形図(1/10,000)	2
第2図 周辺遺跡分布図(1/50,000)	4
越路六郎遺跡	
第3図 越路六郎遺跡地形図および略遺構配置図(1/600)	8
第4図 越路六郎遺跡遺構配置図(1/300)	10

第5図	1号掘立柱建物跡実測図 (1/80)	11
第6図	2号掘立柱建物跡実測図 (1/80)	12
第7図	3号掘立柱建物跡実測図 (1/80)	13
第8図	4号掘立柱建物跡実測図 (1/80)	14
第9図	5号掘立柱建物跡実測図 (1/80)	15
第10図	掘立柱建物跡出土遺物実測図 (1/3)	15
第11図	1号土坑実測図 (1/40)	16
第12図	土坑出土遺物実測図1 (1号、1/3)	17
第13図	8・9・11・12・16・17号土坑実測図 (1/40)	18
第14図	土坑出土遺物実測図2 (2・3・5・6・8・9号、1/3・1/6)	19
第15図	土坑出土遺物実測図3 (11号、1/3)	21
第16図	13号土坑実測図 (1/20)	21
第17図	土坑出土遺物実測図4 (13号、1/3)	22
第18図	14号土坑実測図 (1/20)	23
第19図	土坑出土遺物実測図5 (14号、1/3)	24
第20図	土坑出土遺物実測図6 (14号、1/3)	25
第21図	土坑出土遺物実測図7 (14号、1/3)	26
第22図	土坑出土遺物実測図8 (14号、1/3)	28
第23図	15号土坑実測図 (1/20)	29
第24図	土坑出土遺物実測図9 (15～17号、1/3)	30
第25図	土坑出土遺物実測図10 (19号、1/3)	31
第26図	1号溝状遺構土層図 (1/40)	32
第27図	溝状遺構出土遺物実測図1 (2号、1/3)	32
第28図	溝状遺構出土遺物実測図2 (7号、1/3)	34
第29図	溝状遺構出土遺物実測図3 (8号、1/3)	35
第30図	溝状遺構出土遺物実測図4 (その他の溝状遺構、1/3)	37
第31図	北東礫群出土遺物実測図1 (1/3)	40
第32図	北東礫群出土遺物実測図2 (1/3)	41
第33図	北東礫群出土遺物実測図3 (1/3)	42
第34図	南礫群・西平礫群出土遺物実測図 (1/3)	44
第35図	茶褐色土層出土遺物実測図1 (1/3)	46
第36図	茶褐色土層出土遺物実測図2 (1/3)	47
第37図	黒色土層出土遺物実測図1 (1/3)	49
第38図	黒色土層出土遺物実測図2 (1/3)	50
第39図	柱穴出土遺物実測図1 (1/3)	52
第40図	柱穴出土遺物実測図2 (1/3)	54
第41図	トレンチ出土遺物実測図1 (1/3)	55
第42図	トレンチ出土遺物実測図2 (1/3)	56
第43図	鉄製品実測図 (1/2)	57

第44図	旧石器時代石器実測図 (3/4、1/2)	58
第45図	石器・石製品実測図 1 (1/2)	59
第46図	石器・石製品実測図 2 (1/2)	60
第47図	土製品実測図 (1/2)	61
第48図	その他の出土遺物実測図 (1/3)	62
第49図	高圧線遺構実測図 (1/60)	62

越路貴船遺跡

第50図	越路貴船遺跡地形図・全体図 (1/1000・1/600)	67
第51図	越路貴船遺跡遺構配置図 (1/300)	68
第52図	1・2号住居跡および2号住居跡カマド実測図 (1/60・1/40)	69
第53図	住居跡出土石器実測図 (1/3)	70
第54図	3・4号住居跡実測図 (1/60)	72
第55図	3号住居跡カマド実測図 (1/30)	73
第56図	1・2・5号建物跡実測図 (1/80)	75
第57図	3・4号建物跡実測図 (1/80)	76
第58図	1～4号建物跡柱穴出土土器実測図 (1/3)	78
第59図	6・7号建物跡および7号建物地鎮土坑実測図 (1/80・1/20)	79
第60図	7号建物地鎮土坑出土土器実測図 (1/20)	80
第61図	8・9号建物跡実測図 (1/80)	81
第62図	10～12号建物跡実測図 (1/80)	82
第63図	9～12号建物跡柱穴出土土器実測図 (1/3)	83
第64図	1・3・4・6・7号竪穴および1号土坑実測図 (1/60・1/80)	84
第65図	1号竪穴製鉄遺構実測図 (1/20)	85
第66図	1・2・4号竪穴出土土器実測図 (1/3)	86
第67図	3号竪穴出土土器実測図 (1/3)	87
第68図	2・5号竪穴実測図 (1/80・1/100)	88
第69図	1号土坑墓実測図 (1/30)	90
第70図	1号土坑墓出土土器実測図 (1/3)	90
第71図	2～8号土坑実測図 (1/30・1/40)	92
第72図	土坑出土土器実測図 (1/3)	93
第73図	ビット出土土器実測図 1 (1/3)	95
第74図	ビット出土土器実測図 2 (1/3)	96
第75図	溝出土土器実測図 (1/3)	97
第76図	高圧線柱穴実測図 (1/80)	98
第77図	包含層出土土器実測図 1 (1/3)	99
第78図	包含層出土土器実測図 2 (1/3)	100
第79図	石器実測図 (2/3)	101
第80図	土製品・石製品・鉄製品実測図 (1/2)	102
第81図	石帯実測図 (1/2)	103

I. はじめに

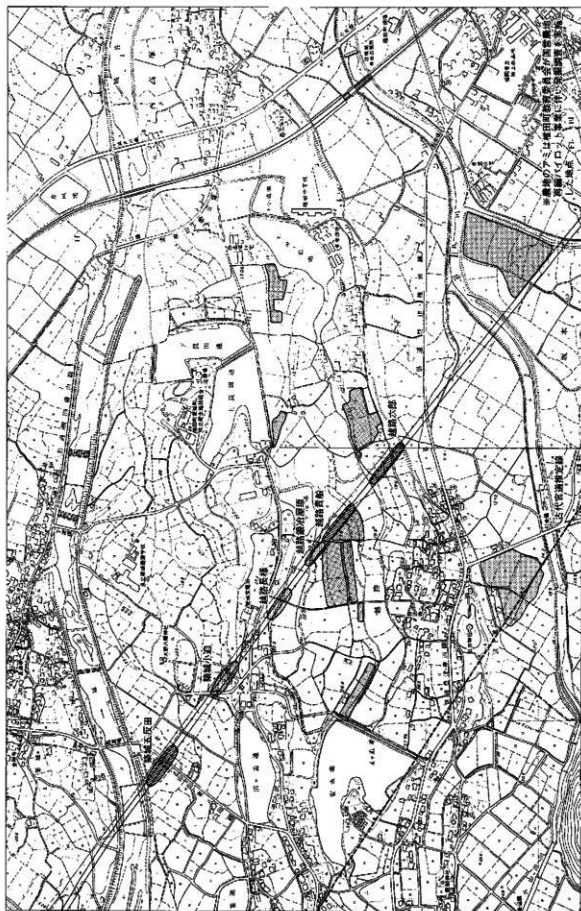
ここに報告する2遺跡の調査原因は主要地方道椎田勝山線の道路改良工事（バイパス）である。椎田勝山線は京都府勝山町の国道201号線から同豊津町・築上郡築城町を抜け、同椎田町で国道10号線に通じる最短距離の道路で古くから利用者の多い道路である。築城町築城は役場の所在する市街地中心部であるが、古くからの町並みがあり、車両の大型化の波に対応できない狭小な道路幅の部分が残って交通の難所と化している現状である。また椎田町役場の所在する椎田町中心部も国道10号線の渋滞箇所としてよく知られている。このため、主要地方道椎田勝山線のバイパス開通が強く望まれているところであり、所管する福岡県豊前土木事務所では重要な事業としてバイパス建設が進められてきて、残された椎田町越路から築城町上別府間の建設が急がれてきている。

椎田町内では新たな基点に近い町東部、大字湊に所在する池ノ本遺跡の調査以降、今回報告の越路地区に至るまで、ほぼ全線にわたる試掘調査を実施してきたが、微高地ですでに大きく削平を受けていたりして文化財には遭遇していなかった。平成7年11月、岩九川以西での分布調査の依頼を受け、試掘調査の結果、大字越路地区の開墾された丘陵上の2地点で遺構を確認したことから、本調査についての協議を行い、越路六郎遺跡は8年度後半に現地発掘調査を実施することで協議が整い、執行委任の手続きをとって9年1月から現地調査に着手した。越州窯系青磁や緑釉などの重要遺物が出土したことで調査は年度内に終わらず、同年4月には教育事務所の文化財担当が興動したこともあって調査は一時中断、再開後同年夏までに現地発掘調査を終了した。

越路貴船遺跡は9年度後半に現地発掘調査を実施することで協議が整い、執行委任の手続きをとって10年1月から現地調査に着手した。椎田町大字越路所在の椎田勝山線用地内では両遺跡のほか、越路貴船遺跡と農道を挟んで隣接する越路鍛冶屋原遺跡、小さな谷を挟んで対峙する越路長塚遺跡もあり、越路長塚遺跡は11年度、越路鍛冶屋原遺跡は12年度に現地発掘調査を実施し、椎田勝山線バイパスに関係する文化財調査対象地は、築城町の椎田町域にある築城小迫遺跡と越路長塚遺跡間の部分を残すのみとなった。越路六郎遺跡、越路貴船遺跡の遺物整理業務については、現地発掘調査終了後、他の業務の合間を縫って断続的に行ってきたが、両遺跡の調査に携わった小池が12年4月の人事異動で前原市勤務となったことから、早急に報告書作成を実施する必要性が生じ、12年度に本格的な遺物整理業務・報告書作成を実施することで協議が整い、手続きをとった。

実際の本発掘調査は、字六郎部分の越路六郎遺跡を9年1月16日～3月27日、同年5月6日～6月24日の間に実施し、字貴船と字三反田にまたがる越路貴船遺跡は丘陵部を10年1月6日～3月31日の間に、字六郎との間の谷部を11年5月19日に補足調査として実施した。

なお、六郎遺跡の東、岩九川・極楽寺川の合流地点に近い大字坂本地区では、試掘調査を実施したものの遺構を検出しなかったために工事着工した部分がある。後に隣接地で縄文後期から古墳時代にいたる大遺跡を発見、再編パイロット事業によって調査するに至った。地山が石原に近い状況であったために結果的に不十分な試掘調査で終わってしまい、先入観を抱くことの怖さを思い知るとともに、町教育委員会をはじめとする地元の方々に申し訳ない気持ちでいっぱいである。ただ、不幸中の幸いは、当工区が数mの高さにおよぶ盛土区間であったことである。



第1図 周辺地形図 (1/10,000)

各調査年度および今年度の福岡県教育委員会の関係者は以下の通り。

	8 年度	9 年度	12年度
福岡県教育委員会			
総 括			
教 育 長	光安常喜	光安常喜	光安常喜
教 育 次 長	松枝 功	松枝 功	榊原英夫
指導第二部長		竹若幸二	
総 務 部 長	竹若幸二		岩本 誠
文化(財保護)課長	松尾正俊	石松好雄	柳田康雄
文化財保護室長	柳田康雄 (兼務)	柳田康雄 (兼務)	
同 参 事			井上裕弘
			橋口達也 (兼務(法務局))
同 課 長 補 佐	元永浩士	城戸秀明	平野義峰 (兼務(保健所))
同課長技術補佐	井上裕弘	井上裕弘	
同 参 事 補 佐	橋口達也 (兼務(保健所))	橋口達也 (兼務(保健所))	佐々木隆彦 (兼務(保健所))
	木下 修	木下 修	
	中間研志	中間研志	
	小池史哲	新原正典	
庶 務			
同課管理係長	黒田一治	黒田一治	
同主任主事	東 健二	鶴我哲夫	鎮守俊明 佐藤雅二
調査・報告書作製			
			小池史哲 (法務局兼務)
参 事 補 佐		小池史哲 (法務局兼務)	
技 術 主 査	飛野博文 (京築教育事務所)		飛野博文
主 任 技 師		小川泰樹	
技 師		進村真之	
整 理 担 当			
主 任 技 師			岸本 圭
技 師			大庭孝夫

調査にあたっては倉前上木事務所、京築教育事務所、推田町・同教育委員会、そして地元有志の方々の参加を得た。また、出土遺物については九州歴史資料館調査課長横田賢次郎氏の御教示を得た。記して感謝します。



第2図 周辺遺跡分布図 (1/50,000)

Ⅱ. 位置と環境

地理的環境

築上郡椎田町は福岡県東部、周防灘に面して位置し、北は行橋市と一部で接し、そこから西にかけては築上郡築城町と、南は豊前市と接する。平地に乏しく、纏まった低地は市街地を中心とする海岸部付近には限られ、そこから南、英彦山山系に連なる国見山へ向かって4条の狭小な谷が形成される。特に町東部、豊前市との境付近には幾筋かの丘陵が海岸部まで延びていて、遠方から見ると周防灘へ緩やかに落ちて行く山容が印象的でさえある。

ここに報告する両遺跡は、福岡県築上郡椎田町大字越路（こいじ）の字六郎・字貴船および三反田に所在する。越路地区は大部分境に位置する英彦山山系から流下して周防灘に注ぐ岩丸川下流域に位置し、川の左岸と右岸の一部が大字越路に含まれ、同じく英彦山山系から流下して周防灘に注ぐ城井川下流域の築城町大字築城との間にある洪積丘陵部一帯も含んでいる。越路六郎遺跡は洪積台地が浸蝕されて形成された丘陵の岩丸川を望む側の標高18～21m位にあり、越路貴船遺跡の調査地点は越路六郎遺跡から小さな谷を挟んだ北西側にあり、丘陵頂部標高23.5mから斜面裾部の標高18m前後にまたがり、現状は畑地・水田に利用されていた。

歴史的環境

椎田町では平成5年度より、町内約580ha強を対象とした国営再編パイロット事業が実施され、12年度に漸く終了したところである。この事業に伴う埋蔵文化財調査は計19万㎡近くにもおよび。ただ、通年にわたる調査に追われ、整理・報告はさほど進捗していない。また、相前後して将来的には東九州高速自動車道となる椎田道路新設・県営圃場整備事業などの大型開発も続き、それまで椎田町文化財協議会や築上西高等学校などが地道に続けてきた活動にも助けられて、ここ数年の成果には目を見張るものがある。以下では椎田町および周辺の歴史について、概略を記す。ただ、既報告分を中心とするために、未報告遺跡（註なし）については遺漏があると思うが諒解願いたい。

旧石器時代の纏まった遺跡は未発見であるが、断片的な資料がいくつか採集されている。調査で出土したものとしては行橋市南泉5丁目の鬼熊遺跡のスクレイパー・石核・ナイフ形石器、渡築築遺跡の水品製細石器類、豊津町川の上遺跡のナイフ形石器、刈田町富久遺跡のナイフ形石器、豊前市青畑遺跡のナイフ形石器、大平村土ノ熊遺跡の剥片尖頭器などがある。

縄文時代では、椎田町越路の岩丸川右岸に位置する山崎・石町遺跡の縄文後期集落跡を昭和61年に調査した後に、近隣の住居跡調査例が増加している。豊津町節九西遺跡、豊前市中村石丸遺跡、狭間宮ノ前遺跡、大平村東友枝曾根遺跡など大規模な後期集落が調査された。これらの遺跡の共通点としては、谷底平野が開けた位置の河岸に近接していて、後期中頃前後に集中することがあげられる。椎田町小原岩陰遺跡、西八田平原遺跡、豊前市吉木遺跡、築城町本庄大坪遺跡や、早川町の祇川上流域では縄文早期以降の遺物が出土しており、中期の遺物は海岸砂丘上にある椎田町東高塚弘法田遺跡で発見されていて、今後の類例増加が期待される。後期の遺跡では早川町上伊良原川端遺跡のように山間部の標高の高い遺跡もあるが、大半は谷底平野が開けた標高10～50mの、河川沿

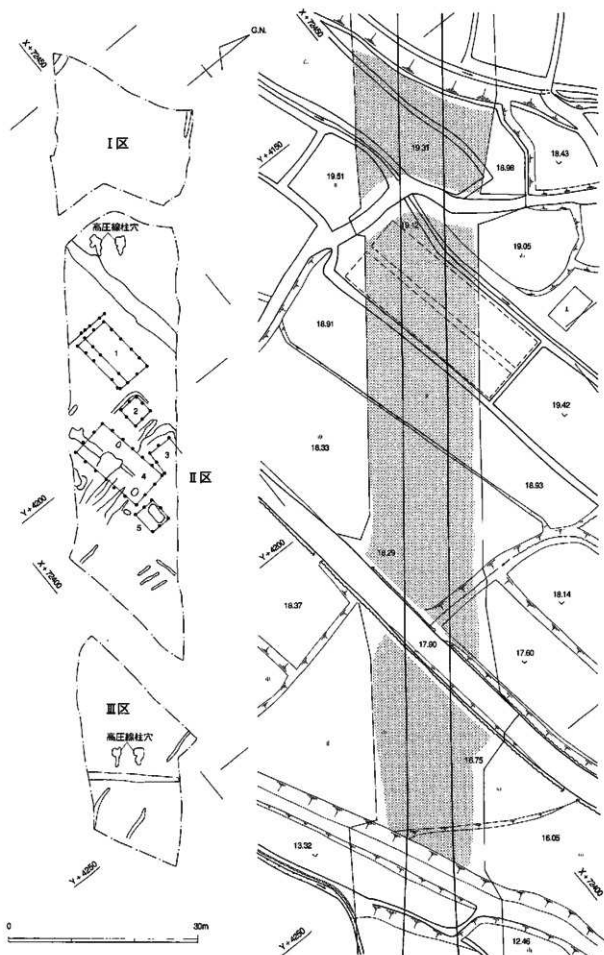
いに集落跡が発見され、推田町内では坂本下ノ森遺跡で集落跡が確認されている。晩期の資料は築城町十反遺跡²¹⁴の堅穴遺構などがあるものの、後期に比べると遺構発見例は減少する。

弥生時代の遺跡は築城町坂本遺跡²¹⁵、赤橋十反遺跡や、推田町の園場整備事業地内で発見され、至近の遺跡として越路竹ノ下遺跡などで後期住居跡などが発見されている。前期の例は行橋市長井砂丘遺跡²¹⁶にあり、大規模な石棺墓群に伴っていたらしい副葬用小壺や突帯文系土器、粘土帯土器などが出土している。推田道路関連で調査された辻垣長通遺跡²¹⁷などでは小規模な環壕などがあるが、確実な生活遺構は未発見で、周辺の調査が期待される場所である。また行橋市前田山・下神田・竹並遺跡²¹⁸や推田町広幡遺跡²¹⁹では貯蔵穴や住居跡が発見されている。犀川町タカデ遺跡²²⁰のような谷底平野においても前期の集落が発見され、前期段階での集落の広がりは爆発的ともいえる様相を示すが、中期後半以降の遺跡発見例は少ない。弥生時代終末頃の資料は増加してきているが、大規模な集落調査例はいまのところ乏しい。築城五反田遺跡と同じく推田山山線関係で発掘調査された上別府沖代遺跡²²¹では住居跡が、上別府西福寺遺跡²²²では溝から一括出土した瀬戸内系土器が発見されている。

古墳時代には、三角縁神獣鏡を10数枚副葬していた菊田町石塚山古墳をはじめ、前方後円墳が行橋市・京都郡地域に集中し、豊の国中心部の様相が顕在化する。豊前市・築上郡地域には前方後円墳は山国川流域にみられるのみである。後期の大形古墳も、築上郡地域では明治初期に壊された推田町福岡の海神社に巨石墳があったとされるものの、やはり山国川河1部などの地域に集中していて、英彦山・国見山山塊が裾を広げて海岸にまで繋がり、可耕地面積で劣る築上郡地域の地形的制約のためか、首長層の墳墓は明確でない。3世紀から7世紀代まで古墳時代各期の住居跡調査例は、築城町安武深田遺跡²²³、安武十井ノ内遺跡²²⁴、上別府沖代遺跡²²⁵、築城五反田遺跡²²⁶、推田町山崎遺跡²²⁷、日奈古寺尾遺跡²²⁸、沖代遺跡²²⁹などをはじめ、推田道路関連や推田町内の園場整備関連の発掘調査で増加しており、行橋市・豊前市・築上郡域でも多数発見されている。このうち5世紀代以降の住居跡のなかにはし字状に環道が続くオンドル状カマド遺構を伴う例があり、渡来系氏族との関連も想定されている。

古代の遺跡としては行橋市御所ヶ谷神龍石²³⁰（国史跡）、豊津町上坂廃寺²³¹（県史跡）・豊前国府・国分寺²³²（国史跡）、築城町船迫窟跡²³³（国史跡）、新古富村大ノ瀬官衙遺跡²³⁴（国史跡）などが知られている。御所ヶ谷神龍石は全長2.9kmの列石・土塁で囲繞して7箇所の門を配すが、中門・西門は方形巨石を積み上げた雄大なもので、ここ数年にわたって確認調査が継続されている。さらに最近大平村で唐原神龍石が新たに発見され、全長約1.7kmの列石・土塁が巡ると推定される。豊前国府は数次にわたる発掘調査がなされ、政庁のほぼ全体が調査され、正殿と4棟の脇殿がコ字形に配された政庁域約18,000㎡が保存・公開化されている。上坂廃寺は7世紀末頃に創建されたとされ、豊前国分寺は現在も寺院が継続していて主要部は調査していないが、講堂基壇の一部を確認している。船迫窟跡は豊前国分寺などに供給された瓦窯を含み、瓦工房跡などを伴うことから、平成11年初めに国史跡に指定された。大ノ瀬官衙遺跡は上毛郡（上三毛郡）衙跡と目される遺跡で、正倉は未発見ながらも比較的各施設がまとまっていることから、平成10年末に国史跡に指定された。なお、大宰府から豊前国府を経由して宇佐八幡宮方面に繋がる古代官道とみられる道路遺構が、新古富村垂水地区などで発見されており、延長線は大ノ瀬官衙遺跡に接している。側溝を伴った直線道路遺構は豊前市荒堀、推田町坂本正毛田遺跡²³⁵、越路二月田遺跡²³⁶、豊津町哲見樋ノ口遺跡²³⁷、行橋市天生田大池遺跡²³⁸、大谷車堀遺跡²³⁹でも確認されて、古代官道のルート復原が現実的になってきている。

- 註 1 行橋市教育委員会「鬼熊遺跡」(『行橋市文化財調査報告書』第27集、1999)
- 2 1999～2000年にかけて、行橋市教育委員会が工業団地造成に伴って発掘調査。
- 3 福岡県教育委員会「唐木川ノ上遺跡」Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ(『一般国道10号線維田道路関係埋蔵文化財調査報告』第4・7・9集、1995・96・97)
- 4 高田町教育委員会「富久遺跡Ⅱ地区」(『高田町文化財調査報告書』第17集、1992)
- 5 豊前市教育委員会「青畑原遺跡・永久遺跡」(『豊前市文化財調査報告書』第12集、1999)
- 6 福岡県教育委員会「上の隈遺跡」(『一般国道10号豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第6集下、1997)
- 7 福岡県教育委員会「山崎遺跡 尾久保原遺跡 日奈古・寺尾遺跡」(『豊田バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第7集、1990)
豊田町教育委員会「石町遺跡」(『豊田町文化財調査報告書』第1集、1988)
- 8 豊津町教育委員会「豊前国府および節丸西遺跡」(『豊津町文化財調査報告書』第9集、1990)
- 9 福岡県教育委員会「中村石丸遺跡」(『豊田バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第8集、1996)
- 10 豊前市教育委員会「秋間宮ノ下遺跡(遠橋編)」(『豊前市文化財調査報告書』第13集、2000)
- 11 小池史智・永水浩一「大平村東友枝留根遺跡の調査」(『考古学ジャーナル』)
- 12 豊田町教育委員会「小原谷Ⅰ」(『豊田町文化財調査報告書』第4集、1992)
- 13 福岡県教育委員会「吉木遺跡」(『福岡県文化財調査報告書』第83集、1989)
- 14 福岡県教育委員会「広束・安永遺跡」(『豊田バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第5集、1991)
築城町教育委員会「安永遺跡」(『築城町文化財調査報告書』第1集、1984)
- 15 福岡県教育委員会「堀ノ神遺跡・赤崎ヶ坪遺跡 十双遺跡」(『豊田バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第8集、1992)
- 16 定村貴二・小田富士雄「福岡県長井遺跡の発生と遷移」(『九州考古学』25・26号、1963)
- 17 福岡県教育委員会「辻垣島田・長連遺跡」(『一般国道10号線維田道路関係埋蔵文化財調査報告』第2集、1994)
福岡県教育委員会「辻垣ササマル遺跡」(『一般国道10号線維田道路関係埋蔵文化財調査報告』第1集、1993)
- 18 行橋市教育委員会「前田山遺跡」(『行橋市文化財調査報告書』第19集、1987)
- 19 行橋市教育委員会「下神田遺跡」(『行橋市文化財調査報告書』第17集、1985)
- 20 竹並遺跡研究会「竹並遺跡」、1979
- 21 福岡県教育委員会「広幡城跡」(『豊田バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第9集、1992)
豊田町教育委員会「広幡城Ⅱ」(『豊田町文化財調査報告書』第3集、1992)
- 22 厚川町教育委員会「城井遺跡群」(『厚川町文化財調査報告書』第3集、1992)
- 23 福岡県教育委員会「築城五反田遺跡 築城小迫遺跡」(『福岡県文化財調査報告書』第153集、2000)
- 24 福岡県教育委員会「上別府神代遺跡 上別府園田遺跡」(『福岡県文化財調査報告書』第152集、2000)
- 25 高田町教育委員会「石塚山古墳群埋蔵文化財調査報告」(『高田町文化財調査報告書』第9集、1988)
長嶺正秀編「豊前石塚山古墳」高田町・かんだ郷土史研究会、1996
- 26 森良太郎「上三毛のきみ」(『考古学雑誌』第83巻第1号、1997)
- 27 福岡県教育委員会「安武・深田遺跡 安武・上井の内遺跡」(『豊田バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第4集、1991)
- 28 同上所収
- 29 註7文献所収
- 30 行橋市教育委員会「御所ヶ谷神聖石」(『行橋市文化財調査報告書』第26集、1998)
- 31 豊津町教育委員会「豊前国府」(『豊津町文化財調査報告書』第3～10集、1985～93)
- 32 西井仁夫・高橋章「豊前地方の8世紀代の軒瓦について」(『九州考古学』第59号、1984)
- 33 豊津町教育委員会「豊前国府」(『豊津町文化財調査報告書』第3～10集、1985～93)
豊津町教育委員会「史跡豊前国府分寺跡」(『豊津町文化財調査報告書』第16集、1995)
- 34 築城町教育委員会「船泊宮跡群」(『築城町文化財調査報告書』第4集、1997)
- 35 新宮富村教育委員会「大ノ瀬下大坪遺跡」・「大ノ瀬下大坪遺跡Ⅱ」(『新宮富村文化財調査報告書』第10・11集、1997・98)
- 36 福岡県教育委員会「天生田大池遺跡」(『福岡県文化財調査報告書』第137集、1999)



第3図 越路六郎遺跡地形図および遺構配置略図 (1/600)

Ⅲ. 調査の内容

1. 越路六郎遺跡

越路六郎遺跡は越路地区に発達する東西方向の丘陵地の中、その中ほどの南側、低地に面して位置する。最頂部はすでに大きく削平されるようで、顕著な遺構を確認できなかったが、水田として利用されていた南東側では厚い包含層に覆われた遺構が稠密に検出された。調査中、包含層中でこの地域で稀少な緑釉陶器や越州窯系青磁を出土したために、人力で包含層を発掘していたが、予想以上の時間を消費して年度内に終了せず、人事異動と相俟って最後は重機で包含層除去を敢行した。遺構密度が高いことが災いして、すべての建物跡を把握し得たとは到底思えないが、確信できた建物跡を中心として土坑などを以下で報告する。

なお、調査では道路を境として便宜上Ⅰ～Ⅲ区に分けた。Ⅰ区は北西端、Ⅱ区は中央部、Ⅲ区は南東端の丘陵縁辺部である。主たる遺構がⅡ区に集中していて、Ⅰ・Ⅲ区には特記するような遺構がなかったことから以下の記述はⅡ区を中心として行う。

1) 掘立柱建物跡

上記したように本遺跡では厚い包含層が形成されていた。大きく2層に分かれ、上層は赤褐色土、下層は黒色土からなる。多くの遺構はそれらを除去した後に検出したが、一部に包含層上面で検出したものもある。また、柱掘形と柱当りの出土遺物を峻別しておらず、結果的に出土遺物は遺構造営の上限時期を示すものである。

1号掘立柱建物跡 (図版4・5、第5図)

本遺跡の最高所は上述したように大きく削平されていて顕著な遺構は検出できなかった。この建物跡はそこから一段下がった位置にある。方向としては北を意識したものか、あるいは地形に沿ったものか即断しかねる。ちなみに、豊前国府から宇佐八幡宮を経て豊後国府へいたる官道はほぼN57°Wの方位をとっていて、本遺跡の西約500mを走っている。

2×5間、南面庇の建物跡を想定した。梁行柱間はほぼ2.0mで、庇は1.5mの距離をもつ。桁行柱間は約1.9mを測り、庇を含めた全体の規模は約7.5×9.6mとなる。ただ、柱間は等間ではなく、一部で乱れており、柱穴も0.4m前後の円形を基本とする。西辺には0.9mの間隔を置いて櫓列が伴うようであり、東辺にも櫓列が存在した可能性がある。

出土遺物 (図版14、第10図1・2)

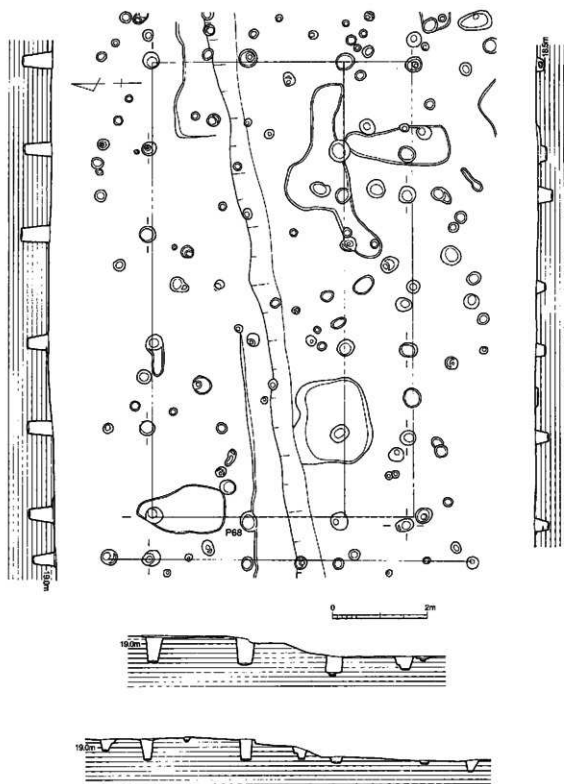
1はP68出土の瓦器碗で、1/4強が残る。内面は口縁部下0.6cmほどから下位に密な磨きを施し、外面では丁寧に横撫でを施した後に横方向の磨きを付すが、残存部を見る限りでは破である。器内は暗灰色、器表は暗灰色～灰黒色を呈するが、発色に規則性は見られない。焼成堅緻。

4は直接建物跡に伴うものではなく、P7としたごく浅い土坑状落ち込みから出土したものである。



第4図 越路六郎道跡遺構配置図 (1/300)

また、この遺構は建物に伴うと考えられる構列と重複するが、構列の性格・落ち込みとの先後が不明であるものの敢えて紹介しておく。口端部が外方へ小さくつまれる束播系摺鉢片で、片口の一部が残存する。胎土に溶融した黒色粒が顕著で、全体に青灰色に焼き上がるが、口端部付近だけが



第5図 1号掘立柱建物跡実測図 (1/80)

黒褐色となる。調整は非常に丁寧な横撫である。また、内面下部には黄緑色の光沢ある付着物がある。釉薬であろうか。

図示した以外には内黒となる黒色土器や古祖を示す瓦器碗小片などがある。

2号掘立柱建物跡 (図版4、第6図)

1号建物跡の南東、L字形に廻る2号溝状遺構を先に検出し、内部に建物跡があるのではないかと検討して想定したものである。先の1号建物跡や後述する4号建物跡のように調査段階から確認できたものではなく、なお一部に疑問のある遺構。南に広がる焼土はこれに伴うものかも知れない。

想定した建物跡は2×2間の側柱建物で、一辺長3m強の方形プランを有する。ただ、柱間は均等に配置されず、規模も小さい。ほぼ東西南北に方位をとる。

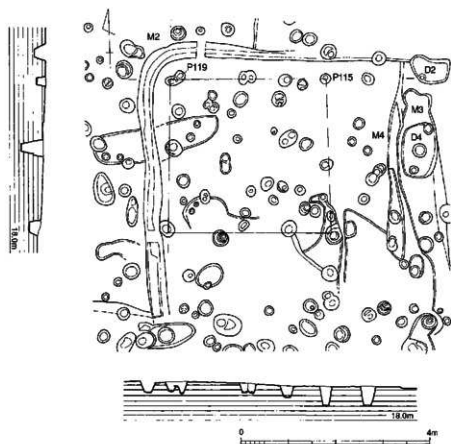
出土遺物 (第10図3・4)

いずれも土師器皿。3はP119出土の小片で、底部・体部の境が明瞭で、体部が外反、口縁部が内彎するもの。4はP115出土で1/4が残存する。肉厚である。ほかには白磁小片や径数cm大のスサ入り焼土ブロックが多く出土している。この建物跡が2号溝状遺構と一連のものであることはほぼ間違いない、その遺物も参考となる。

3号掘立柱建物跡 (図版4・5、第7図)

2号建物跡の東にあって、これも溝で画される。調査区際に位置することもある、これも柱配列は決して十分なものではない。2×2間、一辺長4mほどの方形側柱建物を想定した。南辺の軸上になお数基の柱穴があるが、柱間が揃わないために確信は持てない。

これも主軸が東西南北にほぼ揃う。



第6図 2号掘立柱
建物跡実測図
(1/80)

出土遺物（第10図5～8）

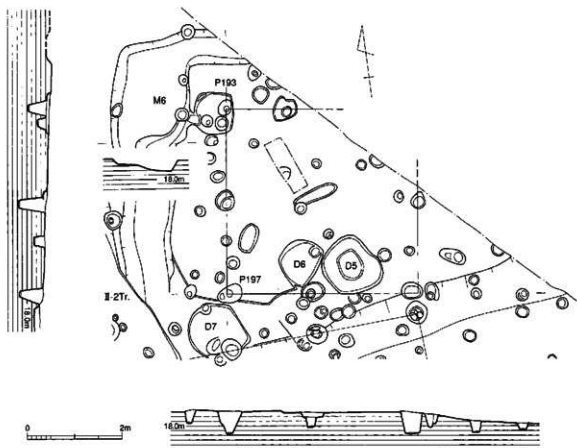
いずれも瓦器碗で、P193出土。5は小片で、外面は灰白色、内面が灰白色～暗灰色となる。器内は灰色で焼成が甘い。丁寧に横撫でを行った後に密な亀磨きを付すようである。6も小片。外面が灰黒色、内面は口縁部付近が灰黒色、以下は灰白色となる。砂粒を多く含み、胎上に縋まりがない。口縁部下位で小さく屈曲する特徴がある。これも磨きが密に施されるようである。7は1/3が残存する。胎上は非常に精良で、暗灰色となる。器表は暗灰色～灰黒色で、これも発色に規則性は見られない。全体に丁寧に横撫で調整の後に密な亀磨きを付す。8は青白磁合子小片で、1/2が残存。体部外面下位のみが露胎となる。釉は灰青色に発色する。

後述する6号溝状遺構が本建物跡の区画溝であるが、同様の瓦器碗などの小片が出土している。

4号掘立柱建物跡（図版4・5、第8図）

1号建物跡の南、現状では一段低い位置にあり、表土掘削時にすでに建物跡と認められたものである。先に記した2層の包含層のさらに上位から掘り込んでいるようで、層位的には本遺跡で最も新しい時期の遺構であるといえる。かつ、確認した建物跡の中では最も規模が大きい。北西隅近くでは焼土が、また南西隅付近では礫群がそれぞれ建物跡の内外にわたって広がっていた。また、底中にある焼土は包含層除去後に検出したもので、建物跡に先行する。

3×6間、6.4×12.6mの規模を有し、柱間は梁行・桁行ともに約2.2mを測る。ただ、梁行については、北側2間が2.2mであるのに対し、南端の間分は東西両辺ともに2mとやや小さくなっている。ただ、2間南面庇とするには母屋の柱が揃わない。

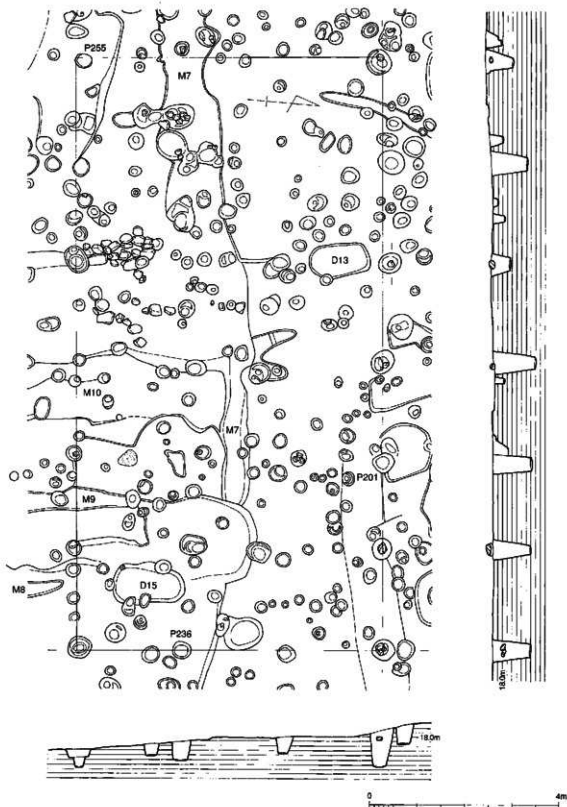


第7図 3号掘立柱建物跡実測図（1/80）

これもほぼ東西に軸をとっており、方位を意識した建物ようである。

出土遺物（第10図9～11）

9はP255出土の束播系摺鉢小片。口端部のみが黒色化し、内側上方へ小さくつままれる。10はP236出土の須恵器寛小片。口縁部は強く外反し、端部はわずかに変形するのみ。とてもつくりのよ



第8図 4号掘立柱建物跡実測図 (1/80)

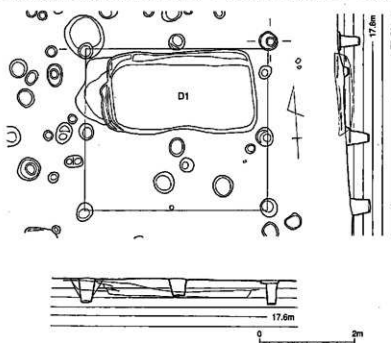
い土器である。11はP201出土の灰釉陶器かと思われる小片。体部が内彎しつつ、そのまま口縁部に
 いたって終わるが、口端部は丸く、変化を加えない。器肉は灰黄色に近い陶質である。器表が荒れ
 るが、内面に薄く、外面に厚く全面施釉され、釉は淡灰緑色に発色する。内面は本来的に施釉され
 ていなかったのかも知れない。

5号掘立柱建物跡 (図版4、第9図)

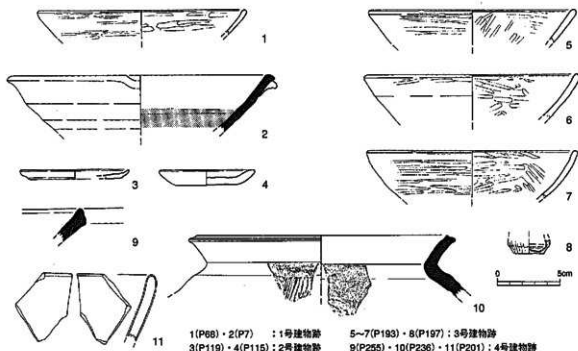
4号建物跡の東に位置し、1号土坑を覆うような位置にある。1号土坑との関係について積極的
 な材料を得ていないが、何より方位が一致することや、両遺構の北辺が重
 なることなどは両者が無関係ではないと思わせる。

建物跡は基本的に2×2
 間であるが、南辺は中間
 の柱がなく、1間になる。
 東西長約3.8m、南北長約
 3.6mでほぼ方形プランを
 有する。これらの柱穴も
 先の4号建物跡に似た埋
 土であった。

顕著な出土遺物はない。



第9図 5号掘立柱建物跡実測図 (1/80)



1(P68)・2(P7) : 1号建物跡
 3(P119)・4(P115) : 2号建物跡
 5~7(P193)・8(P197) : 3号建物跡
 9(P255)・10(P236)・11(P201) : 4号建物跡

第10図 掘立柱建物跡出土遺物実測図 (1/3)

2) 土 坑

本遺跡では数十基の土坑状遺構を検出しているが、中には遺構と言えないようなものや、顕著な遺物を出土しないものもある。ここではすべての遺構の紹介は行わず、抽出して行く。

1号土坑 (図版6、第11図)

先の5号建物跡の内部にある遺構で、長軸3.3m、短軸1.7m、深さ0.3mほどの浅い長方形プランを有する。横断土層では大きく上下2層に分離できるが、性格を推し量るほどの材料は得られていない。また、西小口部では下層遺構(23号土坑)が重複していた。

埋土上層は地山と見紛うような土質であった。

出土遺物 (第12図)

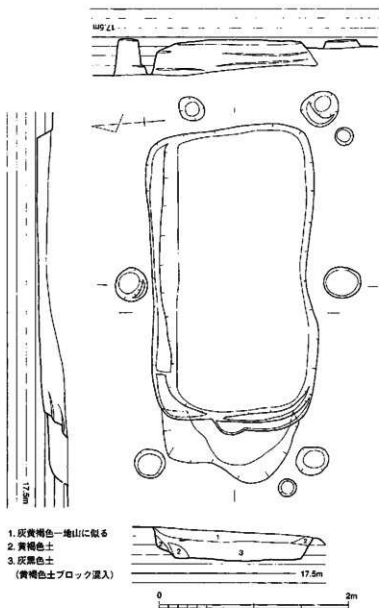
遺物は便宜的に上下2層に分けて取り上げたが、先の上層に厳密に対応するわけではない。

かなりの遺物を出土したが大部分は細片化していて、良好な出土状態とはいえないものである。図示したものの中、1・5・6が下層から、その他が上層から出土したものである。

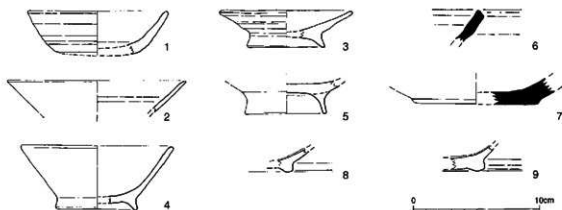
土師器 (1~5) 1・2は杯。1は体部が内彎気味に立ち上がるもので、外面にロクロ目が残る。2は体部が外反する薄手の土器で、これは内面にロクロ目が見える。両者ともに器表が荒れる。

3は皿でこれも器表の荒れがひどい。底部から口縁部にかけて直線的に開くものである。

4・5は碗。4は体部が直線的に、角度をもって立ち上がり、口端部が若干膨らむ。微細なロクロ目が顕著で、外面は化粧土を施すようである。内面の調整はとても丁寧。高台は短く外傾する。5は華奢な高い高台が付く。なお、外底面は篋切りの後に雑な撫でを施すようである。



第11図 1号土坑実測図 (1/40)



第12図 上坑出土遺物実測図1 (1号、1/3)

須恵器 (6・7) 6は小片。口縁部は特段の変化を加えていない。口端部からやや下位の外面が黒変する。7は束播系摺鉢。肉厚で、外底面に回転糸切り痕が見える。内面はよく使用されている。
輸入陶磁器 (8・9) 白磁玉縁碗であろう。8は焼成甘い小片。9は残存部上端に沈線が見える。

2号土坑

2・3号建物の間、北側に位置する。長軸0.8m、短軸0.5m、深さ数cmの不整形の浅い落ち込みで、土坑という呼称は該当しないかも知れない。

出土遺物 (第14図1～3)

土師器 (1) 碗底部付近の小片。高台は小振りで、体部は丸味をもつ。

黒色土器 (2・3) いずれも碗小片で、器表が荒れる。2は11縁部が弱く屈曲するもので、内面および口端部外面が黒色化する。3は体部が内彎しつつ立ち上がり、11縁部が直立するものである。これは内面のみが黒色化、外面は灰白色を呈する。

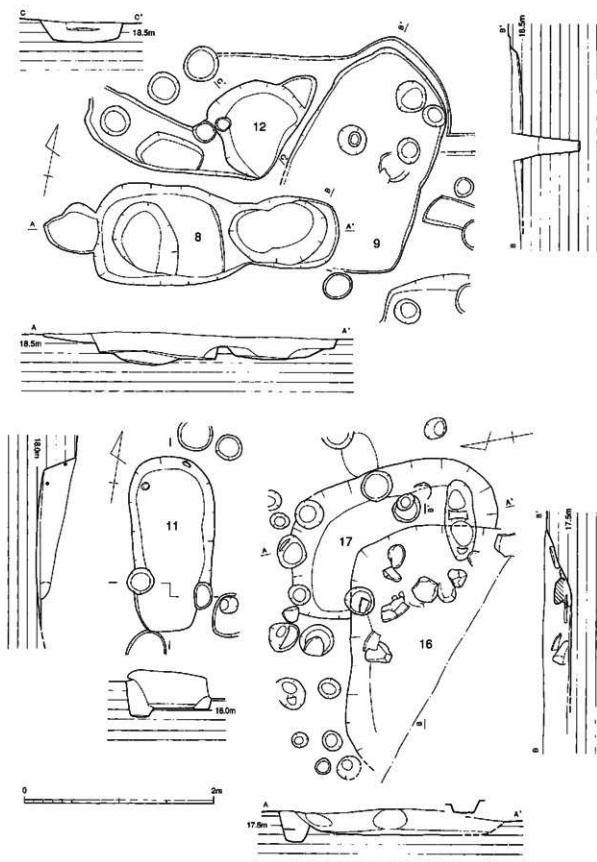
3号土坑

3号建物の北西隅柱穴と重複するが、先後関係は確認できていない。平面形は一辺長0.8～0.9mの隅九方形に近く、深さは0.1mを測る浅いもの。

出土遺物 (第14図4～8)

瓦器 (4～6) いずれも碗の小片である。4は口端部が緩く内折し、その部分の外面が黒色を呈するが、その他の部位は暗灰色を呈する。外面は中位付近に指頭痕が見え、粗雑な横位磨きを施す。磨きは下位で密に、上位では疎となり、螺旋状に施す。内面では横位(螺旋状?)に施した後斜位に刻むが、いずれにしても全面を磨きで埋めるといった風ではない。5の口縁部は内彎気味に終わる。これも器表は暗灰色～灰黑色を呈するが、焼成時の高湿のため発色に規則性は見られない。調整技法等は4に共通する。また、この両者は胎土が精選されており、丁寧につくられた感がある。6は口端部上面付近のみが黒色化、他の部位は灰白色を呈する。胎土粗く、先の瓦器との差異は歴然とする。内面は横方向に幅広い磨きを配するが、外面では篋削りのまま終わるようである。

土師器 (7・8) 大型の鍋で、く字形に外折する口縁部が非常に肉厚となり、反面、体部は極めて薄手となる。内面は黄褐色、外面は茶褐色を呈し、内面では焦げ、外面では煤の付着が見られる。



第13图 8·9·11·12·16·17号土坑实测图 (1/40)

いずれも小片であるが、8で試みた復原口径は40cmを越える。

5号土坑

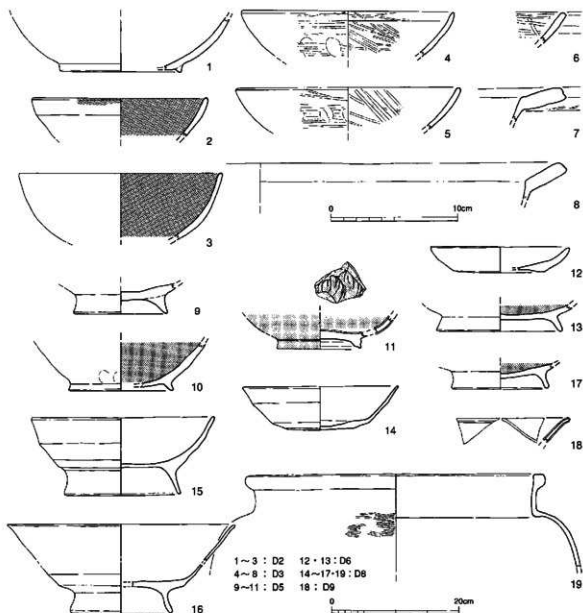
3号建物跡の南東隅付近、平面的には建物内に位置する。平面形は1.1～1.3mの不整円形を呈し、内部にやはり同様の0.5～0.6mの落ち込みがある。上段の深さは0.1m、下段のそれも0.1mほどの浅い遺構である。

出土遺物（第14図9～11）

土師器（9） ほぼ1/2が残存する碗。高台は外彎気味に、比較的高くつくられる。

黒色土器（10） 1/4が残存する碗。高台は小振りとなり、外方へ踏ん張る。内面は黒色化し、外面は黄白色を呈する。また、体部下端付近には指押さえと思われる痕跡があるが、器表が荒れて判然としない。

緑釉陶器（11） 非常に良質な緑釉陶器。高台は貼付で、疊付内側を削り込んで段をつくる。内



第14図 土坑出土遺物実測図2（2・3・5・6・8・9号、1/3・1/6）

眼では胎土に砂粒は認められず、火回りの関係で高台内側の器内が暗黄褐色、高台外側および内底部が暗灰色に発色する。調整は高台内に篋切り痕と思われる凹凸が、高台内外には横撫で痕が顕著に見える。内底面は判然としないが、丁寧に調整され、非常に弱い細線で文様(?)が刻まれる。なお、軸は高台内を除いて施され、濃緑色に発色する。近江産であろう。なお、同一個体と思われる体部片が茶褐色包含層から出土しており、同一個体として図示している。

6号土坑

5号土坑の西に隣接する。平面形は不整形で、軸長は0.8～1.0m、深さは0.15mほどである。

出土遺物(第14図12・13)

土師器(12) 口縁部は小片だが、底部はほぼ1/3が残存する皿。体部中位で角度を変えて立ち上がる。復原口径は11cmで、高さは2cmを測る。

黒色土器(13) 図示部が完周する碗。高台は高く、径も大きい。内面のみが黒色化する。

8号土坑(図版6、第13面)

1号建物跡と4号建物跡の間に位置する。不整形の大きな落ち込みを一段掘り下げて3基の土坑を検出したものだが、8号土坑としたものもお3基の土坑を含んでいて、明瞭に分離できなかった。中核となる土坑は長軸1.3m、短軸1.1mの長方形プランを有するもので、深さは最大で0.3mを測る。また、床面に円形に近い土坑が伴う。

出土遺物(第14図14～17・19)

土師器(14～16) 14は1/3が残存する杯。底部は丸味を有し、体部は中位に弱い稜をもつ。全体に器肉が薄く、ロクロ目が観察できる。二次的な火熱をよく受けていて、器表が荒れて変色する。15・16は碗。15は1/2弱が残る。高台は非常に高く、体部は小さく内彎して立ち上がる。外面にロクロ目が顕著である。16は体部と小片が残る口縁部が接合しないが図上復原した。これも高台が高く大きく、体部下位には明瞭な稜線が入って腰折れとなる。体部上半は非常に薄く、口縁部は小さく外反する。いずれも器表が荒れる。

黒色土器(17) 図示部が完周する碗。内面のみ黒化し、外面は灰白色～黄白色を呈する。

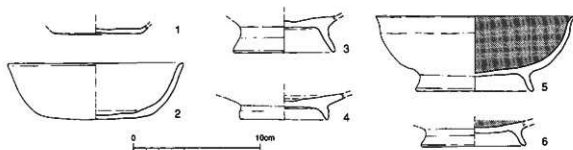
瓦器(19) 復原口径が47cmにおよぶ大型壺で、同一個体が多く出土していてこの遺構の主要な出土遺物である。口縁部は外側に粘土紐を添付して玉縁とし、直立する頸部からなで肩の体部へ続く。これも器表が荒れるが、外面には磨きさが観察できる。

9号土坑(第13図)

8号土坑と重複してその北に位置する。長軸約2.4m、短軸1.4mほどの長円形に近い平面形となる。深さは最大で0.2mに満たない浅いものである。内部に図示された柱穴は必ずしもこの土坑に伴うものではない。

出土遺物

輸入陶磁器(巻頭図版1・図版17、第14図18) 顕著な遺物がないが、越州窯系青磁小片を図示した。口縁部が緩く外反するもので、胎土は暗灰色緻密なもの。軸はごく薄く施され、暗灰緑色に発色する。また、これとは別に図示していないが底部片が出土している。胎土は暗灰色緻密。蛇の目高台を有するが、高台が剥落している。底部付近の外面は露胎、内面の軸は灰黄色に発色し、目跡が残る。



第15図 土坑出土遺物実測図3 (11号、1/3)

11号土坑 (図版6、第13図)

4号建物跡の西側に位置する。長軸1.9m、短軸0.9mの長方形プランを有するが、南辺は開鑿により削平されていて本来は今少し大きかったはずである。これも長辺上、南に寄った位置に対をなすかのように柱穴が位置するが、土坑との関係は把握できていない。

出土遺物 (図版17、第15図)

土師器 (1~4) 1は杯とは断定できない底部片。図示部は完存するが、磨滅が甚だしい。2は底部から体部へかけて丸く移行し、口縁部はやや外彎気味となる。丁寧につくられた土器である。口径13.8cm、器高4.5cmを測る。これも器表が荒れる。

3・4は碗で、高台の形状が大きく異なる。

黒色土器 (5・6) いずれも碗。5は体部が丸味をもって立ち上がり、口縁部は下方に弱い稜線をもって外彎する。器表が荒れ、調整痕は不明。内面のみ黒化し、外面は灰黄褐色を呈する。6もほぼ同様の土器で、図示部は完膚する。

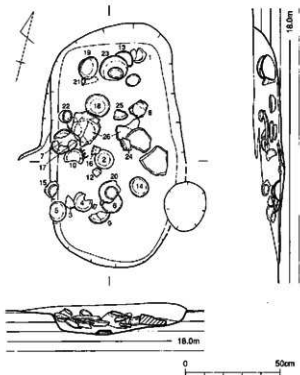
13号土坑 (図版7、第16図)

4号建物跡内の北西付近に位置する土坑。包含層を除去して検出したもので、層位関係から建物跡に先行する。長軸1.3m、短軸0.7m、深さ0.15mの小規模な丸味を帯びる長方形平面の上坑であるが、図示したような状態で土器が出土している。

出土遺物 (図版14、第17図)

あるものは正立、あるものは伏せられていて、配置および出土状況に規則性は見られなかった。

土師器 (1~22) 1~17は皿。1~12は体部から口縁部にかけて外彎傾向を示すもの、13以下は内彎傾向を示すものである。それぞれ、器肉の厚みの異なる個体が存するが、底部から体部への移行はおおむね丸く、平底傾向は1・6・8・10・11・15などに認められるが、明瞭ではない。

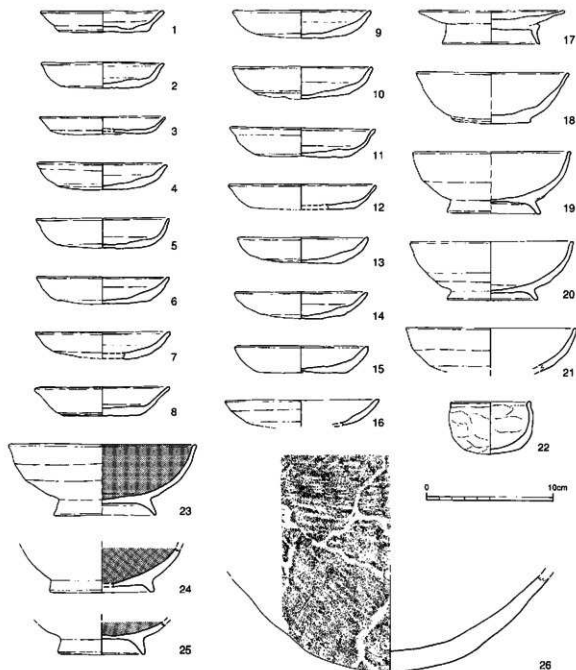


第16図 13号土坑実測図 (1/20)

口径9.6~12cm、器高はほぼ2cm内外に集約される。口径については小片を除けば11.4cmを測るものが最大である。量的には10~11cmの間がほぼ2/3を占める。これも器表の荒れが甚だしく、外底面の調整が確認できるものは3点に過ぎないが、いずれも篋切りで、7点に板状圧痕が残っている。

17は底部が完周する。口縁部から体部・底部へかけてはほぼ一連となり、浅い。高台は高く、脚端部が非常に薄く終わる。口縁部も同様である。

18~21は碗。18は底部を厚く削り出すようで、外底面に篋切りらしい痕跡がある。19・20は高台付で、丸味をもつ体部の形状は似るが、口縁部は前者が外彎、後者が直線的に終わるなど微妙に異なる。両者ともに体部下半に口クロ目が残し、19では高台内に篋切り痕も残る。21は高台を欠くが、20に似る。これらに共通する点は体部が比較的浅いこと、口縁部が明瞭な外平を示さず、わずかに玉縁状に変化を加えることなどである。高台も小型化している。



第17図 土坑出土遺物実測図4 (13号、1/3)

22はミニチュアの完形品。これも全体に器表が荒れる。

26は甕で底部付近が残るのみである。それも器表の荒れがひどいが、粗い叩きが施されていることは容易にわかる。内面は撫でであろう。削りは見えない。

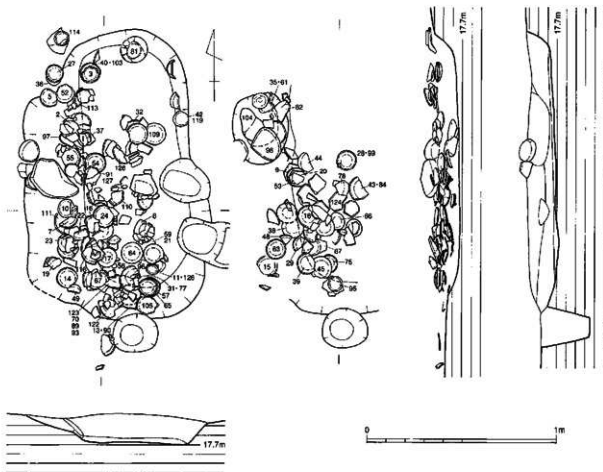
黒色土器（23～25） いずれも碗。23はほぼ完存する。丸味を帯びた体部と小さく外轉する口縁部、外方に踏ん張る小振りの高台をもつ。内面が黒化、口縁部付近の外面も一部が黒化する。器表が荒れる。24はさらに高台が矮小化する。25は黒色土器としたが、荒れがひどく確認できない。内面の一部が黒色化している。体部や口縁部の形状は土師器碗に共通する。

14号土坑（図版8、第18図）

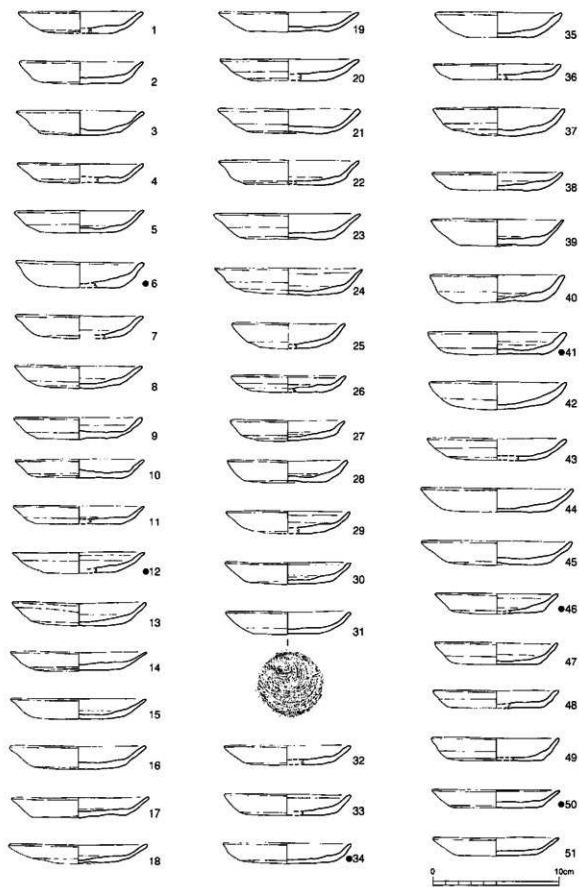
4号建物跡の範囲内、南東隅付近に位置する。これも包含層を除去して後に検出した遺構で、建物跡に先行することは検出面から間違いない。長軸1.5m余、幅1mほどの長円形に近い土坑だが、深さは最大で0.15mほどに過ぎない。

出土遺物（巻頭図版1・2、図版15～17、第19～22図）

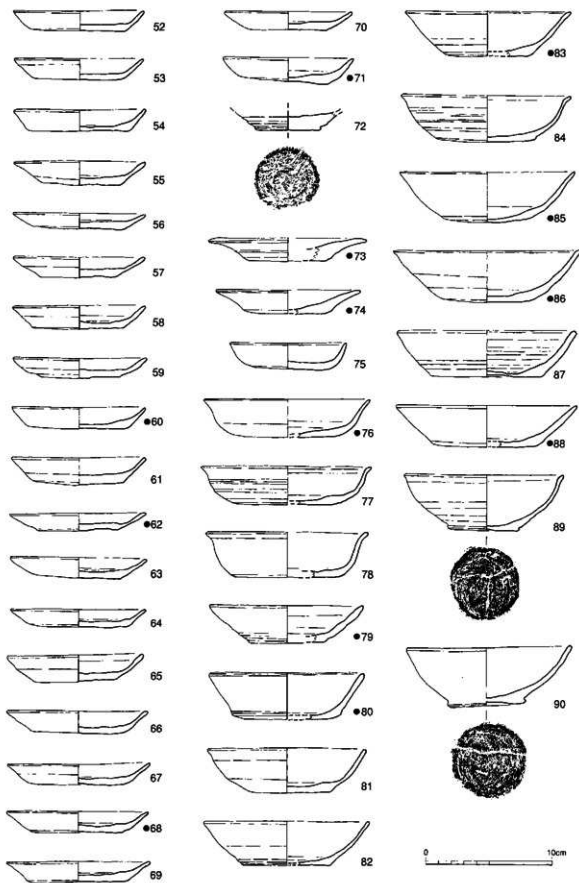
取り上げ番号で100番を越すほどの大量の土器が出土している。また、番号を付した以外に、「東側」として取り上げた土器もかなりあるが、これは土坑東に残しておいた畔をはずす際に出土した土器群である。中には14号土坑出土遺物に接合するものもあり、また完形に近いものもかなり出土していることなどから、この部分に14号土坑の一部が食い込んでいたのではないかと推測して、その出土遺物もここで報告する。図では遺物番号の前に●印を付している。



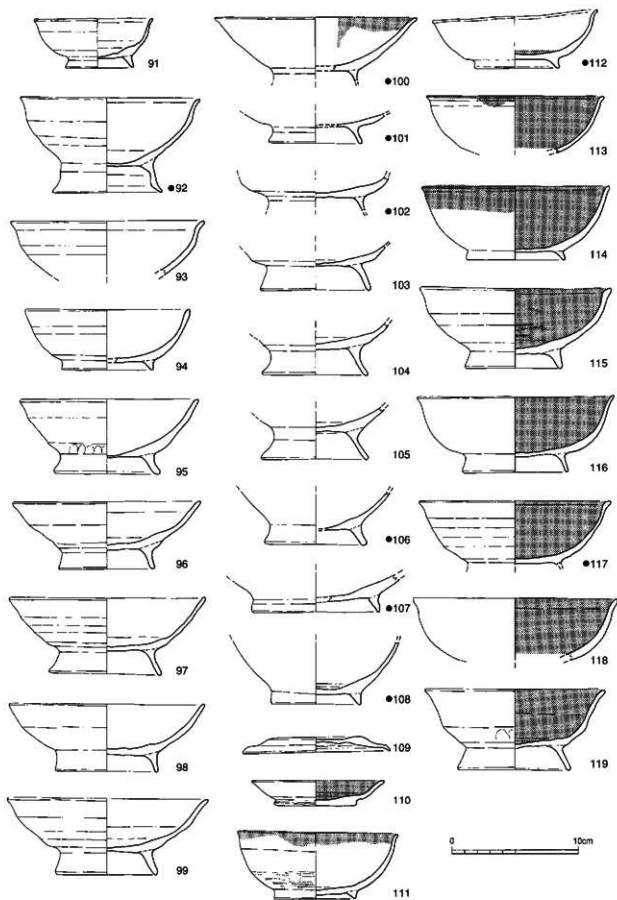
第18図 14号土坑実測図（1/20）



第19圖 土坑出土遺物実測図5 (14号、1/3)



第20圖 上坑出土遺物実測圖 6 (14号、1/3)



第21图 土坑出土遗物实测图 7 (14号、1/3)

土師器 (1~109・129) 1~74のような大量の皿が出土し、そのバラエティは3号土坑に共通する。1~45が丸底傾向を有するもので、中、1~24は口縁部が外彎傾向のもの、以下は内彎傾向のものである。また、46~71は平底傾向を有するもので、大部分が外彎する。明瞭に内彎するものは70・71である。法量的には口径9~12cmにわたるが、その4割強が10~10.4cmの範囲に収まり、10~10.9cmに範囲を広げればさらに全体の6割強となる。小片からの復原が若干あることを考慮すればその比率はより大きいものと思われる。

ここでは1点のみ糸切り底を有するものが見られる (31)。その形状は小さいながらも明瞭な底部を有し、体部は丸味をもって立ち上がりつつ直線にいたるものである。

72は平高台の底部で、碗とした方がよいのかも知れない。ただ、後述する黒色土器皿に同様の形態があることからここに置いている。底部には篋切り痕が残る。

73・74に図示したものは高台付皿の高台をはずしたもの。内面のラインを見る限りでは口縁部から底部まで一体化する。74は内面が灰赤褐色、外面が灰黄色を呈し、外面には化粧土が掛けられているのかも知れない。なお、これには外底面に篋切り痕が見られる。

75~88は杯で、これにもいくつかのタイプがある。ひとつは底部から体部へかけて丸く移行し、体部が急角度で立ち上がるもので、大小がある (75~78)。胎土に特異なものはない。79~88は強弱があるものの平底あるいはそれに近い底部を有し、角度をもって体部が立ち上がる。これにも体部が内彎して碗状形態を呈するもの (81・82・84)、直線的に立ち上がるものがある。底部の切り離しを確認できるものはいずれも篋切りである。また、体部下位にクロロ目を残すものが多い。

89~108は碗。89・90は無高台で、強弱があるもののいずれも体部が内彎する。口縁部の形状は異なるが、いずれも底部に糸切り痕を残す。これらも胎土に特異な点はない。

高台付碗にもいくつかの形態がある。91~93は大小があるものの、体部が丸く、口縁部が小さく外反する点で共通する。ただ、体部下半の膨らみは見られない。高台が高く、2cmを測る。

94は体部から口縁部にかけて内彎するもので、体部は浅い。高台も小さい。

95~100は内彎する体部に外反する口縁部を有するもので、順次湾曲が薄れ、直線的になり、大きく、浅い体部へ変わって行く。95では体部下端に指頭痕が見え、100は内面の一部が黒色化する。96・98は体部中位に鋭い稜線をもつもの。103・104は体部下位に稜をもつ。高台は先の両者の中間で、1cm強~2cmを測る。これらはいずれも器表が荒れて、調整の細部は不明であるが、クロロ目を残すものが多い。

109は1点のみ出土した蓋でほぼ完形品である。8世紀後半~9世紀前半頃の須恵器杯蓋に似るが、時期的に相当の隔りがあることから無関係なのであろう。天井部には篋削りの痕跡がある。

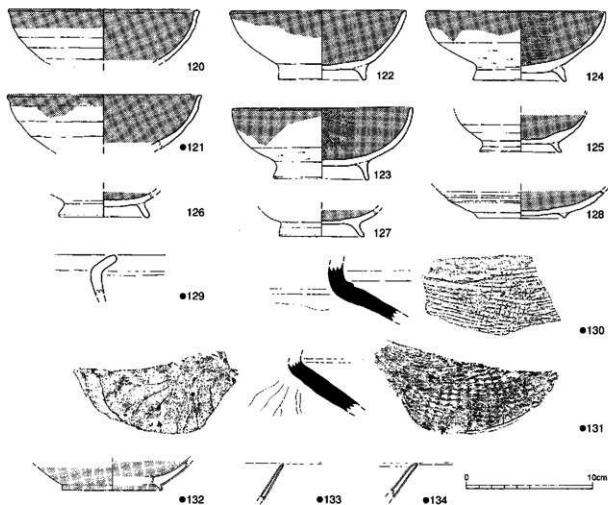
129は口縁部がく字形に外反する甕で、小片のため傾きは任意。

黒色土器 (110~121) 110は皿。底部に高台を削り出したもので、内面のみ黒色、外面が黄褐色を呈する。高台には篋切り痕・板状圧痕が残る。

111~128は碗。111は口縁部付近の内外面が、112は底部付近の内外面が黒色化するだけだが、二次的な火熱を受けたものと思われるのでここに示した。また、前者の脚端部は多く欠失していて、碗の形状が本来のものか確信を持ってない。111~119は若干の変異があるが口縁部が外反するもの。多くは体部が丸味をもち、内面のみ黒色化している。ただ、119は腰折れとなる。

120・121も外反傾向をもち、端部を玉縁状とする。122は痕跡程度に小さく外反させる。

123・124は体部から口縁部にかけて内彎し、口端部が薄くなって終わるもの。体部が浅く、また



第22図 土坑出土遺物実測図 8 (14号、1/3)

外面下端に施削りが施されるなども共通する。128の高台は非常に小さいが、磨滅していて本来のものか確認できない。

須恵器 (130・131) いずれも焼成甘い莖の小片で、内面は撫であるいは指撫で調整する。

緑釉陶器 (132) 1/4弱の残片。高台は貼付のようで、華奢な造りである。焼成が甘いせいか、胎土は黄白色軟質の土師質に近い。ただ、体部上方は赤味を帯びる。釉は黄緑色に発色し、薄いがペンキを塗ったような感じになる。また、高台内まで含めて全面に施釉するようである。

輸入陶磁器 (133・134) これも越州窯青磁小片。133は器内薄く、口縁部が小さく外反する。暗灰色の緻密な胎土に深い黄緑色釉を施す。134は肉厚となり、口端部が緩く外折する。これも胎土は暗灰色の緻密なもので、釉は灰黄緑色に発色するが色ムラがあり、口端部付近が暗褐色となる。

15号土坑 (図版 8・9、第23図)

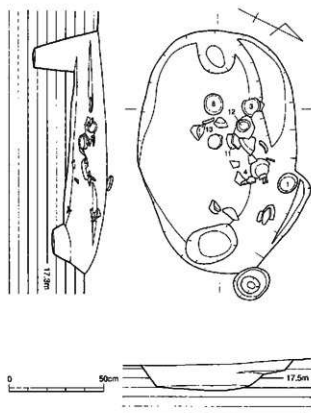
4号建物跡東南部に近く位置する。長軸1.3m、短軸0.8m強の長円形に近い平面プランを有し、深さは最大で0.2m強である。両小口に位置する柱穴との関係は確認できていない。土器は図のように北側から投棄されたような状況で出土し、土坑本来の時期を示すものではない。

出土遺物 (図版17、第24図1～13)

土師器 (1~11) 1~9は皿。1~5は底部から体部への移行が丸味をもつあるいは境が曖昧なもの、6~9は底部が平坦化し、体部との境が比較的明瞭になるものである。口径9.1~9.8cm、器高1.3~2.4cmを測り、口径の中心は10~10.5cmで半数強を占める。また、底部の切り離しが確認できるものはすべて寛切りである。

10・11は碗。10は体部が丸く、口縁部が小さく外彎する。体部下半にはロクロ目が目立ち、黄白色を呈する。11は図示部がほぼ完存する。高台は肉厚で大きい。

黒色土器 (12・13) 12は見込み付近のみが灰黒色、その他の部位は灰黄色を呈するもので、あるいは土師器であるかも知れない。13は高台を欠く。体部は丸く、口縁部は小さく玉縁状につくる。内面および口縁部付近の外表面が黒化し、体部下半には指頭痕、その下に鋭切り痕が見える。



第23図 15号土坑実測図 (1/20)

16号土坑 (図版9、第13図)

4号建物跡西辺に近い南側に位置する。後述する17号土坑と重複し、それを切っている。調査区境に位置していて、半分ほどを検出したようである。確認した範囲は長軸2.3m以上、短軸2m以上で、平面形は方形に近い。深さは最大で0.3mほどである。

東辺小口には煙が置かれていて (?), その周辺から銅類が出土した。

出土遺物 (図版17、第24図14~18・28)

土師器 (14~16・18・28) 14は皿で約1/4が残存する。口縁部がわずかに外彎する。復原口径9.6cm、器高は2.0cm。

15は底部の1/3が残存する杯で、口縁部はほとんど残っておらず、復原口径には不安がある。肉厚で、底部・体部間に明瞭な境を有する。寛切りのようであるがはっきりしない。

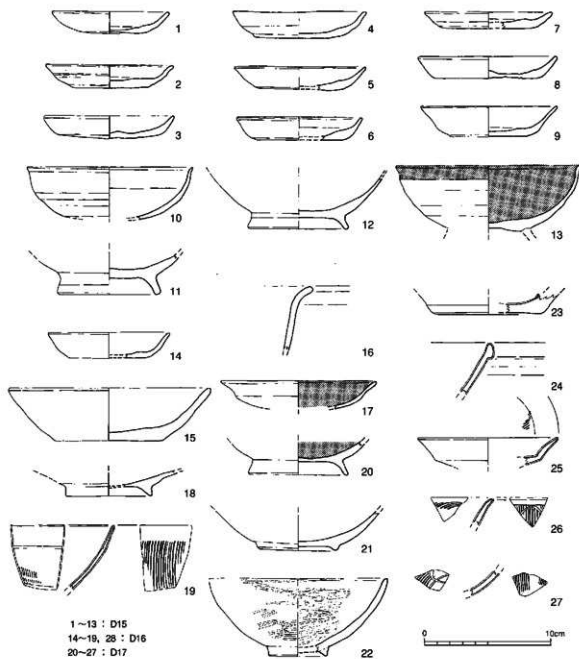
16は口縁部が短く外彎する甕だが、小片のために傾きは不安がある。

18は碗の底部片で、脚端部を欠いているかも知れない。

28は底部を欠くが、ほぼその全体を窺える甕。口縁部はく字形に強く外折し、体部は丸くなる。頸部付近に指頭痕が顕著で、内面全体と体部外面は刷毛目で調整する。

黒色土器 (17) 1/4が残存する皿。口縁部が外反し、底部は丸くなるようである。内面が灰黒色、外面が灰褐色となる。器表が荒れていて、細部は不明。

輸入陶磁器 (19) 同安楽系青磁碗の小片である。胎土は緻密で、造りはシャープ。緻密な飾描文を刻み、釉はライトブルーに発色する。



第24圖 土坑出土遺物実測図9 (15~17号、1/3)

17号土坑 (図版9、第13図)

16号土坑に切られる土坑で、長軸2.3m、短軸1.4m、深さは最大で0.3mを測る。平面形は丸味の強い長方形である。いくつかの柱穴が重複するが、これらも確実に土坑に伴うものではない。上坑の東に焼土が検出されたが、関係は不明である。

出土遺物 (巻頭図版1、図版17、第24図20~27)

出土遺物の中に「南西」と注記されたものがある(21・22・24・26・27)。これは排水のために調査区境に掘削した溝から出土したもので、土坑に伴う可能性が高いと判断してここで紹介する。

黒色土器 (20) 図示部分はほぼ完周する。内面が黒色、外面は灰褐色を呈する。

瓦器 (21・22) いずれも碗。21は黒色化せず、灰白色であるが、見込み付近に施磨きが観察できることから瓦器とした。22は1/4が残存する。胎土精良で、造りもシャープである。器表は暗灰色を呈し、内外面に密に施磨きを施す。ともに高台は小さく断面三角形に近い形となる。

輸入陶磁器 (23~27) 23は越州窯系青磁の底部片。約1/4弱が残存する。平底で、底部外縁に幅0.3cmの狭い面を有し、さらに0.6cm上方でわずかに段をつけて削り込む。外面は残存範囲ですべて露胎、内面には灰黄緑色の濁った釉を施す。器肉は外底面が灰黄色、内定面付近が明灰赤色になり、焼成は甘いようである。なお、内底面にわずかに目跡が見られ、外底面にもトチンによって変色した部分が大きく2箇所見られる。

24は玉縁をもつ白磁碗小片。

25は同安窯系青磁で約1/4が残存。胎土精良で、非常にシャープにつくられる。見込みに描描文が若干残り、青み帯びる淡黄緑色透明釉を掛ける。

26・27は同一個体と思われる青磁碗小片。口縁部は緩く外彎し、外面には片切り彫りの蓮弁文とその上面に描描直線文を、内面にも描描文を刻む。体部片では内面に片切り彫りの曲線と描描文を、外面には描描文が刻まれる。胎土は暗灰色、釉は灰緑色透明に発色する。

19号土坑 (第4図)

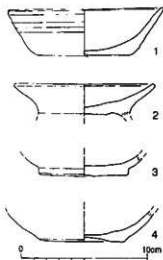
1号土坑の南に位置する。この付近には大量の礫が散在していたが、その礫に一部が覆われていた。平面形は長軸2.3m、短軸1.1mの長円形を呈し、深さは北西で0.1mほど、南東部では数cmに過ぎず、土坑とはいえないような落ち込みである。

出土遺物 (第25図)

土師器 (1~4) 1は2/3が残存する杯。底部は平底で、体部が直線的に開く。外面はロクロ目が日立ち、内面調整は丁寧である。また、体部下端、底部外周は施磨きを施す。器表が荒れている。

2は約1/2が残存する皿。内面の調整は丁寧で、脚部が失われるようである。

3・4は体部を失うが、立ち上がりの内縁度から碗としておく。3は底部に高台を削りだすが、外底面の調整は磨滅して確認できない。ただ、板状の圧痕が見られる。4は3と異なり上げ底となり、施磨き痕が観察できる。二次的火熱を受けて変色が著しい。

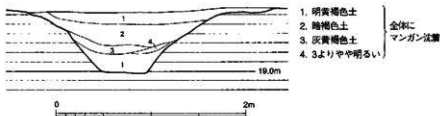


第25図 土坑出土遺物実測図10 (19号、1/3)

3) 溝状遺構

1号溝状遺構 (図版10、第26図)

I区の西北端は大きく削平されて遺構としてはかつての高圧線の支柱だけであるが、地形的に下降して柱穴群が現れる部分を画するかのようになっている。調査区を東西に横断し、建物跡群と平行な位置にあるが、地形に沿っただけである可能性が高いと思われる。



第26図 1号溝状遺構土層図 (1/40)

規模は全長24m強を核

出したが、非常に新しいものと判断して発掘はトレンチ調査で終わっている。トレンチの観察では、最大上端幅2.6mを測るが、北側は非常に浅い段がつき、本体部分はほぼ幅2mほどに復元できる。深さは0.7mで、底は幅0.5mほどの平坦面となる。

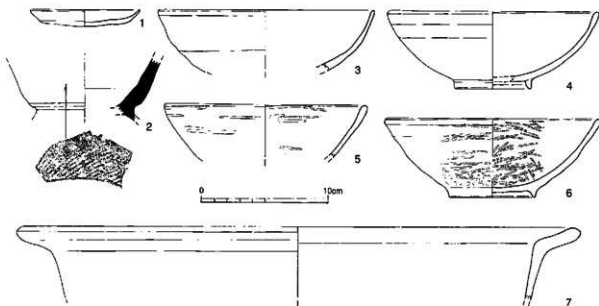
埋土は地山上に似て、自然堆積層と呼べるような土層は確認できていない。出土遺物もなく、掘削から埋没までが短期間に、かつ人為的ななされたもののようである。

2号溝状遺構 (図版4・10、第4図)

2号建物跡を画するL字形の溝。幅0.3m、深さ0.25mの小規模ながらしっかりしたもので、東西・南北両方向に6mほどを検出した。東端は不明瞭となるが、3・4号建物跡の間には複雑に溝が掘削されていて、その付近で南へ曲がっていたものと思われる。南端は後世の開墾で削られる。

出土遺物 (図版17、第27図)

土師器 (1・3・7) 1は底部が丸底傾向をもつ皿で、1/4が残存する。復原口径8.6cm、器高1.3cmを測る。器表荒れているが、外底面は板状研痕がわずかに見える。



第27図 溝状遺構出土遺物実測図1 (2号、1/3)

3は底部を欠くが、ほぼ1/4が残存する碗。体部は丸く、口縁部には変化を加えない。これも器表が荒れている。

7は口縁部がく字形に外折する鍋で、1/4が残存する。焼成甘く、器表も荒れるが、外面は撫でようである。

瓦器(4~6) いずれも碗。4は体部上半の外面のみが部分的に黒色となるものの、他の部位が灰白色を呈していて一応瓦器とした。体部は丸く、口縁部には変化を加えない。高台は小さく、わずかに外彎する。これは小片であり、法量には不安がある。5は1/3が残存する。口縁部から口縁部外面付近(幅約1cmほど)が灰黒色となり、その他は暗灰色となる。器表が荒れるが、内外面に密に施磨きが施されるようである。6は1/4が残存する。器表は淡灰色~灰黒色となるが色ムラがある。体部は内彎傾向をもつが、かなり硬直化したものとなり、内外面に密に施磨きを施す。また、体部外面下端付近には指頭痕が見える。

須恵器(2) 長胴の壺であろう。外面に叩き、内面は横撫でで仕上げる。焼成は良好。

3号溝状遺構(図版4、第4図)

3・4号建物跡の間にある3本の溝の中、最も西に位置する。北端は不明瞭であるが2号溝の延長を超えて北へ延びることはないようである。3号溝との先後を確認できていないが、最大幅0.4m、深さは数cmである。

4号溝状遺構(図版4、第4図)

3号溝の東に位置する。これも2号溝を越えないようで、内部に土坑や柱穴が重複する。最大幅0.9m、深さはやはり数cmに過ぎない。

5号溝状遺構(図版4、第4図)

2号建物跡の南東隅柱穴と重複するが、これも先後は確認できていない。幅0.3m、深さはやはり数cmで、延長も最大で2mに過ぎない。

6号溝状遺構(図版4、第4図)

3号溝の東にあって、南端部ではそれと重複する。発掘時は3号溝が新しいものと判断していた。これは3号建物跡を巡る排水溝と考えられ、北で直角に曲がる。南北部分で最大幅1.7m、深さ0.2m、わずかに検出した東西部分では幅0.7m、深さ0.1mほどである。

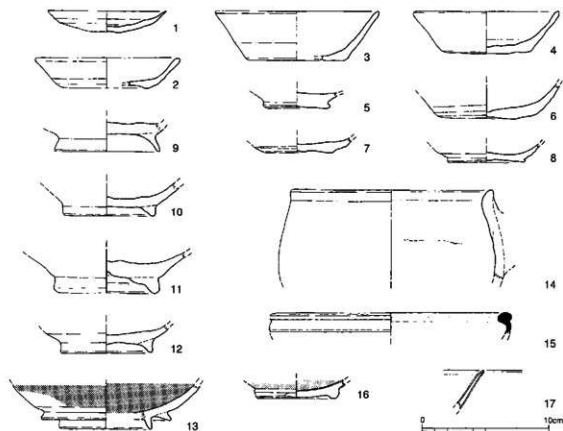
7号溝状遺構(図版4、第4図)

4号建物跡の区画内、南に偏した位置を東西に走る溝。幅1m強、深さ0.1m弱の浅いものである。全長は12mほどを確認した。

出土遺物(巻頭図版1・2、第28図)

土師器(1~12・14) 1・2は皿。1はほぼ完存するが、口縁部が剥離するようである。底部は丸底に近く、ロクロ目が目立つ。2は1/4が残存、復原口径11.4cm、器高2.4cmを測る。両者ともに器表が荒れる。

3・4は杯。3は1/3が残存し、復原口径12.8cm、器高は3.9cmである。体部は直線的に立ち上が



第28図 溝状遺構出土遺物実測図2 (7号、1/3)

り、下位にはロクロ目が見られる。4はやや小型であるが、似た器形となる。また、この外底面には施切り痕が見える。この両者は二次的な火熱を受けてひどく変色する。

5は円盤貼付状の底部。6はロクロ目が顕著である。7・8では外底面に施切り痕が残る。

9～12は碗。10は見込みにロクロ目が顕著で、脚端部は欠いているかも知れない。11は肉厚で、高台の形状も特異である。12は外底面に施切り痕が見える。

14は把手付きの甕ようだが剥離している。内面に粘土紐接合痕があり、外面は甕であるようである。

黒色土器 (13) 外面の一部が二次的な火熱により赤変するが、大部分が黒色を呈する。高台と体部の境に鋤状の突帯を付すもので、密教という六器を模倣したものであろうか。

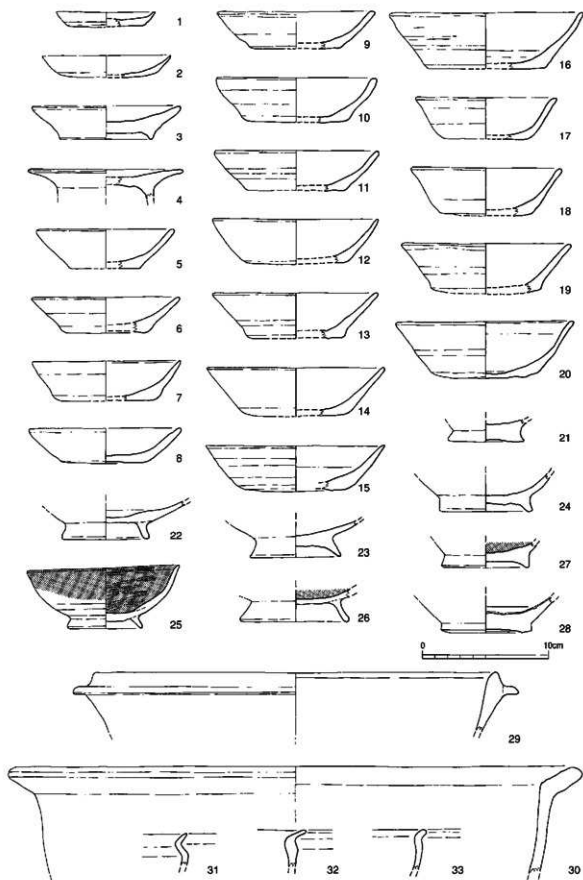
須恵器 (15) 玉緑口縁とするもので、京都篠原産であろう。胎土精良で、肉眼では砂粒が見えない。調整も丁寧に横撫でされ、口縁部下に浅い沈線を刻んである。小片である。

緑釉陶器 (16) 1/4弱の残片。内底面は丁寧に撫で調整される。高台は削り出しのようで、中に綾線をもつ。外底面はとても丁寧に回転磨削を行っている。器肉は灰黄色陶器質に焼かれ、胎土は非常に精選されており、わずかに微細な長石粒が散見されるくらいである。釉は明黄緑色に見えるが、非常に薄く施釉されるために素地の色が反映しているのであろう。

輸入陶磁器 (17) 口縁部を小さく外折する越州窯系青磁小片。暗灰色緻密な胎土で、灰黄緑色釉を全面に掛ける。ただ、口縁部付近は暗褐色となる。

8号溝状遺構 (図版4、第4図)

7号溝および等高線に直角方向に走る溝群のひとつで、4号建物跡の東辺南に位置する。これら



第29图 溝状遺構出土遺物実測図3 (8号、1/3)

はいずれも包含層下層（黒色土層）を除去して検出したものであるが、掘り込みの層位は確認できていない。この溝は全長4mほどを確認したが、南端付近は不明瞭となっている。幅は最大で0.4mほど、深さはやはり最大で0.2mを測る。

出土遺物（図版17、第29図）

土師器（1～33） 1・2はいずれも寛切り痕を残す皿。1は1/4が残存し、底部は平坦となる。2は底部が丸味を有するもの。

3は肉厚で、高台が低い。4は非常に浅い。皿内面は丁寧に調整される。

5～20は杯。5～16は体部から口縁部にかけて内彎傾向を有するあるいは直行するもので、17～20は外彎傾向をもつ。底部・体部の境はほぼ明瞭となる。全体にクロロ日が目立ち、底部切り離しを確認できるものはいずれも寛切りである。板状圧痕を有するものもある。

21～24は碗。21は底部のみであるが、碗形になるものと思われる。外底面は寛切りである。22は体部下端に施削の痕跡がある。この端部はあるいは生きていて皿であるのかも知れない。

29は羽釜。小片からの復元で、口径には不安がある。口縁部は内傾する甘い面を有し、立ち上がり非常に短い。鋳も貧弱なものである。器表が荒れる。

30は鍋。口縁部がく字状に外折するもので、屈曲部内側の稜線はシャープである。体部内面は丁寧に撫でられている。

31～33はいずれも小片の甕。

黒色土器（25～27） これも碗である。25は約1/2が残存する。体部は丸く、口縁部がわずかに外反する。器表が荒れるが、内面では部分的に施磨きが観察でき、内面と外面上半が黒化する。26は内面のみ、27は見込み付近のみが黒化する。

輸入陶磁器（28） 1/2強が残存する白磁碗。見込み外周に沈線を刻み、残存する外面は露胎である。他に同安窯系青磁小片がある。

9号溝状遺構（図版4、第4図）

8号溝の西側を併走する溝で、これは南端が不明瞭である。幅は最大部分が1mを超えるが、その部位での深さは0.1mに満たない浅いもので、中央付近に幅0.4m、深さ0.05mほどの小溝がさらに掘り込まれている。

出土遺物（図版18、第30図1・2）

土師器（1） 1/3が残存する杯。復原口径12.3cm、器高3.6cmを測る体部は内彎して立ち上がり、端部も肉厚である。外底面には寛切り痕を残す。

須恵器（2） 約1/5の杯蓋小片で、つまみの有無は不明である。天井部から口縁部への移行部分は大きく変化した。口端部は一見鳥喙状を呈するが、よく見ると外側に面を付して接地部をわずかにつまみ出しただけで形骸化する。

10号溝状遺構（図版4、第4図）

9号溝のさらに西側に併走する溝で、これらの3条の溝はその間隔がほぼ1mと等しい。10号溝はこれも南北両端の形状がはっきりせず、幅は最大で1.4m強、深さ0.1mに満たないこれも浅いもの。

出土遺物（第30図3）

土師器（3） 口縁部は小片で図上復元した。体部は直線的に立ち上がり、口縁部は強く外反。

11号溝状遺構 (図版4、第4図)

10号溝の西側に隣接し、やはり併走する。7号溝を切るようで、それと交わる付近から南西にかけては炭が散乱していた。最大幅2.4m、深さはやはり数cmの浅いもので、南半部には中央付近に幅0.1m強、深さ数cmの小溝が伴う。

出土遺物 (巻頭図版1)

図示していないが越州窯系青磁碗と思われる小片が出土している。外反するもので体部中位であろう。器内は精良で灰白色を呈し、釉は灰黄緑色～灰褐色に発色する。

12号溝状遺構 (図版4、第4図)

1号土坑北西に位置し、この溝の西端は礫群下に潜る。地形に沿って掘削されていて、ほぼ南北方向に走る。幅0.5m前後、深さは0.1mほどである。

13号溝状遺構 (図版4、第4図)

12号溝の南に位置し、未登録の溝・14号とともに12号溝に対して一定の位置関係を保っていて、これら4条の溝は一連のものと思われる。幅0.4m、深さ0.1mに満たない浅い遺構で、3m強の長さを検出した。

出土遺物 (第30図4・5)

土師器 (4・5) いずれも碗底部のみで、器表が荒れる。5は残存部から判断すると体部が膨らみを有さないようである。

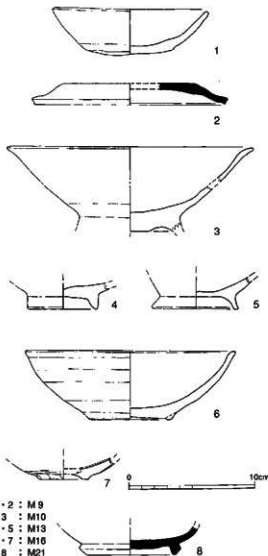
16号溝状遺構 (図版3、第4図)

Ⅲ区北隅の土坑を当初溝状遺構と呼称していたもので、このまま報告しておく。軸長1.1mの不整円形を呈し、深さは0.1mに満たない浅いものである。

出土遺物 (図版18、第30図6・7)

黒色土器 (6) 口縁部付近内側から外面にかけて黄白色、内面中位以下が灰黒色を呈する碗。体部は丸味を有し、口縁部が小さく外反する。高台は低く、小さい。

輸入陶磁器 (7) 1/4ほどの高麗青磁小片。胎土は精選され、器内は赤味帯びる灰褐色を呈し、陶器質に近い。高台は低く、形状も不整形といっても良いものである。釉は明るい灰緑色に発色する不透明釉である。なお、基本的に体部下端付近以下を露胎とするようであるが、部分的に曇付までおよぶ。粗雑なつくりである。15世紀頃のものである。



1・2 : M9
3 : M10
4・5 : M13
6・7 : M16
8 : M21

第30図 溝状遺構出土遺物実測図4

(その他の溝状遺構、1/3)

17号溝状遺構（図版3、第4図）

先の16号溝に接し、南に続く。長さは6.2mを検出したが、幅は最大で0.4m、深さはやはり数cmに過ぎない。

18（22）号溝状遺構（図版3、第4図）

Ⅲ区中程を横断する溝で、地形とは無関係に掘削されている。埋土は暗茶褐色土が堆積。幅は南端で最大となり約1.3m、北端部では0.8mを測る。また、溝底の標高ははそれぞれ17.24m、17.12mとなり、南が低くなる。

19号溝状遺構（図版3、第4図）

18号溝の南に位置する2条の溝の中、東に位置するもの。これは等高線に直交する方向で掘削されていて、幅0.5m強、深さは最大で0.1mほどである。約8mの長さを検出したが、その北端には柱穴状の落ち込みが数基続く。一連の遺構であろう。

20号溝状遺構（図版3、第4図）

19号溝の北端近くで重複する。長さ2m、幅0.3m、深さ0.1m弱。

21号溝状遺構（図版3、第4図）

19号溝の西側を並行するように走る溝で、7mの長さを検出。幅は南で広くなり、確認した最大幅は0.8mを測る。深さは0.2m強となる。

出土遺物（第30図8）

須恵器杯である。図示部の約1/2が残存する。高台は斜位に切られたような形状となり、接地部は小さい。内底面を除き、全体に横撫でで仕上げる。



スナップ 工事中の越路六郎遺跡（南東から）

4) その他の遺構と出土遺物

I 区 (図版3、第4図)

本遺跡の地形は幅の狭い丘陵上となるが、その地形は北側で急激に落ち、南側は緩やかな傾斜となっている。上述した主要遺構はいずれも南斜面に位置し、北側に位置する。I 区では若干の柱穴、溝の他顕著な遺構を検出していない。最もしっかりした遺構は西端部で一部を検出した溝状遺構で、幅1.4m、深さ0.3mほどの規模である。出土遺物は多くなく、近世と思われる磁器片が若干出土しているが割愛する。

III 区 (図版3、第4図)

溝状遺構については先述した。この地区ではII区に近い高位部分でかなりの柱穴を検出したが、斜面を下るにつれてその密度は低くなる。柱穴群の中には一見建物を構成するのではと思われるものもあるが、確信をもてるものがない。

遺物もほとんどない。

焼土 (第4図)

4号建物跡の北西隅付近の境上で検出したもので、東西3.5m、南北2mの範囲に広がる焼土。本来的には開墾で削られた段下方向、南へ延びていたと思われる。多くの焼土や炭を含むが、焼土ブロックあるいは炭塊といったものはほとんどなかった。層位的には黒色包含層上にあつて、4号建物跡の柱穴が焼土上から掘り込んでいる。

出土遺物

固有の出土遺物は細片化している。ただ、この焼土下の黒色土中から出土した遺物は第37・38図に掲載している。

礫群 (図版11・12、第4図)

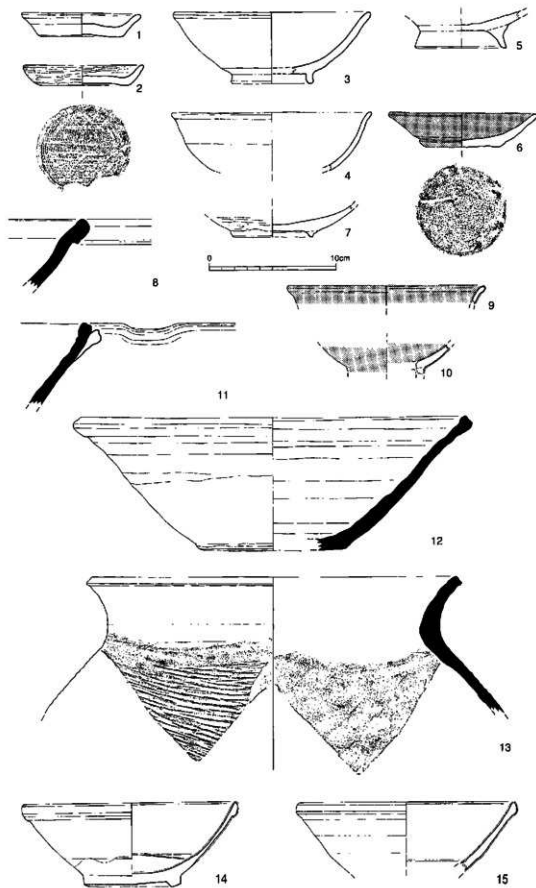
1号土坑南、および4号建物跡西南付近の2箇所で人頭人の河原石が無秩序に散乱した状態で検出した。前者を「北東礫群」、後者を「西半礫群」とする。いずれも赤褐色土を若干剥いで検出し、また基底部もほぼ赤褐色土中に位置する。したがって、ここで出土する遺物は赤褐色包含層中としてもよいものである。

これら礫群は乱雑にあつて、かつ基底部も並べたと判断される状態ではなかった。石材は明らかに持ち込まれた河原石であり、特に北東礫群は5号建物跡の南(下位斜面)、4号建物跡の南東部に位置していて、本来的には土地造成時の土止めの役割を果たしていたものと思われる節もあるが、西半礫群はその範囲が建物跡内におよぶことから別の使用法を考えた方がよいであろう。

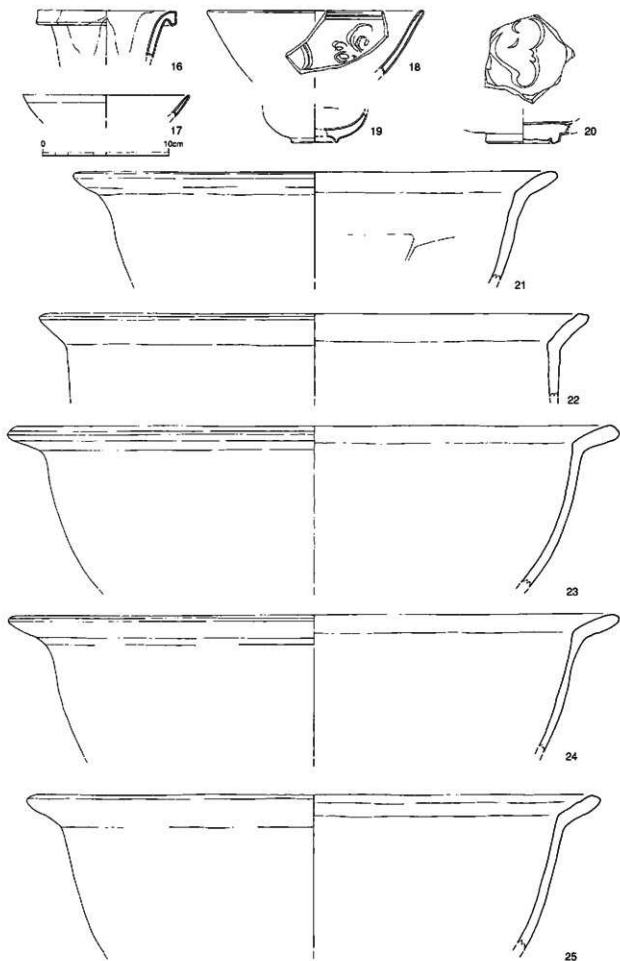
なお、先の2群と別に「南礫群」と注記されたものがある。中には「1号土坑南」とあつて明らかに北東礫群を示すものがあるが、混乱しているために別に示している。いずれにしても、これらは赤褐色包含層に含めて考えてよいものである。

出土遺物

北東礫群 (巻頭図版2、図版18、第31～33図)



第31图 北东壕群出土遺物実測図1 (1/3)



第32図 北東礫群出土遺物実測図2 (1/3)

土師器 (1~5) 1・2は皿。底部・体部の境が明瞭で、体部が外反するもの。底部には糸切り痕が残る。2は特異な土器。体部が内彎気味に直立し、体部・底部の境には幅数mmの寛削りを施す。色調は一部は灰黒色となるが、おおむね灰色となる。体部内外面の全体を寛磨きで仕上げ、底部外面に糸切り痕・板状止痕を残すもの。瓦器とすべきであろうか。

3~5は碗。3は体部が内彎し、口縁部が小さく外反する。高台は外彎気味に小さく直立する。4は体部片で、形状は3に似るが、器肉薄く、体部が深い。黄白色を呈する。5は底部片。

21~25はいずれも胎土粗い土師質鍋で、21・22とその他は口縁部の屈折程度が異なっている。

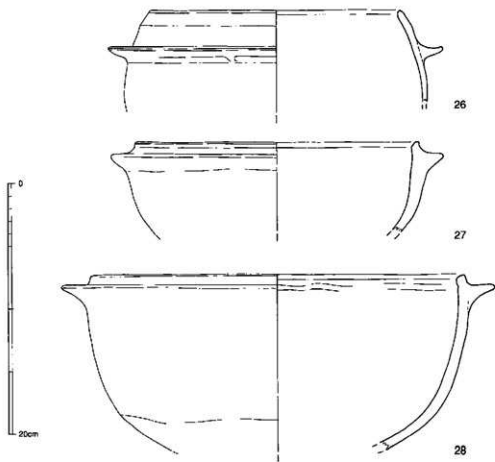
26~28は羽釜。26と後2者とは大いに異なる。26は口縁部が長く、強く内傾するもので、器肉薄く、鈎も薄く高い。27・28は口縁部が短く直立し、端部に内傾する面を有する。鈎も含め、全体に肉厚となる。器表はいずれも荒れる。

瓦器 (6・7) 6は皿。口縁部の1/2弱が残存する皿で、厚底となる底部から体部が直線的に浅く開く。底部外面には回転糸切り痕が見える。暗灰色を呈する。7は碗で胎土粗く、内面が黄白色、外面が灰黒色に発色するもの。高台は低い。

須恵器 (8・11~13) 8・13は甕。8は大型甕小片で、内面に厚く灰を被る。13は頸部を外彎させ、口縁部を加飾せずに方形につくる。体部内面は撫でて仕上げる。

11・12は東播磨の槽鉢で、11は片口部が残る。口縁部の肥厚はいずれも小さい。

緑釉陶器 (9・10) 9は小片で、復原口径・傾きには不安がある。口端部を肥厚させて強く外反させるもので、胎土は暗灰色の緻密なもの。焼成は須恵質である。口縁部も含めて全面を密に施



第33図 北東礫群出土遺物実測図3 (1/3)

磨きで仕上げるようである。釉は淡い黄緑色に発色するが、非常に薄く施釉されている。また、口縁肥厚部分の外面では部分的に釉が飛ぶようである。10は底部小片。高台の形状の細部は不明。釉はペンキを塗ったような灰緑色に発色し、高台外側まで施されるが、内側は不明である。器内は黄白色に近く、陶器質のようであるが脆い。

輸入陶磁器 (14~19) 14~15は通有の白磁玉縁碗で、玉縁の形状は14がシャープであるのに対し、15ではやや甘くなる。

16は長頸を有し、口縁部を大きく折り返す盃で、釉は灰白色で深みを有する。

17も皿小片。体部から口縁部にかけて内彎しつつ、薄く尖って終わるもの。黄味帯びる透明釉が厚く施される。

18・20はいずれも片切彫り劃花文を刻む龍泉窯系青磁で、18はオリーブ色の、20は淡灰緑色釉を施す。なお、20は丁寧につくられる。

19は底部の小さな染付碗で、高台も小さい。素地は黄白色に近いようで、黄味帯びて白濁する不透明釉を疊付を除く全面に施釉する。見込みに青色に発色する文様の一部が見える。明染付か。

南康群 (巻頭図版1・2、図版18、第34図1~33)

土師器 (1~17) 1~8は皿で、体部・口縁部が明らかに外彎するものはなく、直行あるいは内彎する。底部はおおむね平底化し、7では底部に施切り痕が見える。

9~10は杯。10・11は肉厚で直線的なもの。11では外底面に施切り痕が残る。

11~16は碗。11は底部から口縁部にいたるまで丸く立ち上がり、口縁部は直行する。12は底部片で、肉厚となることから碗にしているが、杯であるかも知れない。17も無高台で、体部中位で屈曲するもの。この底部は糸切りのようにも見える。

13~16は高台を有する底部で、大きさ、形状を見るとかなりの時期幅がありそうである。

21・22はいずれも壺小片。傾きには不安がある。

23~25は羽釜。23は口縁部と思われる小片で、長く内傾するもの。24は鋳以上を欠き、かつ磨滅するため一見弥生中期の土器を思わせるが、鋳であろう。25は足の一部が残存する。足の先端は鋳に接して、ほぼ一体化する。

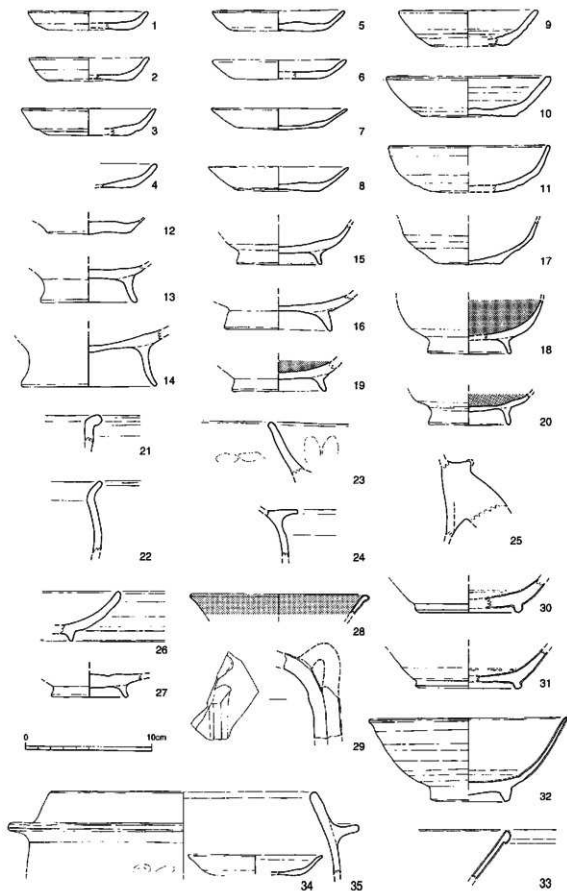
黒色土器 (18~20) 内面のみが黒化する碗で、高台の形状・大きさはほぼ似ている。

瓦器 (26・27) 26は体部が非常に浅いもので、端部は内彎しつつ丸く終わる。高台は小さい。胎土は非常に精良で、調整も丁寧になされる。器表は暗灰色を呈し、炭素の吸着は見られない。27は底部外面に施切りと思われる痕が見られる。

緑釉陶器 (28) 28は口縁部小片で、接合できないが同一個体と思われるものが2点ある。胎土は灰色を呈し、非常に精選され、陶器質に焼けるが、須恵質というには躊躇されるものである。口縁部付近の内面に一部施磨きが見られるが、第31図9に見られるほど丁寧なものではない。釉は淡黄緑色に発色する。

灰釉陶器 (29) 縦位に把手が付く壺残片で、残存する把手は高く太い。胎土に黒色溶融砂粒が多く見られる。内面は淡灰色、外面は施釉されておおむね黒褐色に発色するが、釉が垂れた部分は灰黒色となる。

輸入陶磁器 (30~33) 30・31は越州窯系青磁。30は小片。高台は疊付外側に面取りを施す。胎土は暗灰色の緻密、釉は全面に施されるようで、灰緑色(くすんだオリーブ色)に発色する。器内が厚く、内面底部に目跡が残る。31は1/4強が残存する優品。高台はほぼ断面方形となるが、トチ



第34图 南磔群·西半磔群出土遺物実測図 (1/3)

ンのために部分的にやや潰れる。体部下端、高台のすぐ上に凹線を刻み、さらに上方では緩く窪ませている。器肉は暗灰色緻密なもので、釉は灰緑色に発色する。なお、釉は唇付内側を除いて全面に付される。

32・33は白磁で、32は高台が肉厚で低く、口縁部が小さく外反するもの。33は玉縁口縁を有する小片で、口縁部内側にシャープな線が入る。

西半礫群（第34図34・35）

土師器（34） 34は体部から口縁にかけて丸く移行し、口縁部が外彎する皿。復原口径10.6cm、器高1.6cmを測る。35は口縁部がない碗して長く延び、口端部が丸くなる羽釜。

包含層（図版10）

幾度か記したように本遺跡の調査に際しては、包含層中に多くの遺物があって、かつ緑釉陶器や越州窯系青磁など稀少な遺物を含んでいたために重機による掘削を浅くし、多くを人力で除去した。包含層はおおむね赤褐色土（上層）、黒色土（下層）からなり、1号建物跡と4号建物跡の中間付近を境に、それより高い部分（北側）では下層の黒色土が露出していた。しかし、それも1号建物跡を横断する開墾時の段下で終わる。両建物跡中間付近から南側には2層の包含層が堆積しており、発掘に際しては分層を心がけて実施した。

出土遺物

茶褐色土層出土遺物（巻頭図版1・2、図版18、第35・36図）

土師器（1～21） 1～7は皿。1は口縁部が外反するもので、底部に糸切り痕が見える。2～4は内彎するもので、4では底部外面に篋切り痕がある。5は底部が肉厚で高台状となり、体部は内彎しつつ立ち上がる。器表は荒れている。6・7は高台付皿。6は高台が高く、体部から口縁部にかけて明瞭な区別がない。7は高台が低いが、直行して開く体部と底部とは屈曲する。

8～14は杯。8～11は平底を有し、体部が直行する。口縁部の形状には若干の変化がある。10・11の2点は篋切り痕が見える。いずれもロクロ目が顕著である。12・13は底部・体部間が丸いもので、器高が大きく異なる。14は上げ底気味の平底を有し、体部が直行して開く。底部には回転糸切り痕がよく残る。

15～18は碗底部であらうか。16～18は円板を付して高台とするもので、16では糸切り痕が残る。

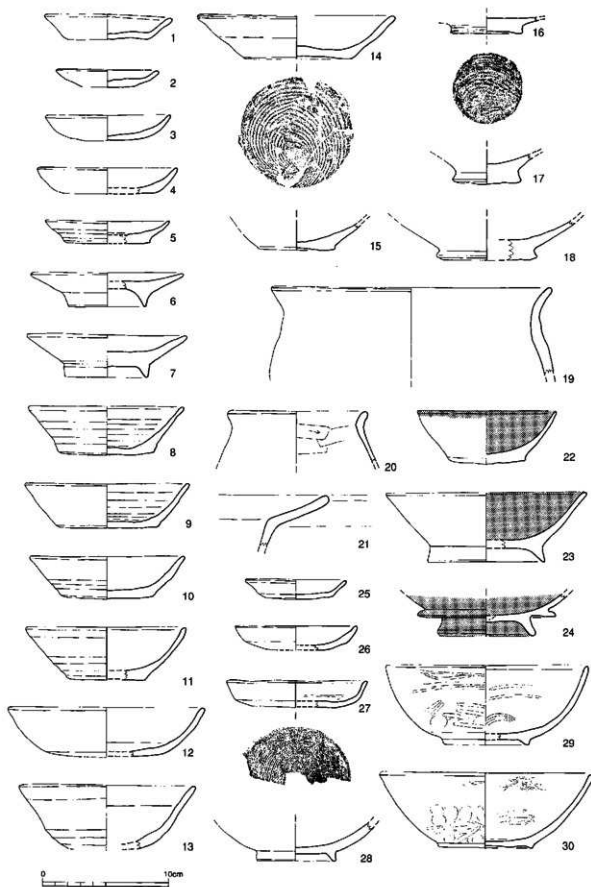
19・20は甕で、いずれも口縁の開きが小さく、外反も弱い。19は灰青色を呈する。

21は口縁部が外折して長く延びる鍋。小片である。

黒色土器（22～24） 22は無高台のもので、体部内面および口縁部付近の外面が黒化する。底部は肉厚となる。23は小片であり、復原口径には不安がある。体部内面のみ黒化するもので、ロクロ目がわずかに見える。24は高台上に鋤状突帯を付すもので、本遺跡では2点が出土している。

瓦器（25～30） 25～27は皿。25は小片で、復原口径に不安があるが、形状が土師器に似る。胎土精良で、体部下端に施された篋削りも含めて調整も丁寧である。全体に灰黒色を呈し、底部外面に糸切り痕を残す。26は1/3が残存する。底部が丸く、体部下半から以下を篋削りで調整する。口縁部付近のみが灰黒色となる。27も底部が丸い。灰白色～暗灰色を呈し、内底面に指押さえの痕跡が、外底面に糸切り痕が残る。これには篋削りが施されていない。

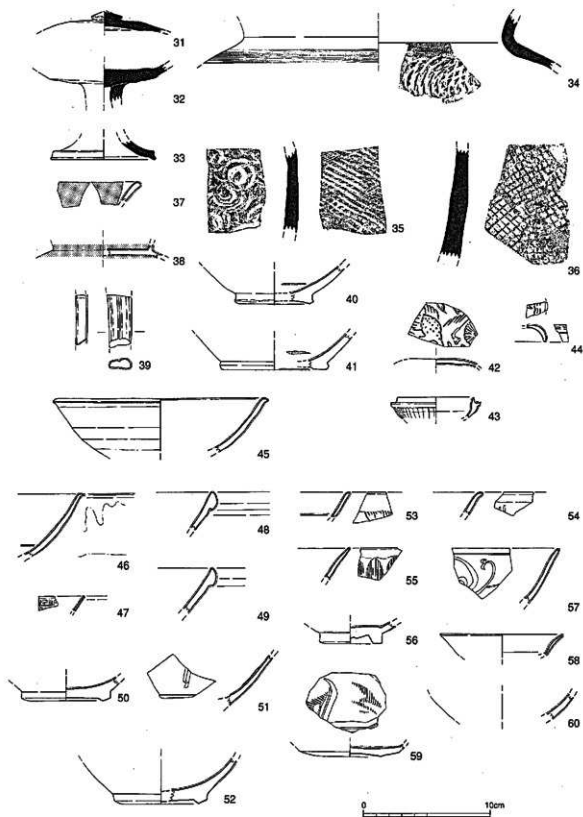
28～30は碗。28は器肉も含めて全体が黒化する。29は体部が急角度で立ち上がるもので、内外面に比較的密に太い篋削りが付される。また、体部外面下端付近には指頭痕も残る。30は29に比して



第35図 茶褐色上層出土遺物実測図1 (1/3)

緩い角度で立ち上がる。これも全体に粗雑な施磨きを施し、体部下半に指頭痕を残す。

須恵器 (31~33) 31はとても丁寧につくられた杯蓋で、扁平なつまみを付す。32・33は高杯残片。別個体のものである。34~36は甕。35では内面が黄褐色、外面が灰赤色となる。



第36図 茶褐色土層出土遺物実測図 2 (1/3)

緑釉陶器 (37・38) 37は口縁部が小さく肥厚する小片で、全体に丁寧な横撫で調整が施さる。胎土は精選され、陶器質に焼けて黄褐色となる。釉は淡黄緑色に発色し、口縁部付近では飛んでいるようである。あるいは当初から施釉にムラがあったものかも知れない。38は1/4強が残存する。皿あるいは碗の可能性はあるが、高台径が大きいことや器肉が薄いことなどから蓋としておく。器肉は精良で黄白色～灰白色を呈するが、焼成は陶器質である。器面調整は判然としないが、淡黄緑色の釉がペンキを塗ったように内外全面に施される。

輸入陶磁器 (38～58) 38～40は越州窯系青磁。38は水注の把手であろう。断面形状がやや異なる2本の棒を併せたような形状を呈するが、これは1本から整形するようである。胎土は暗灰色を呈し、黒色微砂粒を含む。釉のほとんどが飛んでいるが、わずかに残る部分は緑褐色あるいは灰緑色といった発色をする。

39は1/4弱が残存する。胎土は暗灰色となり、器表にも黒色砂粒が多く浮いている。釉は内面にのみ施され、灰緑色あるいは灰褐色に発色する。外面は暗褐色となる。また、内面には明らかな目跡が付着し、高台外縁付近にも痕跡がある。なお、高台下端に面取りが付されたように図すが、これは焼成時に窯道具によって潰れた部分である。40は胎土・釉調など先の39によく似るが、高台が削出しの蛇の日高台となり、露胎部分の調整が丁寧である。

41～43は青白磁合子。41は胎土が黄白色を呈し、焼成が甘いようである。図右端の花文以外はモチーフがはっきりしないが、全面に青白色の透明釉を厚く施す。42は小片で、かつ生焼けて露胎部分は黄白色となる。つくりはシャープであるが、受部から体部上半にかけての外面および内面に施有するが、青みは見えるが発色も悪い。43も小片。11端部外面から内面にかけてが露胎となり、青みが強く発色する。

44～51は白磁。11縁部が先折となるものおよび玉縁をもつものなどである。46は口縁部内外面の釉を掻き取るいわゆる口壳皿で、内面に雷文を一段、その下位に花卉を陽刻する。素地は灰黄色、釉は黄味帯びる白色透明である。10は見込みの釉を蛇の目に剥いで、体部に直線文を陽刻する。胎土は純白、釉は白色透明である。

52～58は青磁。52は直行する口縁部下方内面に沈線、外面に獅拏文を付し、灰黄褐色透明釉を付す同安窯系統。53は外反する口縁部の外面下方に太い平行線文を刻むもので、焼成甘く、釉は灰緑色透明である。54は小さく外反し、薄く尖って終わる口縁部を有する。外面は蓮弁文を浮き彫りにしてその上に獅拏文を刻む。胎土は暗灰色、釉は灰緑色半透明である。55は非常にシャープに作られた底部であるが、釉はライトブルーに発色する透明釉である。56は片切彫り劃花文を施し、淡黄緑色透明釉を付した龍泉窯系統。

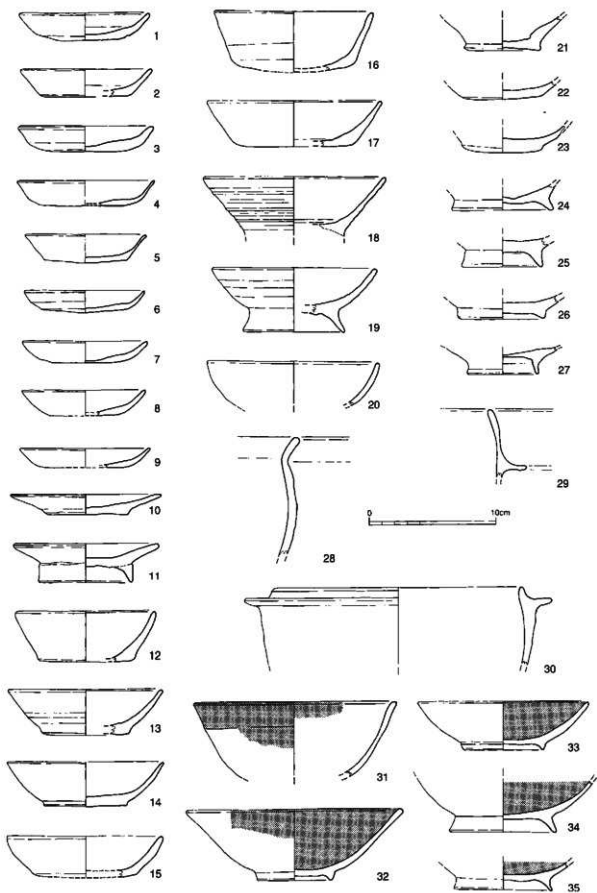
57は小片から復元図示したもので、シャープにつくられている。釉は淡青色透明で、11端部付近は黄白色となる。58は通常の同安窯系統で、淡黄緑色透明釉を施す。

59は天目碗の体部片であり、復元口徑には不安がある。胎土は灰黄色あるいは黄白色で、焼成は非常に甘い。釉は黒色地に茶褐色が多く浮く。外面には横撫で痕が顕著である。

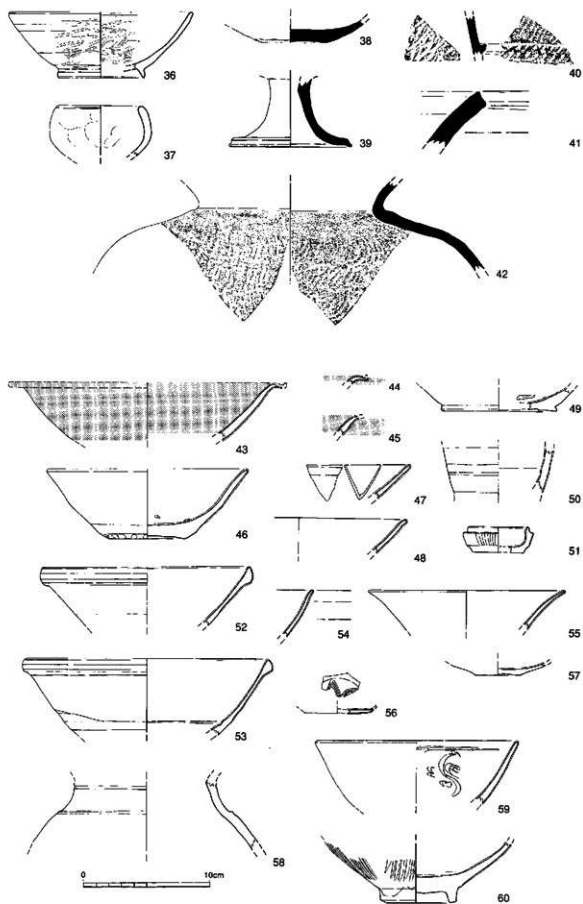
黒色土層出土遺物 (巻頭図版1・2、図版18・19、第37・38図)

ここで図示したものの中、32・33の黒色土器、36の瓦器、52・53・55の白磁が焼土下から出土したものである。

土師器 (1～30・37) 1～9は皿。1～5は体部・11縁部が外彎傾向をもつもので、6～9は内彎傾向のもの。器肉の厚さが随分異なる。底部から体部にかけては丸味をもつものが多く、5は



第37圖 黑色土層出土遺物実測圖1 (1/3)



第38圖 黑色土層出土遺物実測圖 2 (1/3)

特に切痕な境をもつ。底部の切り難しは不明のものが多く、2は丁寧な寛切りを行い、6も寛切りである。口径は9.4~10.8cm、器高は1.5~2.3cmを測る。

10は底部を肉厚にして高台状とする。11は高台付皿で、体部・底部が区別される。

12~15は杯。内彎傾向をもつが、中で14・16・17は口縁部がわずかに外彎を示す。全体にクロロ目が目立ち、15では外底面に寛切り痕を残す。

18は底部を欠くが碗であろう。体部から口縁部にかけて直線的に延び、クロロ目が顕著。19は碗形の体部が浅く、小さいのに比して高台が異常に大きい。26も碗。

底部にもバラエティがある。22は外底面を丁寧に寛削りし、23も寛切り痕が残る。

28は壺小片で、二次的火熱を受けてよく焼ける。29は口縁部が薄く、長く延びる羽釜で、器肉が薄い。30も器表が荒れて判然としないが、口縁部を欠くようである。

37は壺形を呈する小型品の小片。器表荒れるが、外面に指頭痕が残る。

黒色土器 (31~35) 31は口縁部付近の内外面のみが黒化、他の部位は暗褐色~灰褐色を呈する。瓦器としたほうがよいのかも知れない。体部が内彎し、口縁部が小さく外反する。32は膨れとなって直線的に開くもので。内面および口縁部外面が黒化。33は内面のみが黒くなる。体部が浅く、高台も小さい。34・35は先の2者に比べて高台が高いもので、内面が黒化、外面は黄白色~灰白色となる。

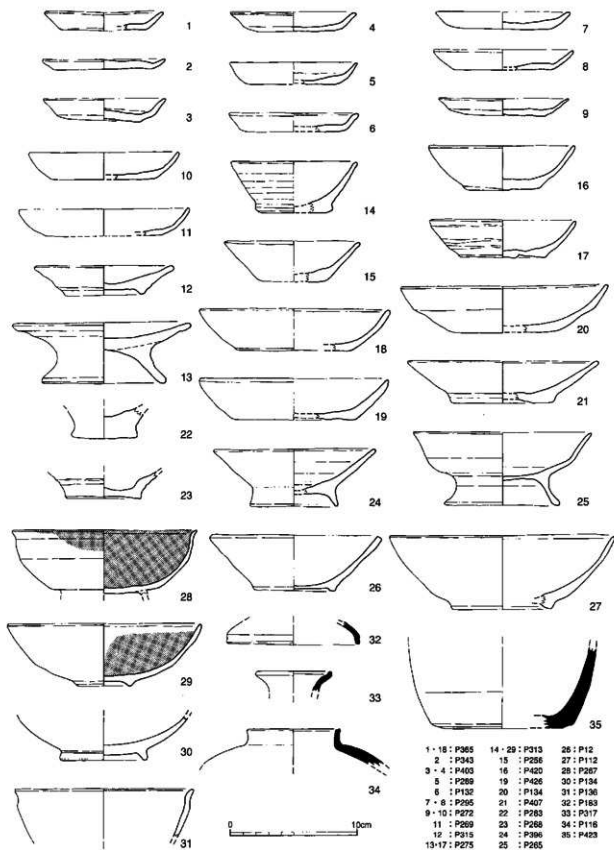
瓦器 (36) 1/4が残存する、とてもつくりのよい碗。体部は内彎しつつ浅く立ち上がるが、湾曲の度合いが弱い。高台は華奢で小さいものである。内外面に寛磨きが密に施され、全体に暗灰色を呈する。

須恵器 (38~42) 38は底部が丸味帯びる杯形で、外底面は寛削りで仕上げる。39は高杯。つくりは丁寧であるが、焼成が甘い。41は壺であろう。シャープな突帯を巡らせ、その頂部および上面に刻みを付す。突帯以上は平行叩きの後にカキ目を施す。41は大型の甕で、口縁部は肥厚せず、わずかに上方へ摘むだけである。

緑釉陶器 (43~45) 43は先に蓋とした茶褐色土出上品に似るが、器肉が厚い。胎土や釉調は同じである。外面中位に一部濃緑色に発色する部位がある。43は釉の発色が42に比べて濃い胎土も含めて同一個体の可能性がある。43も同様である。このような口縁部をもつものは多く蓋とされているが、体部の傾きや口縁部の反転の強さから身としておく。

輸入陶磁器 (46~60) 46~49は越州窯系青磁。唯一全体を窺える資料で、底部の1/3が残存する。底部は厚底で、外周を削って面取りを施し、その部分に楕円形の目跡が5箇所残る。内面にも目跡の一部が見える。体部は中位下方で緩く屈曲し、小さく外反する口縁部へ続く。焼成不良で胎土は灰色、釉は淡灰黄色に発色する。また、釉は内面および体部下位まで施釉されている。47は小片。口縁部は直行し、外面には横撫で痕がかなり顕著に残る。器肉は暗灰色緻密なもので、釉は暗灰緑色に発色する。48も小片で、これは口縁部が外反する。これも器肉は暗灰色緻密で、釉は灰黄緑色となる。49は1/4弱が残存する蛇の目高台を有する底部で、削り出された高台は低い。器肉は焼成が甘いものか、暗褐色を呈し、黒色微砂粒が顕著である。釉は内面のみに残り、灰黄緑色となる。高台外縁の形状が若干乱れていて重ね焼きの痕跡であろう。内面にも目跡が残る。

50は褐釉陶器の小片で、同一個体と思われるものが茶褐色土層からも細片化して出土している。体部外面は雑な寛削り、内面は横撫で調整する。釉は暗灰緑色に発色する。58も褐釉陶器の壺で



第39図 柱穴出土遺物実測図1 (1/3)

ある。焼成甘く、器肉の一部が灰赤色を呈する。肩部に小振りの断面三角突帯を付し、残存部上端の突出部直下には凹線を刻む。釉はほとんどが剥落しているが、灰黄緑色に発色するようである。

51は青白磁合子で、小片である。受け部外面と体部下半から外底面にかけてが露胎。

52～57は白磁。52・53は玉縁をもつ碗。54は口縁部が外彎して小さく外方へ横むもので、内彎部分の外面は篋削りで調整する。55は大きく外彎し、口端部が薄く終わる。56は白磁皿。形状は口禿皿のように平坦な底部を有するが、内底面に片切彫りで花文(?)を刻む。57は皿で、上げ底の底部から内彎して立ち上がる。釉は黄緑色不透明である。

59は片切彫りで施文された龍泉窯系青磁碗で、器肉は暗灰色、釉はライトブルーに発色する。60は同安窯系青磁碗片で、見込みの釉を蛇の目に掻き取る。体部外面に幅広い平行線文を配するが、内面の施文は不明。釉は淡黄緑色透明に発色する。

柱 穴 (巻頭図版1、図版19、第39・40図)

本遺跡では非常に多くの柱穴から遺物の出土をみた。以下で、その中の図化できた主要なものを紹介する。なお、紹介にあたっては、遺構番号に則さず、図に掲載した遺物の順に行く。また、記述が煩雑になるために、遺構については特別な場合を除いて触れない。配置図を参照されたい。

土師器 (1～27) 1～11は皿。4は糸切り痕が、5～10では篋切り痕が確認できる、あるいはその可能性が高いものである。12・13は高台付皿で、12は高台端部を欠いているかも知れない。

14～21は杯。14～17は底部が小さいもので、14では底部が厚く高台状となる。15のみが体部が外彎するタイプで、いずれも外底面に篋切り痕が残る。ロクロ目が著しいものもある。

18～21は底径が大きいもの。18は糸切りようで、20は底部から丸味をもつ。この両者は小片で、復原口径に不安がある。21は上げ底で、高台状となる。

22は厚底高台、23はその内側を削り抜いたような形となる。23は篋切り。

24～27は碗で、大小の高台をもつ。24は体部が直行して開き、口縁部もそのまま終わる、丁寧につくられた土器。25は大きな高台を有するが、体部は浅く、腰折れとなる。26は小さな高台を有し、体部は内彎気味に立ち上がって、口端部を断面方形につくる。

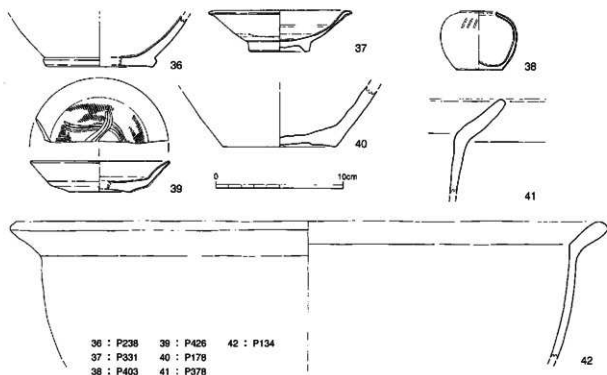
第40図41・42は土師器鍋。41は口縁部が長く、細部が丸味をもつ。42は口縁部が強く屈曲し、肥厚する口縁部は短い。

黒色土器 (28) 高台を欠く体部の深い碗で、体部中位に弱い屈曲があり、口縁部は強く反転する。器肉薄く、内面と口縁部付近外面が黒色となる。

瓦器 (29～31) 29は高台が小さく、体部は丸く浅い。黒色～灰白色を呈し、黒色土器とすべきかも知れない。30は口縁部を欠く。黒色化せず、灰白色～暗灰色を呈する。31は口縁部が外彎するもので、傾きに不安がある。これも黒色化していない。

須恵器 (32～35) 32は蓋の小片で、口縁部が屈曲して立ち上がる。復原口径に不安がある。33は小型の瓶子口縁部であろう。口端部を小さく摘み上げるが、細部は丸味をもつ。内面に灰被りが著しい。34も壺で、口縁部が直立し、口端部を匙面とする。肩部に灰被りが顕著。35も瓶子のようになろうか。体部下端を篋削りするが、それが底部外周までおよんでわずかに段をつける。内面は横撫で。やや粗雑なつくりである。

輸入陶磁器 (36～40) 36は越州窯系青磁小片である。厚底に作った底部外周に変化を加えて高台とするが、篋削りでシャープにつくったものではなく、全体に丸味を有する。また、外底面にも

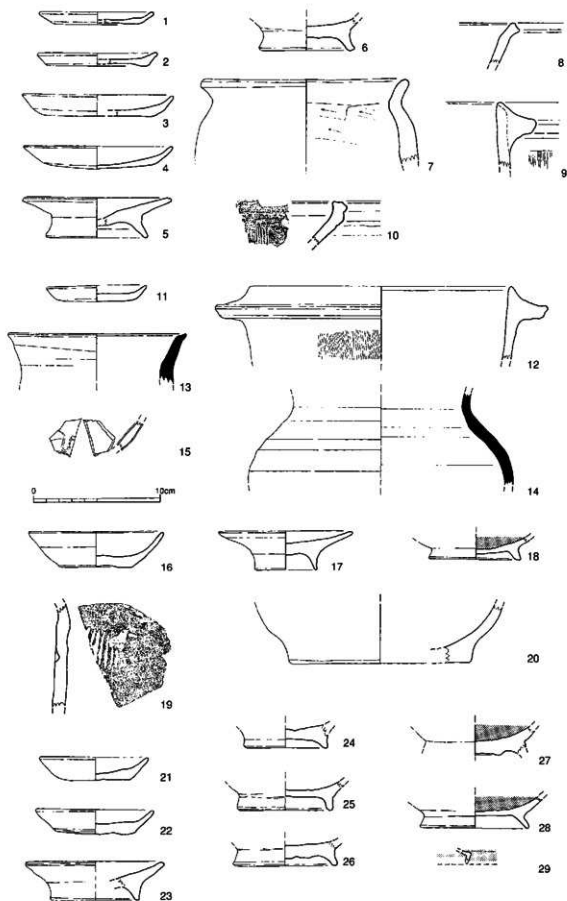


第40図 柱穴出土遺物実測図2 (1/3)

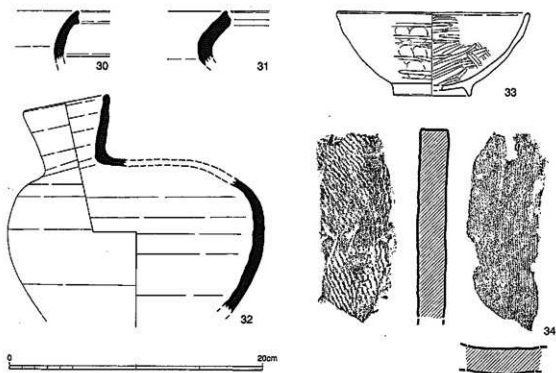
特に外縁には成形時の台による無数の微細な凹凸がスタンプされる。器肉は暗灰色緻密であるが、破面は層状になっている。残存する外面はすべて露胎で、灰赤色となる。焼成は甘いようで、内面に施された目跡は全く見えない。釉は黄白色に近く発色する。また、図示していないがP302から碗あるいは皿の体部片が出土している。胎土は黒色微砂粒を含む暗灰色で、内外面の釉は灰緑色に発色する。37は白磁皿。高台はシャープで、口縁部は先折れとする。体部内面中位に沈線を刻むとともに見込みを蛇の目に釉剥ぎを行う。釉は緑帯びる暗灰色に発色する。38は青白磁小瓶で、1号土坑南黒色土出土の破片と接合したもので完存する。器高4.65cm、最大径6.0cm、口径2.3cmを測る。口縁部は小さく摘み上げられ、体部上半には斜位の平行線文が微かに見える。体部下端および丁寧に施削された底部外面のみが露胎で、その他の部位は全体に施釉する。焼成が甘いようで、釉は灰白色に発色する。39は同安窯系青磁皿で、淡黄緑色透明釉が施される。40は褐釉陶器で、約1/2が残存する。黒色土から出土した第38図58と同一個体の可能性がある。また、P220からも同一個体と思われるものが出土。焼成甘く、特に底部外面は黄白色～灰赤色となる。釉はほとんどが剥離していて、灰黄緑色に発色する。

トレンチ (図版10、第4図)

Ⅱ区で厚く堆積した包含層に開けたトレンチから出土したものを紹介する。Ⅱ-1トレンチは1号土坑西から南へ掛けて長さ17mにわたって発掘したもの。Ⅱ-2トレンチはその北、ちょうど6号溝状遺構状に設定したものである。Ⅱ-3トレンチは2トレンチ南端から町道に沿って、排水を兼ねて掘削したものである。ただ、ここで「上層」としたものが必ずしも先の赤褐色土層に対応するものではない。



第41図 トレンチ出土遺物実測図 1 (1/3)



第42図 トレンチ出土遺物実測図 2 (1/3)

出土遺物 (図版19、第41・42図)

Ⅱ-1Tr.

1～14は層位の注記のないもの。1～9は土師器、10は瓦質である。

皿の中、4は外底面に篦切り痕が残る。8は赤褐色を呈する鉢あるいは鍋である。9は口縁部が小さな羽茎で、鈿は発達する。体部外面は細密な刷毛目で調整する。10は口縁端部外面を加飾するが、稜は非常にシャープで、内面に摺目が見える。外面の稜線以下は篦削りで丁寧に調整している。器表は暗灰色～灰褐色となる。

11～14は上層出土で、11・12が土師器、13・14が須恵器、15が輸入陶磁器である。

12も口縁部が小さく、鈿が発達したもの。小片であるが、外面を細密な刷毛目で、内面は丁寧に撫でて仕上げる。13は内面調整がやや粗いようで脚の可能性もある。14は壺。15は天目碗の小片。胎土は暗灰色の陶器質に近い様相を呈し、釉は透明感のある茶褐色釉（鉛釉）を施す。

16～20は中層出土で、18が黒色土器、19が灰釉系陶器、他は土師器である。

16は体部が内彎する杯で、外底面に篦切り痕が残る。17は高台付皿で、調整は丁寧になされる。19は常滑焼であろう。20は平底をもつ甕で、二次的な火熱を受けてよく変色する。

21～29・第42図30～32は下層出土遺物で、21～26が土師器、27・28が黒色土器、29が緑釉陶器、30～32が須恵器である。

21・22はよく似た皿で、21では外底面に篦切り痕が見える。23の高台付皿は体部が極度に小さいもの。24～26の高台もよく似ていて、25では高台内に篦切り痕が見える。27も同様に高台内に篦切りが観察でき、28では体部外面下端付近に篦削りが見える。いずれも内面のみが黒色化する。29は口縁部小片で、蓋が身かはわからない。蓋として図示したが、屈曲部上方に段がある。胎土や釉調は黒色土層から出土したものに似て、灰黄色の素地に淡黄緑色釉を掛ける。なお、この釉は透明度

が高い。

30・31は小片で、30は灰赤色を呈する。31は雑なつくり。32はかなりの部分が残存する。口縁部はほぼ直行し、端部は内傾する面を意識するようだが端部が丸くおさめられる。頸部に凹線は観察できない。つくりは雑である。

Ⅱ-2Tr. (図版19、第42図33)

瓦器碗である。体部が内彎しつつ浅く開き、口端部には変化を加えない。高台は形状が整う。器表は内面では丁寧に施磨きを施し、外面も施磨きを全体に疎に施すが、下半で指頭痕が目立つ。色調は口端部付近の内外面が黒色化するが、その他は暗灰色となる。

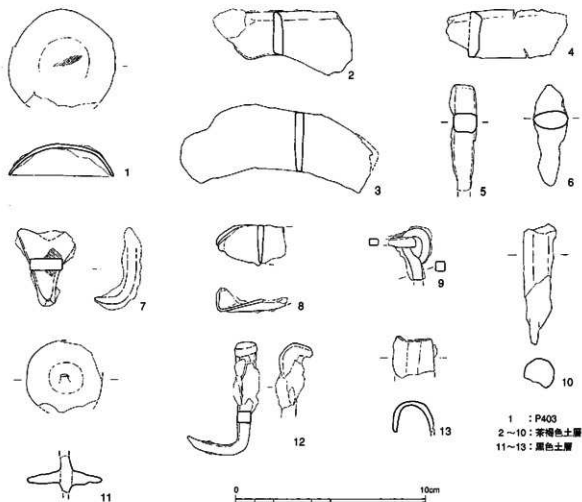
Ⅱ-3Tr. (図版19、第42図34)

下層出土の、本遺跡で出土したほとんど唯一の瓦である。胎土は長石などの1mm前後の砂粒を多く含み粗い。凹面には比較的細密な布目痕が残り、凸面では粗い縄目きを残す。灰褐色を呈する。8世紀代に遡ると思われる資料である。

その他の出土遺物

旧石器時代に属すると思われる石器や滑石製品など、上錘や鉄製品が諸処から出土している。便宜上、ここですべて紹介する。

鉄製品 (図版20、第43図)



第43図 鉄製品実測図 (1/2)

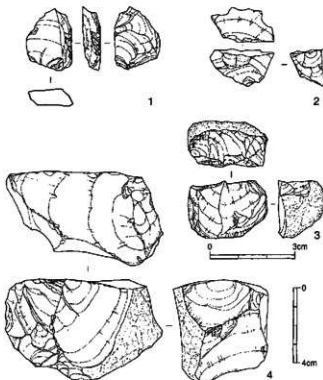
1は一部を欠損するが直径5.7cm、高さ1.7cmを測る半球状製品で、厚さは2mmである。孔は全く見えない。内面は錆び付きがあり、頂部付近にも木質らしい付着物がある。2・4は地金と思われるもの。長辺の一方が面取り風に整形され、極端な表現をすればなまこ状を呈する。この両者は錆が全面ではなく偏っていて、地肌を多く留める点でも共通する。厚さはともに5mmである。3は鎌状の形態を見せるが、刃部がない。多くの部分で層状に剥離している。鎌の未製品であろうか。5は方柱状となるもので、これも層状に剥離する傾向がある。

6は一見鉄鎌の形態を示すが、これは錆のためであって影み細部は見えない。7は雁股鎌の形状を窺わせるが、錆のために刃部の形状がはっきりしない。ただ、茎が図のように短く、かつ大きく曲がっていて、鎌身が短小なことも併せればこれは製作途中で放棄されたものと考えられる。8は図左側の一部を直角に近く折り返し、本体部も大きく捻れる。図上下で厚みが異なるが、刃部をつくるまではいたっていない。

9は連結した環で、大きい方は5×5cm、小さい方は3.5×5cmの断面方形の棒を使用する。10は釘。わずかに折り曲げた頭先端が除くだけで、頂部まで打ち込まれ、全体が木質に埋没する。11は紡錘車で、直径4cmを測る。上方の軸棒は断面長方形であるが、下方のそれは断面方形あるいは円形を呈するようである。12も釘である。先端付近が90度曲がっている。13は当初刀子の縁金具を想定していたが、よく見ると図左下が完結しているようである。製品であるか判然としない。

旧石器 (巻頭図版1、第44図)

いずれも黄褐色を呈するホルンフェルスらしい石材を用いている。1はP333から出土した、搔器の機能を窺わせる使用痕のある不定形剥片。長さ2.2cm、幅1.6cm、厚さ0.6cmの大きさ。2は16号上坑出土の残核。3・4は平安時代遺物包含層から出土した石核。3は比較的小さな剥片を得た石核で背部に自然面を残す。4は拳人より一回り小さく掌に収まる大きさの石核だが、剥離面の境に生じた稜を利用して敲打した痕跡が随所にみられ、敲打器としての機能を有していたものとみられる。これらの本来の帰属を確認できていないが、遺構検出面のベースである黄茶褐色粘土層は洪積層とみられるので、この土層から招来したものであろう。

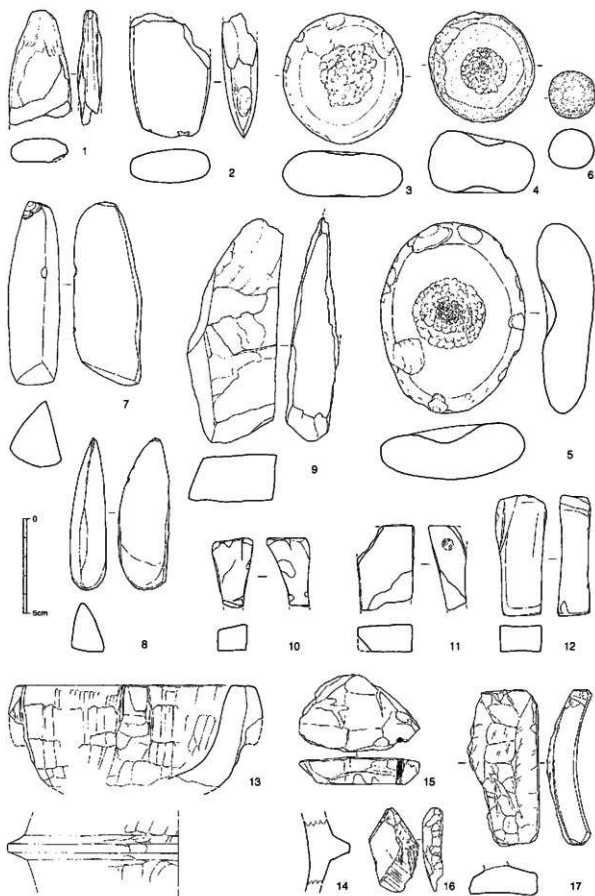


第44図 旧石器時代石器実測図 (3/4・1/2)

石器・石製品 (図版20・21、第45・46図)

磨製石斧 (1・2) とともに中世の遺物包含層から出土した緑泥片岩製のものである。1は基部側破片で、残存長9.0cm、重量110gを測る。2はやや扁平な体部で、両刃になる刃部側破片で、残存長9.8cm、重量238gを測る。

敲石 (3~5) 凝灰質安山岩ないしは安山岩の円礫を素材にして、扁平な両面の中央部を敲打したもので、両面ともに中央部が凹む。掌に収まり易いように周縁を調整したものとみられ、3の周



第45図 石器・石製品実測図1 (1/2)

縁部は磨耗が進む。3は直径9.5から10.0cm、厚さ3.6cm、重量416gを測る。4は直径8.7cm前後、厚さ4.8cm、重量420gを測る。5は長さ15.3cm、幅11.3cm、厚さ4.5cm、重量805gを測る。

投擲? (6) 14号土坑から出土した、直径3.6cm前後の球形に近いもの。外面は黒曜石自然面のような風化だが材質は未検証である。重量48gを測る。

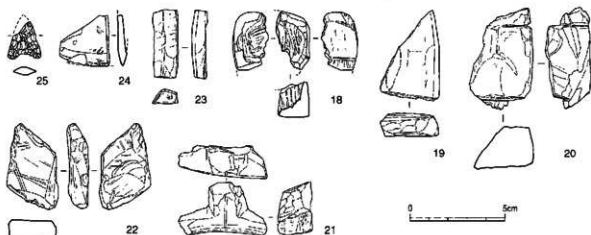
用途不詳石器 (7・8) とともに、二等辺三角錐に近い形状の、各面が平滑で、一方に鋭い稜をもつ石器である。用途は不詳だが、鈍い側の縁を掌で握り易く、握った際に前面になる鋭い稜の縁や尖った先端部が利器として機能するのかも知れない。2点ともに安山石製で、礫群に混じって出土した。7は長さ14.5cm、幅5.3cm、厚さ3.6cm、重量380gを測る。8は長さ12.1cm、幅3.9cm、厚さ2.4cm、重量162gを測る。

砥石 (9~12) 9は粘板岩質の仕上げ砥石で、礫群に混じって出土した。10は14号土坑東脇から出土した砂岩製砥石、11は礫群に混じって出土した乳白色の凝灰岩製仕上げ砥石、12はP285出土の乳白色凝灰岩製仕上げ砥石。

滑石製石鍋 (13・14) 13は13号土坑の西側の落ち込みから出土した。口縁部外面に縦長の突起を削り出した型式の鍋で、復原口径17.4cm、残存器高8.1cm、器厚1.8~2.4cmの大きさ。体部外面は縦方向3段の削りで調整され、外底部は細かな単位で削られる。14は鐙状の突帯が胴部に巡る型式の鍋で、復原胴部径24.0cmの大きさ。包含層下層出土。

石鍋転用滑石製品 (15~22) 15は10cm×6cm程の大きさの板状で、周縁には削り痕と磨耗痕がみられる。石鍋時のつる取手孔が一部に残り、孔内には鉄材が錆着する。16は4.5cm×3.8cmの平行四角形に整形されたもので、一辺には石鍋口縁が残るが、他の縁には削り痕と研磨痕がみられる。17は口径28cmほどの口縁端部を一边にした、長さ12.5cm、幅5.5cmほどの破片の破損面を削って調整し、鐙状突帯も削り取っている。18は石鍋の隅部分破片を転用したとみられる容器の平欠資料である。内面は削りで削り抜いているが、面の仕上げ調整はされていない。19は石鍋口縁を縦方向に切断するために、内外面から擦り切り状の切り込みが施され、折断面は削り調整されている。残された部分は4.8cm×3.1cmの二等辺三角形を呈するが、一辺には調整痕がみられない。20は石鍋底の縁部分を4cm長さに切断するための切り込みが施された破片、切り込みが不充分とみられズレた位置で折断された痕跡を残し、その後の調整が施されていない。21は縦長の突起を有する石鍋口縁部の長さ4.6cm、幅1.5cmほどの破片を削り調整したもの。22は3.0cm×2.5cmの大きさの、平行四角形に整形された破片で、周縁は研磨されている。

用途不明石製品 (23) 石鍋か否かが不明確で、材質も他の滑石製石鍋と比較して硬い感じの素



第46図 石器・石製品実測図2 (1/2)

材を用いている。長さ3.6cm、幅1.3cm、厚さ0.7cmの柱状に切断したもの。折断面は擦り切り後に研磨を加えている。

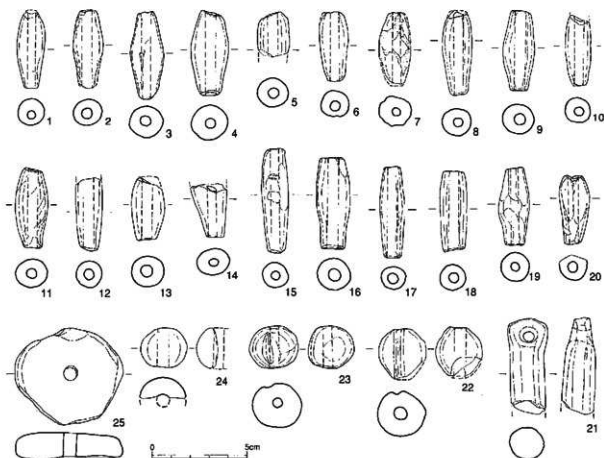
石彫丁 (24) アズキ色の輝緑凝灰岩製の石彫丁刃部破片。

打製石鏃 (25) 先端部を欠失するが、姫島産黒曜石製の全面に調整剝離の及ぶ凹基式の鏃である。残存長2.0cm、幅1.7cm、厚さ0.4cm、重量1gを測る。

土製品 (図版21、第47図)

一部を図示したほかは一覧表に譲る。

管状土鍾 (1~20) 1~4はともにエンタシスのように膨らむが、1は膨らみが一方に偏り、2は膨らみと端との間で括れ気味である。2は土坑の西側から出土した。3・4は径が太めである。5は端部破片のため全体の規模や形状は不明であるが、残存長2.8cm、径1.5cmの大きさ。6はエンタシスのように膨らむが、膨らみが一方に偏り、幾分細身のものである。7は中ほどがために膨らむ形のもので、マンガンの沈着が激しい。8は膨らみが一方に偏るタイプで幾分細身のもの、9は膨らみと端部との間で括れ気味のもの、10はエンタシスのように膨らむが細身のもの、11は太めで端部との間で括れ気味になるもの、12は一方の端部を欠くが細めに膨らむもの、13は裏玉のように短く膨らむ形のもの、14は半欠資料だが膨らみが極端で偏り気味である。15・18は中ほどの膨らみが少ない円柱形のもので、15は長さをもつためスマートな感じを与える。16・19は中ほどの膨らみと端部との間で括れ気味のもので、19はナデ調整時の稜が残る。17はスマートな形状ながら中ほどが僅かに膨らむもの、20は中ほどで膨らむものの片方から強くナデたため、扁球形断面で反った感じを与える。



第47図 土製品実測図 (1/2)

NO	種類	出土位置	長さ	幅(直径)	孔徑	重量(g)	備考	NO	種類	出土位置	長さ	幅(直径)	孔徑	重量(g)	備考
1	管状土鍾	D8	39.71	14.11	4.6~4.9	7	01	37	管状土鍾	Ⅱ区下段北東	40.44	16.09	5.2~4.2	9	
2	管状土鍾	D8西	40.04	10.55	5.2~4.9	6	02	38	管状土鍾	D14東側	38.4	15.14	4.9~3.8	8	
3	管状土鍾	D9	45.96	16.71	7.0~4.7	11	03	39	管状土鍾	Ⅲ-1T下層	32.71	18.64	6.9~5.3	10	
4	管状土鍾	D9	44.19	18.68	6.1~6.1	14	04	40	管状土鍾	Ⅱ区下段西平	44.34	15.18	5.6~5.4	9	
5	管状土鍾	D14	42.26	15.95	5.1~4.6	8	05	41	管状土鍾	D1南	37.5	13.14	5.0~4.3	6	
6	管状土鍾	D22	34.60	14.75	3.9~5.2	7	06	42	管状土鍾	Ⅱ区東端土層	26.84	13.81	4.3~4.6	4	
7	管状土鍾	SX-3	37.25	16.19	2.9~4.2	8	07	43	管状土鍾	D1南端西側	29.54	13.71	5.4~5.1	4	
8	管状土鍾	P268	42.99	14.74	5.1~4.6	8	08	44	管状土鍾	Ⅱ区下段南	37.55	15.86	5.6~5.3	8	
9	管状土鍾	P433	41.73	15.14	5.2~5.4	9	09	45	管状土鍾	Ⅲ-1T	46.26	15.06	4.9~4.2	10	
10	管状土鍾	P421	35.85	13.54	5.1~3.6	6	10	46	管状土鍾	Ⅱ区下段南	39.08	17.19	6.4~6.5	10	
11	管状土鍾	P161	41.34	16.73	4.9~5.1	9	11	47	管状土鍾	Ⅱ区下段南半壁中	42.07	13.79	4.9~5.0	7	
12	管状土鍾	P392	38.04	13.56	4.6~5.0	7	12	48	管状土鍾	西宮南	45.8	16.52	5.1~3.8	12	
13	管状土鍾	P156	36.44	14.44	5.9~6.2	7	13	49	管状土鍾	Ⅱ区下段西平	47.32	16.45	4.6~4.8	9	
14	管状土鍾	P417	29.89	17.88	4.2~3.4	6	14	50	管状土鍾	Ⅲ-1T下層	33.18	17.94	4.6~5.6	10	
15	管状土鍾	Ⅱ区北東部	54.01	13.46	3.7~4.7	10	15	51	管状土鍾	Ⅱ区下段南	44.4	16.47	4.4~4.1	9	
16	管状土鍾	Ⅲ-1T下層	47	17.15	5.7~5.9	12	16	52	管状土鍾	Ⅱ区下段北東側	45.1	11.39	4.6~4.2	6	
17	管状土鍾	D1南東部土層	47.57	12.87	5.1~4.5	6	17	53	管状土鍾	Ⅱ区下段北西	44.81	14.21	4.4~5.2	8	
18	管状土鍾	Ⅱ区下段北西	41.34	13.79	4.3~5.9	8	18	54	管状土鍾	D1南	32.13	13.31	4.6~4.4	5	
19	管状土鍾	Ⅱ区下段北東	40.94	15.23	4.2~4.4	8	19	55	管状土鍾	Ⅱ区下段北東	33.93	13.44	5.0~5.2	6	
20	管状土鍾	Ⅲ-1T	35.36	15.15	5.0~4.9	6	20	56	管状土鍾	Ⅱ区下段南	35.56	14.77	4.6~4.2	7	
21	球形土鍾	Ⅲ-1T中層	50.85	17.85	7.8	19	21	57	管状土鍾	Ⅱ区下段西平	37.52	14.85	5.7~4.6	5	
22	球形土鍾	Ⅲ区下段	26.22	24.71	6.1~5.5	14	22	58	管状土鍾	Ⅱ区下段南端	40.44	12.84	3.5~3.9	7	
23	球形土鍾	Ⅲ区下段	21.19	26.15	5.2~5.2	13	23	59	管状土鍾	Ⅱ区下段南端	42.36	16.42	6.0~5.3	9	
24	球形土鍾	Ⅲ-3T下層	20.51	24.1		5	24	60	管状土鍾	Ⅱ区下段西	44.18	13.2	5.0~4.4	6	
25	紡錘土鍾	D1南東部土層	56.82	7.8~8.85	37	25	25	61	管状土鍾	Ⅱ区7色土	27.4	14.36	—	6	
26	管状土鍾	M9	26.79	17.23	6.2~5.0	7	62	管状土鍾	Ⅱ区茶褐色土	30.68	13.74	4.0~4.9	5		
27	管状土鍾	D1南東部	35.86	13.15	4.5~4.2	6	64	管状土鍾	D1南	26.82	14.28	4.2~4.6	5		
28	管状土鍾	D1南東部	43.37	13.92	4.2~4.6	7	65	管状土鍾	Ⅲ-1T中層	31.84	14.03	4.6~5.6	6		
29	管状土鍾	Ⅲ区中層	32.79	13.64	4.0~2.9	5	66	管状土鍾	Ⅱ区下段南	30.26	13.94	4.1~3.7	5		
30	管状土鍾	Ⅲ区下段西	22.34	13.64	4.5~4.2	3	67	管状土鍾	Ⅱ区中層茶褐色土中	27.98	14.86	5.7~5.4	4		
31	管状土鍾	P433	29.13	13.61	—	2	68	管状土鍾	D1南西側	30.66	13.11	5.0~5.2	3		
32	管状土鍾	Ⅲ区下段D1西	44.63	17.14	4.6~3.7	11	69	管状土鍾	Ⅱ区下段北西	34.92	14.86	6.3~7.3	6		
33	管状土鍾	Ⅲ-1T下層	36.57	15.7	6.1~5.3	7	70	管状土鍾	2-1T下層	25.68	14.74	3.9~4.2	5		
34	管状土鍾	Ⅲ区下段西	38.66	14.36	4.2~3.5	6	71	管状土鍾	D1南西側	24.42	15.06	5.6~4.6	4		
35	管状土鍾	Ⅲ区下段西平	36.62	14.26	4.4~4.6	8	72	管状土鍾	D1南西側	22.85	14.28	4.6~4.9	3		
36	管状土鍾	Ⅲ区下段西	36.64	17.24	4.4~4.6	9	73	管状土鍾	Ⅱ区下段南端	58.27	14.11	5.0~3.8	5		
								74	管状土鍾	?	25.86	16.12	4.5~4.3	6	

棒状土鍾 (21) 一方の端部を欠くため全体の長さは不明だが、円柱状の体部は管状土鍾に比して長めになるものと思われ、扁平に押さえられた端部には円孔が穿たれる。

球形土鍾 (22~24) 24は半欠資料だが、完形の22・23では球形の体部に円孔が貫通し、紐で縛った際に滑らない工夫とみられる溝が側面の一方に1条刻まれている。

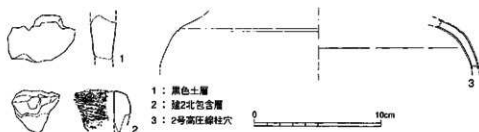
紡錘土鍾 (25) D1の南側黒色包含層から出土した。土師器甕の肩部破片を再利用したものとみられ、円板形に整形し、周縁を研磨して、中央に円孔を穿っている。直径5.0cm前後の不整形で、厚さ1.0~1.4cm、孔径0.7cmの大きさ。

フィゴ羽目 (図版1・2)

いずれも小片で、径を復原することはほぼ不可能である。1は黒色土層から出土したもので、内面が凹凸を有する。外面は図上半で暗灰色、下半では黄白色を呈する。2は3号建物北側に近接して出土したもの。外面は中程で剝離し、先端付近では暗灰色となって硬化する。形状は不整である。内面は刷毛目状のシャープな刻線が入る。

高圧線遺構

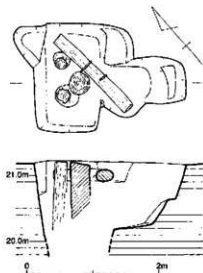
Ⅱ区の1号溝状遺構に近接して1対、Ⅲ区中程で1対のかって高圧線に使用されていた柱痕を検



第48図 その他の出土遺物実測図 (1/3)

出した。仮に前者を1号、後者を2号として説明を加える。

1号は土坑心々で3.5mの間隔をおいて設置される。その中の北西に位置する土坑の一部を発掘した。やや小振りの柱を添えるようにして、直径30cmの円柱が立ち、さらに添柱と反対方向に直径20cm、長さ1.5mほどの柱が水平に置かれ、中心柱との間には太い針金で緊縛されていた。発掘は柱が新しいこと、そして針金の状況さらには隣接して高圧線鉄塔が位置することなどからこれが高圧線の前身と判断して発掘を止めた。それ以前に豊前市教育委員会がやはり長大な丸太を水平に埋め込んで針金で緊縛した高圧線遺構を検出していたことが参考となった。



第49図 高圧線遺構実測図 (1/60)

2号遺構は北東に位置する土坑がこの1号土坑と同様な構造をしている。なお、両者の間は約80mを測る。

出土遺物 (巻頭図版1、図版19、第48図3)

2号遺構の埋土から出土した内外面に施釉した陶器。壺の片であろうか。外面には甘い凹線を1条巡らせ、その下位は横溝でが顕著である。内面は当て具痕と思われる弱い凹凸がある。残存部全体に施釉され、釉は暗緑褐色に発色する。また、釉は内面では一様に厚く、外面では剥落が多くなっているが、これは焼成温度の結果と思われる。胎土は灰色を呈し、精良で砂粒をほとんど含まない。内面の釉の状態から壺のような形態であるかも知れない。国産かあるいは輸入品かも定かでない。

5) 小 結

以上が今回の調査の内容である。遺構が密集していて、すべての建物跡を把握できたとは思えないが、主要な遺構については上記したとおりである。出土遺物には旧石器時代、弥生時代に属するものも散見されるが、出土状況から、また量的に見てもその時代の遺構が高い密度で存在したとは思えないものである。ただ、長い間、この遺跡周辺に先人の生活が営まれていたことは間違いない。

遺跡の中心は古代から中世にかかるもので、越州窯系青磁や緑釉陶器が大量とはいわないまでも、一定程度出土していて、ごく一般的な集落とは大いに様相を異にする。

以下では時間と紙幅の制約があって十分なものではないが、簡単にまとめておく。

出土土器について

近年、この福岡県東部に位置する豊前地方でも圃場整備事業を初めとする大規模な調査が展開し、古代・中世の遺跡の資料がかなり蓄積されてきたが、多くが未報告なため未だ土器の変遷は見えてこない。この地域の土器編年をはもっぱら大宰府における編年、および近年精力的に取り組まれ、飛躍的に進展した北九州市や宇佐市といった豊前の南北両端の編年が使用されている状況である。そうした中であって、この越路六郎遺跡では従来この地域で出土例が乏しかった時期の良好な遺物を出土した。その位置付けを考えてみたい。

13号土坑

土師器小皿 器形的には底部が丸味をもつもの、口縁部が小さく外反するものが優勢で、一部に

平底あるいは体部から口縁部にかけて内彎するものがある。切り離しは確認できるすべてが断切りである。口径は9.6～12.0cmで、ピークは10.5cm付近にある。器高は1.3～2.5cmで、同2.2cmとなる。

土師器杯 1点存するのみである。底部は平高台となり、体部下半が丸味をもって急角度で立ち上がり、口縁部が小さく外彎する。口径12cm、器高4cmを測る。

土師器碗 高台高が1cmほどで、体部が丸く、角度をもって立ち上がり、口縁部が小さく外反する。口径12.4～13.4cm、器高4.5cmである。

黒色土器 内黒だけで、器形は土師器碗に共通する。唯一全体の窺える資料では口径14.8cm、器高5.6cmで、土師器碗より一回り大型である。

土師器甕 体部外面に粗い平行叩きを付すもので、内面は撫で調整する。

14号土坑

土師器小皿 多数の資料が出土しているが、器形的には13号土坑の範疇を出るものではない。法量は口径が9～12cmの幅をもつが、ピークは10～11cmに7割強が集中する。器高は1.5～2.0cmに集中し、口径は13号土坑に、器高は15号土坑に近い数値となる。

土師器杯 これには底径が大きく、体部が急角度で立ち上がって口縁部が外反するものと、底径が小さく、直線的に浅く開くものがあるが、法量的には差別化できない。口径12～14.6cmで、特に集中する傾向はなく分散する。器高は3～4.1cmで、これも同様である。

土師器碗 高台はおおむね2cm前後の高さを有するものが多いが、中には1cm前後の低いものもある。体部は下半が直線的に立ち上がり、口縁部が強く外彎する深碗、湾曲が弱いあるいは直線的に開くもの、体部下半から内彎しつつそのまま口縁部まで連続するものなどバラエティがある。口径は小型品を除けば13～16cmの間にあって、分散する。器高は4.8～7.7cmにあるが、最高値の個体は深碗で、それを除けばほぼ5.3～6.2cmの間に収まる。

黒色土器碗 これも基本的に内面のみを黒色化する。体部は内彎して口縁部が小さく外反するものの、体部から口縁部にかけてが半球形を呈するものが相半ばする。傾向として、外彎口縁を有する個体は高台が1.5cmほどと高く、半球形となるものは1cmほどと低い。法量は土師器碗に似る。

その他の土器 この土坑からは緑釉陶器1点、越州窯系青磁2点が出土するが、いずれも小片であり、積極的に供伴関係を云々するのは憚られる。

15号土坑

土師器小皿 器形・底部切り離し技法は13号土坑に似るが、口径の中心が10cm、器高が1.8cmほどと小型化している。

その他の器種・土師器碗・黒色土器碗は資料が乏しいが、これも13号土坑に似て、法量もほぼ同様である。

以上の3基の土坑の関係は、土師器碗、特にその高台の形状から14号土坑がもっとも先行することと推測される。時期比定の根拠は独自のものがなく、佐藤氏の編年に従えば10世紀後半～11世紀中頃に比定できる資料と思われる。糸切り底の土器が非常に少量であることは、上記の年代幅の中でも古い段階に属するものであろうか。13・15号土坑は14号土坑に様相に近いが、高台が縮小化することから後続するものであろう。これらは供伴する陶磁器が乏しいものの、土師器・黒色土器等の良好なセット関係を示すもので、今後標識的なものとなるであろう。また、土師器の形態差などについては、筆者が不勉強のために指摘できなかったが、とりえず資料提示として了承されたい。

本遺跡では16号溝の須恵器高台付杯、茶褐色上層出土の扁平なつまみ付き蓋など8世紀～9世紀前半の資料、1号土坑出土の体部が直線的に開く高台付碗・杯のように9世紀代に遡ると思われる資料も若干存在するが、圧倒的に10～11世紀代の資料が多い。そして龍泉窯系劃花文青磁碗・同安窯系青磁碗など12世紀後半の指標とされるものが多くはないものの主として包含層中に一定量あり、典型的な蓮弁文碗などの出土をみないことからほぼ13世紀前半迄には放棄されたようである。

掘立柱建物跡について

比較的大型の建物跡2棟と小型建物跡3棟を想定した。1号建物跡は2×5間南面庇を有するもので、全体規模は7.5×9.6mを測る。桁行柱間距離は約1.9m。4号建物跡は3×6間、6.4×12.6mの規模で、同じく桁行柱間距離は2.1mを測る。この両建物跡はほぼ東西方向に長軸がのるが、これは地形に沿ったものともいえ、意識的なものか否かは確信できない。また、この遺跡ののる丘陵は幅(南北長)100mほどに過ぎない狭隆なので、十分な区画を確保できない地形的制約がある。また、調査範囲がせまいという条件付きであるが、建物の配置に規則性はみえず、その意味では積極的な官衙的性格を想定することは憚られる。

柱穴出土遺物からみて、4号建物跡は12世紀中葉を中心とする時期に比定できると思われる東播系須恵器器指跡からその頃に年代の一端を想定できる。また、これが茶褐色土層を掘り込むことからみれば12世紀末迄の年代幅を考える必要があろう。1・3号建物跡出土の瓦器碗はいずれも胎土・作りともに良好な部類に属し、瓦器碗出現時とさほど隔たらない時期のものと考えられ、12世紀前半～中頃に比定できよう。2号建物跡を囲む2号溝出土遺物も同様の内容をもつ。もともと、柱当たりと堀形の区別を行っていないため、これらは建物の上限を示すに過ぎないものであるが、遺跡の在り方や建て替えのみられない掘立柱建物であることを考慮すればさほど時間幅を考える必要はなからう。

これらの建物跡がおよそ12世紀に造営されたものとして、その位置付けはどうかであろうか。

この時期の遺跡は周辺地域ではほとんど知られておらず、ほとんど初見に近いようである。12世紀といえば、豊前一門はほとんどが宇佐宮・弥勒寺の荘園となっていて、旧築城郡(現築城町・椎田町および豊前市北西の一部)内でも永承2(1047)年以降、赤幡社領・角田庄・築城庄・大野庄・奈占庄などが12世紀後半までに成立した。これらの具体的な範囲は不明であるが、神社あるいは地名に名を留めている。その中で、越路地区は大野神社に連なる丘陵上に位置することから大野庄に属した可能性が高く、神領に取り込まれたのは安元元(1175)年である。ちょうど建物跡群の年代に符合するが、13世紀以降の遺物がほぼ皆無に近いことは荘園成立を期に廃絶した、それ以前の集落であったと思われる。

この遺跡は幾度か記したように、古代官道―それは後世には宇佐宮への郵便街道と呼ばれるようになり、近・現代まで主要な道路として使用された―に近接して物資の流通に関わっていたことが容易に想像される。またこの遺跡は丘陵上に占地していて、現椎田市街地周辺の平野部を見通すこともできる。今一つ、付け加えておかねばならないことは鉄製品の生産にも関わっていたらしいことである。いずれも包含層中であり、明確な鍛冶炉を検出していないが、鉄素材と思われる板状鉄片やスラッグ、加工途中とおぼしき遺物などの存在から間違いのないであろう。時期の確定が困難であるが、これらの多くが包含層上層(茶褐色土層)から出土していることは上記の建物跡に対応するものである可能性が高い。農業生産や戦に関わる広範な鉄製品の供給を担っていたようで、

この意味からも、一般的な農村集落ではあり得ないことが予想されよう。したがって、遺跡の全体は窺い知れないものの、内容豊富な出土遺物から推して築城郡衙・「築城駅」、あるいはそれらに準ずる施設と密接な関わりを有していたものと推測される。

築城郡衙・「築城駅」は地名の考証や石帯・銅椀・墨書土器・緑釉陶器・製塩土器といった特殊な遺物を多く出土した築城町築城・赤幡地区の低地に比定されることが多い。そこは地域の主要河川である城井川左・右岸にあたり、「築城駅」の場合は特に渡河を重要な要因としての想定であろうと思われるが、視界はさほど効かない。この越路地区は先に記したように岩丸川左岸の低丘陵上にあって、北および東への視界は乏しいが、南および東への眺望に恵まれている。地形的にみれば、この越路地区あるいは同一丘陵上に続く築城町広末地区に築城郡の中枢が設置された可能性はむしろ高いといえる。広末地区では南に山を控えるが四方に視界が開けている。一般に、郡衙は律令体制の変容・衰退と期を一にし9世紀あるいは10世紀に多くが廃絶あるいは規模縮小したとされる。本遺跡では10～12世紀の土坑や建物跡が検出されたが、これらが律令体制下の地方組織の最後の姿であったのかも知れない。

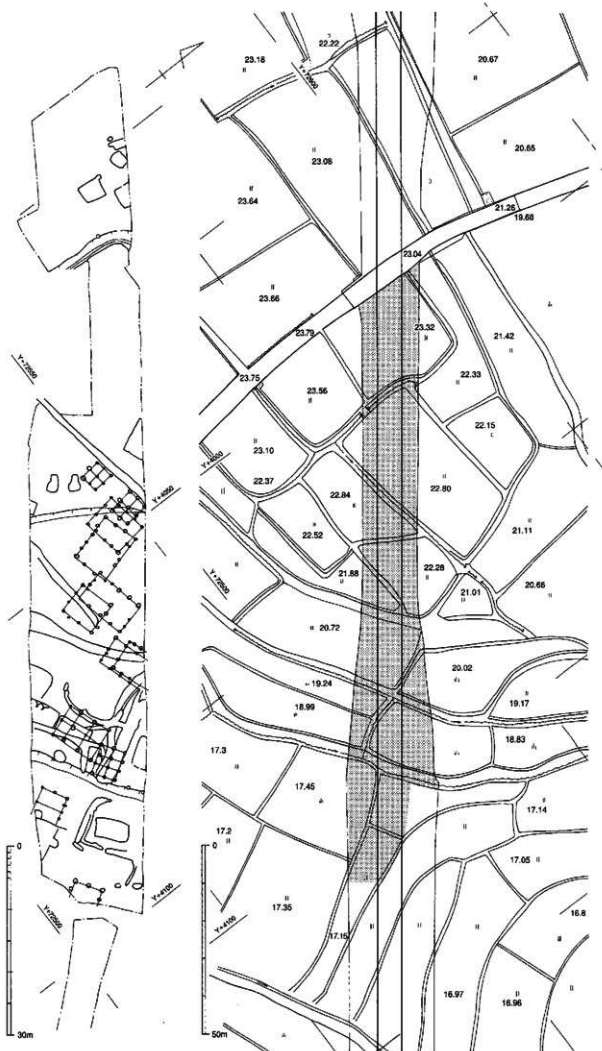
余談ながら宮本長二郎氏によれば古代集落遺跡のうち、1000余棟の掘立柱建物を集計した結果、「桁行3間は45.8%、桁行2間は25.8%、桁行4間は12.8%、桁行5間は6.6%、桁行1間は6.7%、桁行6間以上は2.4%である」という。本遺跡で検出した建物跡を評価する上で参考までに掲げておく。

以上でみたように、この調査区で検出した建物跡はいずれも12世紀代に造営・廃絶したものと考えられ、建物の造営以前は土坑群が形成されていたと思われる。それらの性格は掴みがたいが、包含層に緑釉陶器や越州窯系青磁を含む多くの遺物が混ざっていることから、近接して土坑を形成した時期の集落が存在することは確実で、掘立柱建物群で構成される遺跡の中心部が移動したことを示唆する。越州窯系青磁や各地の緑釉陶器、灰釉陶器、京都産須恵器などの豊富な外来遺物が官道に近接する集落としての特徴を如実に示しているが、より具体的には築城郡衙あるいは記録にある「築城駅」の位置と内容が判明することによって一挙に進展するであろう。

この発掘調査で得られた資料からとりとめもなく記述してきた。2層に分層した包含層出土資料を中心に集落の性格を求めるよりどころとしたが、厳密な資料操作ができず、輸入陶磁器や鉄製品などは特に所属時期を無視した部分もある。建物跡の燔属時期も同様である。その点も含め、越路六郎遺跡の総括に関して今後に期したい。

註

1. 佐藤浩司「田舎前川における古代末から中世前期の土器様相」(『中近世土器の基礎研究』Ⅲ、1991)
大分県立宇佐風土記の歴史民俗資料館「赤松寺」(『大分県立宇佐風土記の歴史民俗資料館報告』第7集、1989)
中島恒太郎「西北九州から見た豊前国の食器相—古代から中世前期—」(『中近世土器の基礎研究』Ⅲ、1987)
 2. 森田聡「東播磨中世須恵器の生産と流通」(『中近世土器の基礎研究』Ⅲ、1987)
 3. 福岡県教育委員会「藤ノ神遺跡・赤幡森ヶ坪遺跡・十双遺跡」(『熊田バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第8集、1992)
 4. 堀崎直「国と郡里」(『古代史研究』8 古代の宮殿と寺院、1989)
 5. 宮本長二郎『日本原始古代の住居建築』1996
- その他
竹内理三編『角川日本地名大辞典 40 福岡県』、1991
河野房男『古代史』(『宇佐市史』上巻、1975)
を参照した。



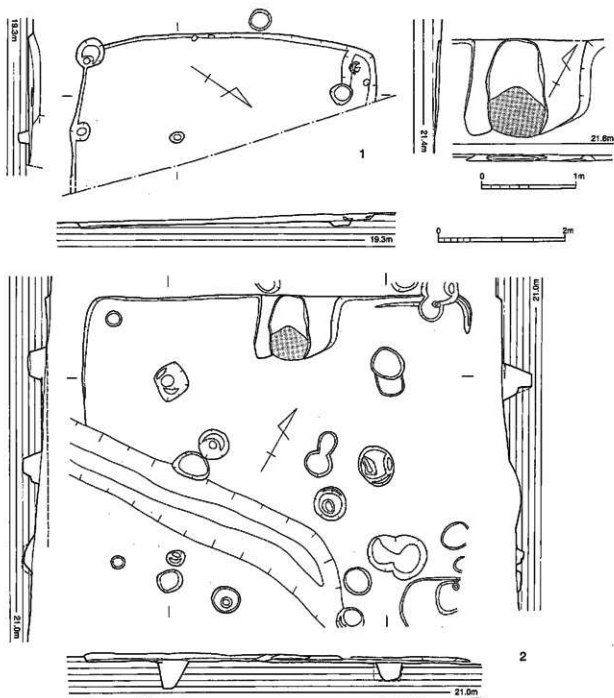
第50図 越路貴船遺跡地形図・全体図 (1/1,000・1/600)

第51圖 越路式船塢通船配置圖 (1/300)



2. 越路貴船遺跡

越路貴船遺跡は、大字越路字三反田632-3、633、634-1、635、字貴船639、640、641、645-1、646-1番地の約3,000㎡を、平成10年1月6日～3月31日に発掘調査し、620・621-1番地部分の110㎡を平成11年5月19日に補足調査した。発見された遺構は次の通りである。



第52図 貴船遺跡 1・2号住居跡および2号住居跡カマド実測図 (1/60・1/40)

- ・ 堅穴住居跡 4 (古墳時代後期)
- ・ 堅 穴 8 (時期不明の住居跡状堅穴を含む)
- ・ 掘立柱建物跡 12 (古墳後期～中世)
- ・ 柱穴状ピット群 多数のピットは掘立柱建物跡や堅穴住居跡に伴う柱穴である可能性が高いものの、現地調査時に明確にできていない。配置状況から建物跡などを図上で仮に復原すれば、かなりの建物を想定できるであろうが、最小限にとどめた。
- ・ 溝状遺構 6
- ・ 土 坑 8 (古代～中世、焼上坑 3 を含む)
- ・ 土墳墓 1 (平安時代)
- ・ 遺物包含層 主に調査区東南部の下段斜面に広がる。

1) 堅穴住居跡

1 号住居跡 (図版24-1、第52図)

調査区端で発見されたため、全体の規模は不明だが、N32° W方向に長さ4.6mの辺、N60° E方向に2.3m以上の辺が、高さ0.1m前後に残る周壁で確認された住居跡である。床面は僅かに堅く締まるものの、柱穴は明確でない。北西隅部と西側壁際で土器片が出土し、管状土鏝も2点出土した。出土土器 (図版26-2、第53図 1～4)

1・2は住居跡隅部で近接して出土したもので、セット関係を想定できる資料である。1は口縁部に鳥喙状のかえりを有する須恵器杯蓋で、天井部に扁平な宝珠形つまみが付く。口径17.9cm、器高4.0cmの大きさ。やや焼成は甘い。2は高台を有する杯身で、1縁部は底部から直線的に立ち上がる。1径16.7cm、器高6.0cm、高台径11.1cmを測る。須恵器のつくりではあるが焼成は土師器である。3は須恵器長頸壺の緩やかに外反して開く口縁部、4は須恵器の小形壺か杯身の底部かとみられるもので、外径6.8cmの高台は外に開く。

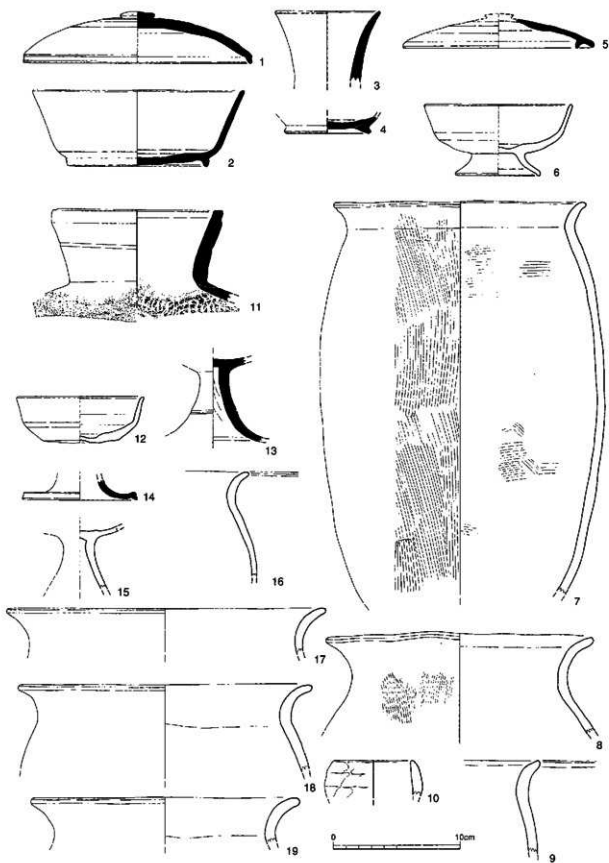
2 号住居跡 (図版24-3、第52図)

調査区中央部で発見されたが、上部を著しく削平されて、カマド施設が付設された北側辺の周壁が、僅か0.05m前後の高さで、長さ6.0m残る程度である。北側辺の壁はN60° E方向を向く。北部だけが残る床面は平坦でカマド前面のみが堅く締まる。北側の柱穴2穴はカマド前面を挟んで対峙し、隅から約1.5m、北壁から約1.0m余の位置にあり、柱穴の柱痕間距離で3.4mを測る。この柱穴に平行して伴件する南側柱穴と日される柱穴は、2.8m程南側にあり、これをもとに推定した住居跡は南北が約5.4m程の長方形プランである。北西側の柱穴は直径0.5m、深さ0.4mの規模である。カマド周辺から須恵器杯蓋片と土師器小片が若干出土したが、図示しえる資料は少ない。

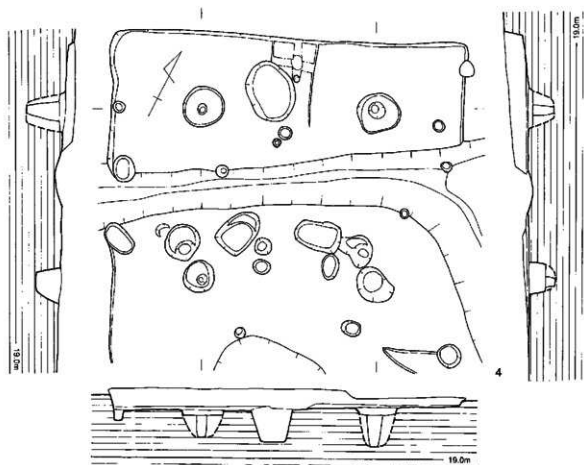
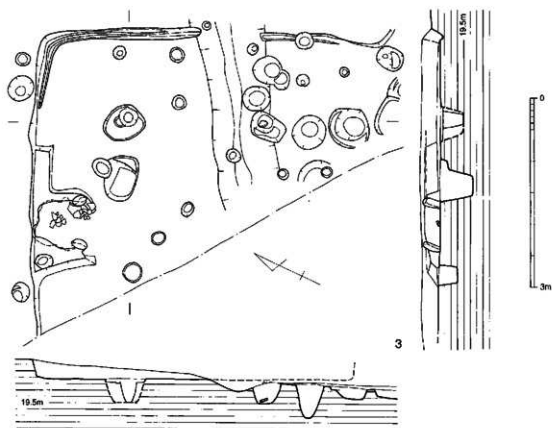
カマド (図版24-4、第52図)

住居跡北壁の中ほどで南側に長さ0.9m、幅0.2～0.6mに延びる両袖部と、これに挟まれた長さ0.5m、幅0.6mの範囲が焼けて赤く硬化しているカマドの基底部のみが発見されている。火床より奥側は、床が僅かな傾斜で北壁側に浅くなるが、煙道などの痕跡はみられない。左袖外側は掘削で削られている。

出土土器 (第53図 5)



第53図 住居跡出土上器実測図 (1/3)



第54图 3·4号住居跡実測図 (1/60)

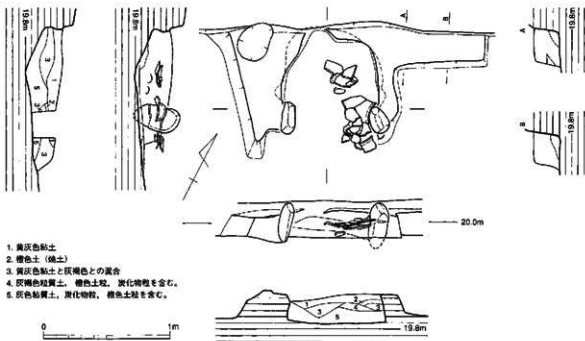
調査時に収納していた袋がカラスによって混乱されたが、5の杯蓋片がカマド右側から出土したと記憶している。復原口径15.0cmの大きさの、口縁部に身受けのかえりを有するもので、大井部につまみが付くと思われる。

3号住居跡 (図版25-1、第54図)

2号住居跡の約14m南方で発見された方形ないし長方形プランの堅穴住居跡で、南西側が調査区域外にもぐるため全体の形状は不明だが、北側周壁に付設されたL字形煙道付きカマドの位置を北側辺の真中に想定した場合、N64E方向を向き、高さ0.3mに残る北壁は東西約6.0mと推定される。東壁は床面に周溝を伴って、4.7mの長さに残るが、南側が削平されて消滅する。後世の1号溝が中央部を寸断していて、この溝の北側では床面がやや堅い状態で検出されるが、溝の南側では明確でなく、南壁の位置はわからない。北東側の柱穴は、直径0.5～0.6m、深さ0.4mで、柱痕は周壁隅から約1.8m、壁から約1.4、1.5mの位置にある。いま南東側の柱穴を後世の溝で半分削られる柱穴で想定すれば、柱間距離は約2.0mであるが、柱間距離2.8mの位置にも該当しそうな柱穴がある。前者の場合は南北が5.2m前後、後者の場合は6.4m前後である。

カマド (図版25-3・4、第55図)

住居跡北壁の中ほどに付設された、南北0.9～1.0m、東西1.3m、高さ0.25mの規模のカマドで、両袖部に立石があり、肩石が架かるタイプのカマドとみられるが、肩石は残らない。袖部立石は長さ30cm強、幅20cm強、厚さ10cm前後で、右側が幾分大きめだが、据え付け時に埋め込みの深さで調整して上面の高さを揃えている。燃烧室は幅0.7m、奥行き0.8mの規模で、床面は僅かに赤変硬化する程度である。支脚石は残らず、右袖部に近接して土師器甕片が集中し、燃烧室上面で須恵器高杯が出土した。煙道は右袖奥壁の下部の幅20cm、高さ5cmの黒灰色がかった上質の部分が相当し、右側袖外側の住居周壁に沿って続く幅20cm強、高さ20cmほどの黄色粘土部分に煙道が延びる。



第55図 3号住居跡カマド実測図 (1/30)

調査時に住居跡北東辺まで一体に黄色粘土部分が広がっていたものの、カマド付近以外では他の埋没土との境界が明確でなく誤って掘りすぎたため、煙道が何処まで続いていたか詳らかでない。住居周壁に沿った周溝が北東辺にまで続くので、あるいはこの部分まで煙道が続いていたことも考えられる。この場合当該地域で頻例が増加しているL字状煙道付きカマドの一例となるが、右袖部外側に残った80cm続く煙道がその可能性を高くしている（図版255）。

出土土器（図版262、第53図6～10）

6は低く太い脚台を有する高杯で、焼成が甘く軟質である。口径11.6cm、脚裾外径6.8cm、器高5.6cmのうち杯部高が3.9cmを占める。杯部は丸みをもった底部から直線的に口縁部が開き気味に立ち上がり、脚台部は高台が外反して伸びたような器形で胴部内面に段がある。カマド内から出土した。7は長胴の土師器甕で底部は残らない。口縁部は外反し端部は丸みをもつ。胴部は叩き痕が不明瞭で外面には縦方向のハケ目、内面は横方向の板小口で削られたような痕跡とハケ目が残る。口径19.8cm、残存器高30.8cm、胴最大径22.4cmの大きさ。胎土に赤褐色粒・雲母・砂粒を多く含む。8はカマド右側の上部から出土した土師器甕の口縁部破片で、やや長めに外反する口縁部は殆ど肥厚しない。胴部外面はハケ目調整されるが、内面は磨滅して不明。復原口径21.0cmの大きさ。9は肥厚気味であり外反しない土師器甕の口縁部破片であるが、内外面ともに磨滅して調整手法は不明。10は黒色を呈する良好な焼成の手捏碗とみられる土師器口縁部破片で、復原口径6.4cmの大きさ。

4号住居跡（図版261、第54図）

3号住居跡の東側に近接して発見された方形ないし長方形プランの竈穴住居跡で、中央部を後世の1号溝が貫通して切り込み、溝の南側は削平されるため全体の形状は明確でない。高さ0.3m弱、長さ5.5mに残る北壁は、N65°E方向を向き、東壁は1.6m、西壁は5.2mの長さに残るが、南側が削平されて消滅する。床面はやや堅い状態で検出されたものの、溝の南側では明確でなく、南壁の位置はわからない。北側の柱穴は、直径0.6m、深さ0.4mの規模で、柱痕間距離は2.7m、周壁隅から約1.8m、東西壁から約1.4m、北壁から1.2mの位置にある。南北の柱痕間距離は2.7mであるので、北側の状況からみて南北も5.5m前後の正方形プランの可能性もある。なおこの際に南側中央に施設される例がある屋内土坑は3号土坑によって削られたものと思われる。

カマド

住居跡北壁の中ほどに付設されていたようだが、後世の柱穴による攪乱もあって壁体の痕跡が明確でなく、床面に炭化物の集中と赤化した火床部分が確認できるのでカマドの存在が確認しうるものの、燃焼室の幅0.7m弱、長さ0.8m程の規模と想定できる程度である。

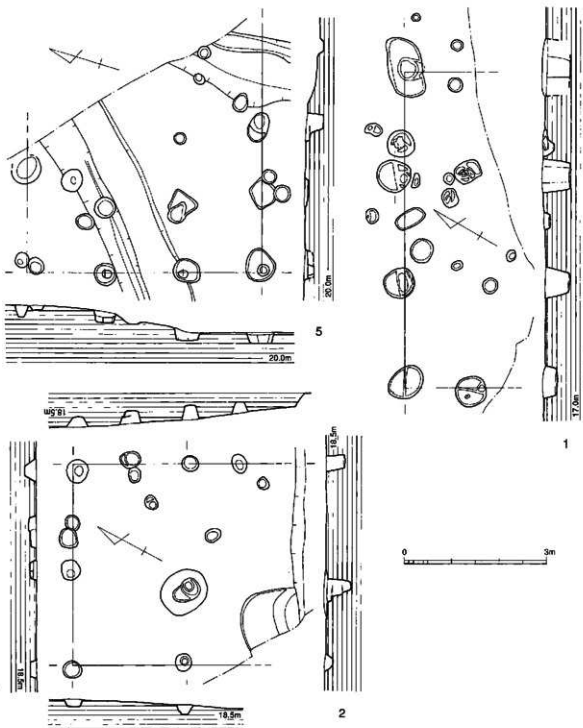
出土土器（図版262、第54図11～19）

11は平底の須恵器小杯で焼成はあまく、復原口径10.2cmの大きさ。12は須恵器甕の口頸部で、口径13.4cmの大きさ。口唇部直下と胴部との中間に各1条の浅い沈線が巡り、肩部外面には平行叩き痕がみられる。床面直上から出土した。13は須恵器高杯の柱状部で、やや甘い焼成。中に沈線が1条巡る。15の高杯柱状部は須恵器のつくりだが焼成が土師器のもの。14は端部が鳥喙状をなす脚裾部破片である。須恵器のつくりであるが焼成は土師器そのものである。16～19は土師器甕の口縁部破片である。口縁部は殆ど肥厚せずに外反する。いずれも器面が風化磨滅して調整手法は不明。

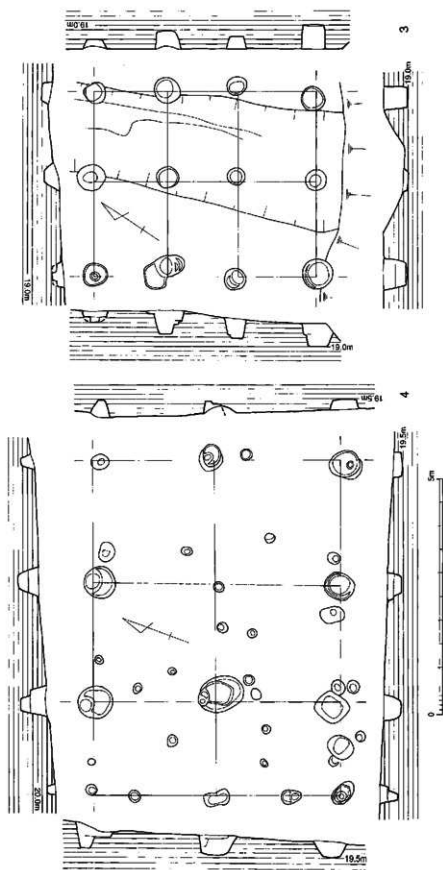
2) 掘立柱建物跡

1号建物跡 (図版27-1、第56図)

調査区東端部で発見されたが、水路と水田面の掘削で東南側は不明。直径0.6m、深さ0.3~0.6m規模の柱穴が3穴並び、柱痕距離で4.4mを測る辺はN57°30'方向を向くが、南側に展開するものと推定される。北東側に2.1m更に延長した位置にも規模の大きな柱穴状ピットがあり、規模の検討が必要であったのに、調査区域外が水路のために調査をなし得なかったのが悔やまれる。



第56図 1・2・5号建物跡実測図 (1/80)



第57图 3·4号建筑物平面图 (1/80)

柱穴出土土器 (第58図 1～6)

1・2・4は西側から2番目、5は西端、6は南西側の柱穴からそれぞれ出土した。1～3は須恵器甕の胴部破片で、外面は平行叩き痕とカキ目調整痕、内面は同心円当て具痕が明瞭に残り、2・3は酷似する。4・5も須恵器甕の胴部破片らしく、4は外面に粗い平行叩き痕、5は外面に格子目叩き痕が残る、外底部付近はナデ消された痕跡がみられる。6は僅かに肥厚した外反する口縁部破片で、土師器甕であろう。器面は風化磨滅する。

2号建物跡 (第56図)

1号建物跡の西側で発見されたが、調査区域と堅穴遺構に削られて全体の規模は不明。2間×2間ないし3間の建物であろうか。北西側の4.2mを測る辺はN61°30'E方向を向く。東側の柱穴は直径0.4m、深さ0.5mの規模を有するが、削平された西側の柱穴は深さが0.1m余りしか残らない。

柱穴出土土器 (第58図 7・8)

7は口縁端部に尖った鳥嘴状のかえりを有する須恵器杯蓋片、8は外面に平行叩き痕、内面に同心円当て具痕を残す須恵器甕胴部破片である。

3号建物跡 (図版27・2・3、第57図)

1号住居跡と4号住居跡の間に発見された2間×3間の総柱建物跡である。長軸方向N34°Wを向き、桁行3.8m、梁間4.7mの規模。柱穴は直径0.5～0.6m、深さ0.3～0.5mの規模である。

柱穴出土土器 (第58図 9～11)

9は外天井部に低い宝珠形つまみを有する須恵器杯蓋、10は托底部に似た小さな高台と平らな底部を有する須恵器片で、底部内外面とも回転ヘラ削り調整されるが、全体の形状は不明。蓋の可能性も否定できない。砂粒を殆ど含まない胎土で、焼成は甘い。11は復原口径19.0cm大の土師器甕の口縁部破片で、口縁部は肥厚せずに外反するが、器面は風化磨滅して調整痕は不明。

4号建物跡 (図版27・4、第57図)

3号建物跡の西側に近接して発見された、2間×2間の総柱で西側に庇の付く建物跡である。4号住居跡、1号溝と重複し、住居跡より後出するが、溝よりは先行する。長軸方向N69°Eを向き、主棟は5.2m四方で、庇は1.9m幅である。柱穴は直径0.6m、深さ0.2～0.5m、庇の柱穴は直径0.2～0.3m、深さ0.2～0.4mの規模である。

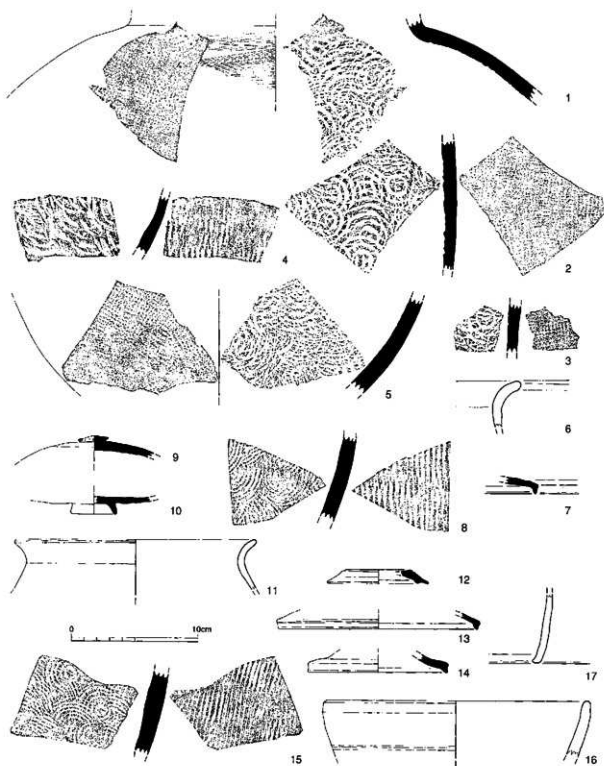
柱穴出土土器 (第58図 12～17)

12は復原口径8.0cm、残存器高1.1cmの須恵器蓋で、口縁部内面に短い身受けのかえりを有する。天井部は平らだが、中央部を失う。13は鳥嘴状のかえりを口縁端部に有する須恵器杯蓋片、14は外径11.0cmの大きさの鳥嘴状端部を有する須恵器高杯の脚裾部破片である。15は外面に平行叩き痕とカキ目痕の残る須恵器甕胴部破片、16は復原口径21.0cmの内彎気味に開く須恵器口縁部破片で、口縁部下に1条の沈線が走る。淡い灰色に硬く焼成され、全体に自然釉が掛かる。17は復原外径12.0cm前後に端部が内彎する土師器片で、瓶の底部かも知れない。

5号建物跡 (第56図)

東側が調査区外に続くと思われる建物跡で、東南側は後世の溝で削られる。3間×3間以上の建物と

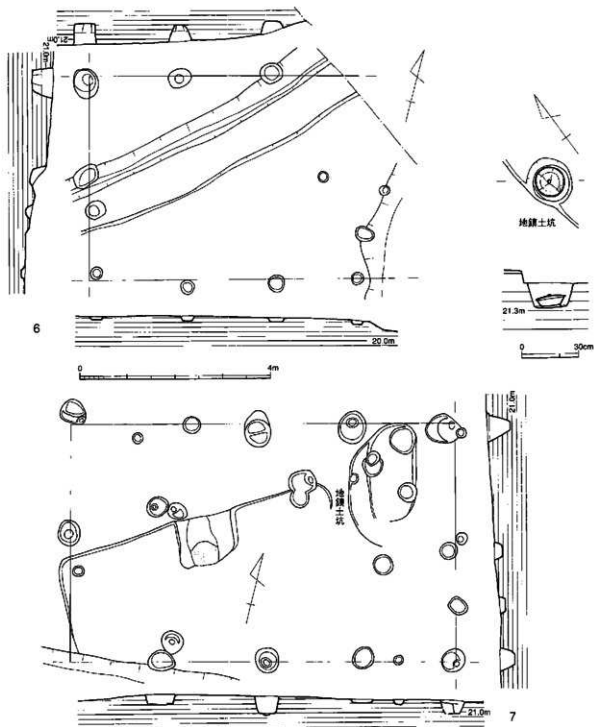
みられる。東西方向の棟を想定し、主軸方向はN72° 30' E方向を向くが、西側辺は4.95mで柱間距離は1.65mを測る。柱穴は概ね直径0.4～0.5m、深さ0.3m内外だが、南側の柱穴は削られて浅い。柱穴内からは何らの遺物も出土しなかった。



第58図 1～4号建物跡柱穴出土土器実測図 (1/3)

6号建物跡 (図版28-1、第59図)

5号建物跡とはほぼ同じ位置で発見された建物跡で、柱穴に重複関係がないため先後関係は分らない。2間×3間以上の東西方向棟とみられ主軸方向はN75° E方向を向くが、東側は調査区域外に続く。西側辺は4.3mあり柱間距離は2.15mとみられる。北側辺の柱穴は直径約0.5m、深さ0.3~0.4mの規模で、南側では削平されて浅い。柱穴内から土師器小片が出土したが図示に耐えない。



第59図 6・7号建物跡および7号建物地鎮土坑実測図 (1/80・1/20)

7号建物跡 (図版28・3、第59図)

2号住居跡と重複する位置に発見された建物跡である。2号住居跡北側隔0.6m東側の位置で、須恵器杯蓋が杯身に被さった状態で小さな土坑内から発見されたことから、建物に伴う地鎮土坑と判断して、周辺の柱穴状ピットの配置を検討して建物を想定したものである。目下のところ2間×4間の東西棟を想定しており、主軸方向はN76°E方向を向く。南西隅の柱穴は後世の溝で失われたらしいが、東西8.1m、南北5.0mの規模で、東西辺の柱穴間は1.9mと2.1m余が交互になる。柱穴は直径0.4～0.6m、深さ0.1～0.5mで深さに不揃いがみられる。なお、北東側で更に北側に平行する柱穴列があり、柱穴間距離も同様であることからこの建物と関連する可能性もある。

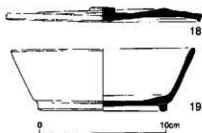
地鎮土坑 (図版284、第59図)

建物の北東隅部の内側に長さ2.0m、幅1.4m、深さ0.1m弱の浅い落ち込み状の土坑がある。この土坑の西端部で、建物北側辺の東端から2番目の柱痕穴より南側約1.0mの位置に、柱穴よりも小さな直径0.25m、深さ0.1m強の円形土坑があり、この中に2°余りの傾斜で西側が低い正常位に須恵器杯身が据えられ、杯蓋が被せられた状態で発見された。杯身内には土砂が堆積しており、精査しながら除去したが土砂以外に何らの個体も肉眼観察では検出されなかった。

地鎮土坑出土器 (図版285、第60図18・19)

18は口縁部に短い鳥嘴状のかえりを有する杯蓋で、膨らみのない大井部中央に扁平な釦状のつまみが付く。口径15.3cm、器高1.2cmの大きさ。胎土に粗い砂粒を僅かに含み、硬く焼成される。

19は底部端に断面四角形の高台が付き、底部から直線的に口縁部が開く器形の須恵器杯身だが、胎土に粗い砂粒を含み、焼成は軟質。口径14.4cm、器高5.0cm、高台外径10.1cmの大きさ。この須恵器杯蓋と杯身は8世紀中頃の特徴を有している。



第60図 7号建物地鎮土坑出土土器実測図 (1/3)

8号建物跡 (第61図)

7号建物跡と重複する位置に発見された2間×3間の東西棟総柱建物で、南北5.3m、東西5.5mの規模、主軸方向はN74°Eを向く。北側辺中央の柱穴は2号住居跡カマド西側の掘削と重複して不明だが、東西各辺の柱穴間距離で南側2間の1.8mに対して1.7mと僅かに短いことから、あるいは南側のみの2間×2間の建物であった可能性も残る。この際には南北が3.6mの規模になる。柱穴は直径0.3～0.5m、深さ0.1～0.3mの規模である。なお柱穴では7号建物跡との重複関係がないため前後関係は不明である。柱穴内からは土師器小片が若干出土したものの図示に耐えない。

9号建物跡 (図版29・1、第61図)

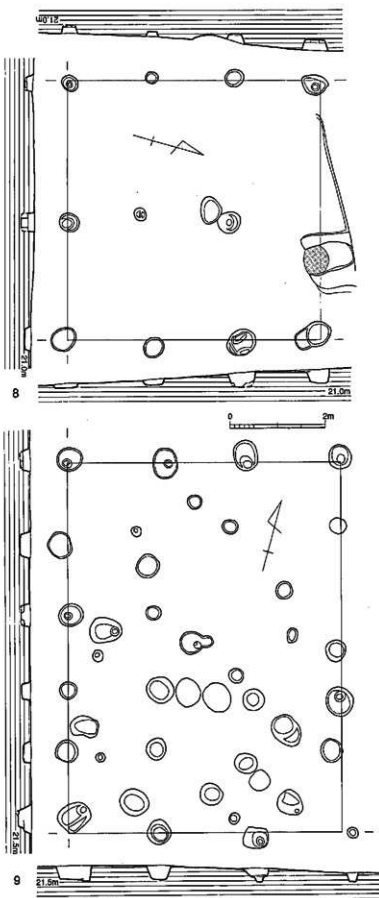
8号建物跡の北西側に近接する位置に発見された3間×5間の南北棟建物で、南北7.8m強、東西5.7mの規模、主軸方向はN15°30'Wを向く。東側辺は西側辺と柱穴間距離に不揃いがみられるものの、東西方向には約1.9mで柱穴間距離が揃う。柱穴は直径0.5m前後、深さ0.2～0.3mの規模である。

柱穴出土土器（第63図20～22）
20は鈍い鳥喙状の口縁端部をもつ須恵器杯蓋片、21は外面が平行叩き痕とカキ目、内面が同心円当て具痕の残る須恵器甕胴部破片、22は肥厚して外反する土師器甕口縁部破片である。20の杯蓋は8世紀に入るものであろう。

10号建物跡（図版29-2、第62図）

9号建物跡の北西側に重複する位置で発見された3間×4間の東西棟建物で、東西6.7m、南北5.55mの規模、主軸方向はN79°Eを向く。9号建物の柱穴との重複はみられないので、前後関係は詳らかでない。柱穴は直径0.4～0.6m、深さ0.2m弱だが、削られていない北西側では0.5～0.6mの深さに残る。

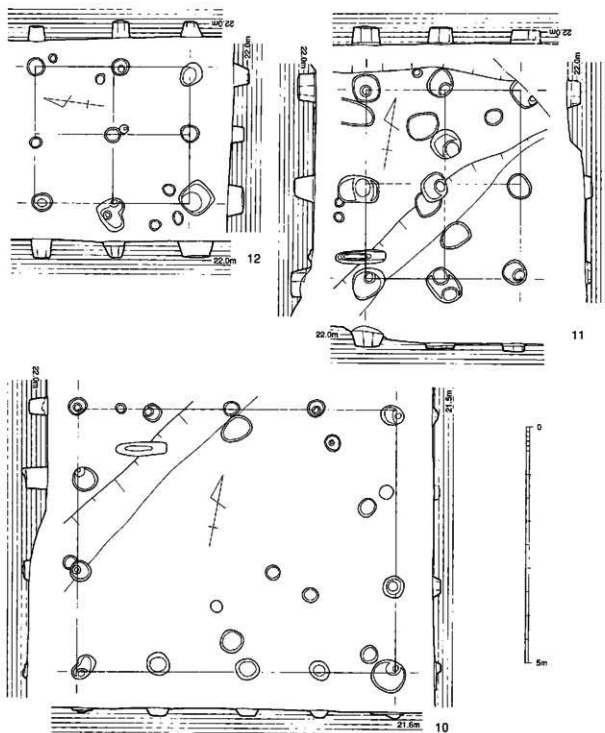
柱穴出土土器（第63図23～29）
23～25は身受けのかえりを有する須恵器杯蓋の口縁部破片で、23は復原口径12.1cm、25は復原口径17.6cmの大きさ。26は口縁部が内彎する須恵器杯蓋の口縁部破片、27・28は高台を有する須恵器杯身の口縁部と底部破片で、27の復原口径は12.0cm、28の高台外径は8.3cmの大きさ。29は鳥喙状の端部をもった須恵器高杯の脚裾部破片である。これらの土器では新しい要素のある27～29の特徴は7世紀後半頃のものである。



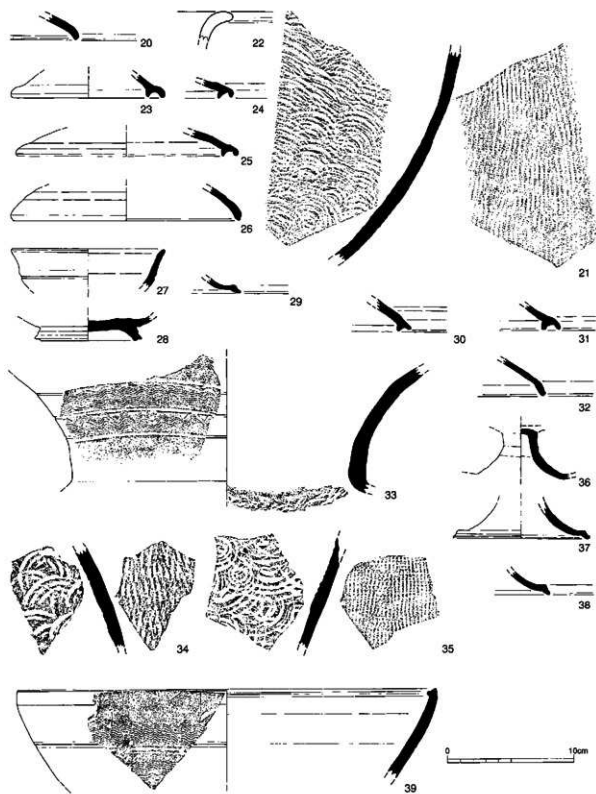
第61図 8・9号建物跡実測図（1/80）

11号建物跡 (図版293、第62図)

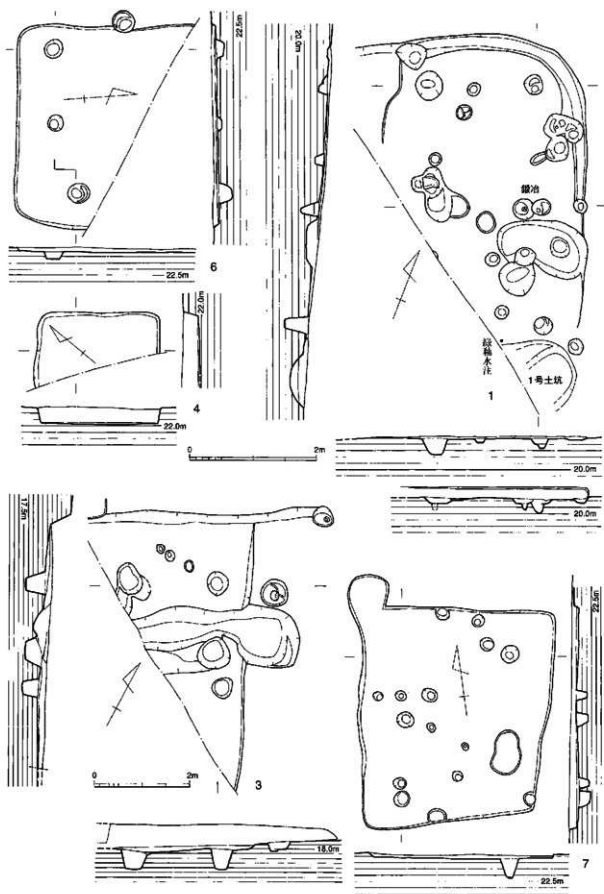
10号建物跡の北側に一部重複するかたちで発見された2間×2間の南北棟らしい総柱建物で、東西3.25m、南北4.0mの規模、主軸方向はN9°30'Wを向く。10号建物とは柱穴での重複関係がないので前後関係は詳らかでない。柱穴は一边0.5m前後の隅丸方形、深さ0.4m前後だが、削られる東南側では0.1m強しか残らない。



第62図 10～12号建物跡実測図 (1/80)



第63图 9~12号建物跡柱穴出土土器実測图 (1/3)



第64図 1・3・4・6・7号竪穴および1号土坑実測図 (1/60・1/80)

柱穴出土土器 (第63図30~38)

30・31は口縁部に身受けのかえりを有する須恵器杯蓋片、32は内彎する口縁部の須恵器杯蓋片、33は平行沈線間に波状文が飾られる須恵器甕の頸部破片、34・35は外面は平行叩き痕、内面が同心円当て具痕の須恵器甕の胴部破片、36~38は裾端部が鳥嘴状になる須恵器高杯の脚台部破片である。これらの土器では、7世紀後半頃の特徴を有している。

12号建物跡 (図版30-1、第62図)

11号建物跡の西側で発見された2間×2間の南北棟らしい総柱建物で、南北3.25m、東西2.85mの規模、主軸方向はN7°30'Wを向く。柱穴はいずれも直径0.3m、深さ0.3~0.4m規模だが、南西隅の柱穴のみ直径が大きい。

柱穴出土土器 (第63図39)

復原口径33.0cmの大きさの内彎気味に開く口縁部破片で、口縁端部は内面側に短く突出して段をもつ。外面には2条の沈線が走り、沈線の下に波状文が走る。須恵器大形鉢であろう。

3) 堅穴

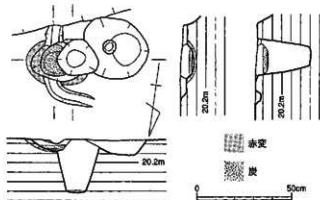
1号堅穴 (図版30-2・3、第64図)

3号住居跡の北西側に近接して発見され、南西側が調査区域外に潜るため全体の形状は不明。上部も削平を受けて殆ど残らず、南側の端は分からない。堅穴住居跡の可能性もあり、北東部に残る周溝は隅丸方形ないし隅丸長方形プランを窺わせる形に弧を描く。周溝は幅0.2m、深さ0.05mほどで、東側では長さ2.0m前後までは確認できたがその先は削平のために消えて周壁の痕跡らしい部分が続く程度である。西側の小ピットに繋がった先は不明確で、周壁の痕跡すらも明確でない。この周溝で区画された部分は長さ4.0m + a、幅3.0m前後のようで、この範囲の内側はやや硬く締まり、床面と判断されたが、南東部は不明確で、1号土坑との境界や前後関係も不明である。堅穴内の床面を掘り込む柱穴状ピットが幾つかと楕円形の土坑が検出され、直径0.3~0.4m、深さ0.2~0.3mの比較的小さめのピットの配置から1間×2間の建物を想定することができる。この場合1.6m前後と1.9mの柱間距離となるが、南西側の調査区域外に続く可能性もある。また北東辺の中間の柱穴は後述する鍛冶遺構を切り込む。

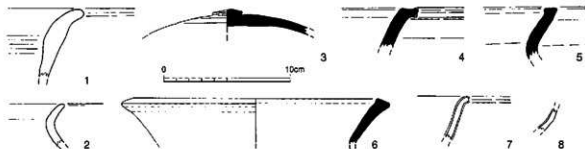
なお、調査区へ流入する水を排水するための溝を調査区端に掘削中、1号土坑縁の付近で緑釉施土器片が出土した。(図版30-4)

鍛冶遺構 (図版31-1・2、第65図)

直径25cm、深さ5cmの小さな土坑を用いた炉跡で、北西側と南東側に竈羽口を据える溝が付設されている。土坑は柱穴状ピットで壊されているが、北東側壁は硬化してガチガチの壁となり、融解したガラス質物質もみられた。また小さな粒状の小鉄滓がピット内にかけて堆積していた。鉄滓についての化学的分析は未



第65図 1号堅穴製鉄遺構実測図 (1/20)



第66図 1・2・4号竪穴出土土器実測図 (1/3)

実施である。なお南側の長径1.4m、短径0.8m、深さ0.2mの土坑は竊土坑の可能性が高い。

出土土器 (第66図1・2)

1は土師器鉢の肥厚するI縁部破片である。胴部内面はへら割り調整とみられるが、器面が風化磨滅して不明。2は殆ど肥厚せずに外反する土師器甕のI縁部破片である。この他に鉄製品1点 (第80図17) と、柱穴状ビットから鋳型あるいは炉壁らしい焼土塊1点 (図版37) が出土した。

2号竪穴 (第68図)

調査区東端部斜面で削平された平坦面で発見された。長さ5.1m、幅2.5mの不整長方形の平面形をもつ竪穴で、長軸方向N50°Eを向き、深さは0.05m前後しか残らない。床面は平坦だが礫が露呈するような不安定な状態で、床面を掘り込む柱穴状ビットは2ヶ所しか確認されない。なお、竪穴の南東側に1.5～1.6m間隔の柱穴が並び、この軸線と竪穴の主軸方向はほぼ平行する。またこの柱穴列と重複するが先行するとみられる2号溝は、西南西から東北東方向に10.0mほど続き、南西側端でほぼ直角に曲がって西側に7.0m余り続くL字形区画溝となっている。

出土土器 (第66図3～6)

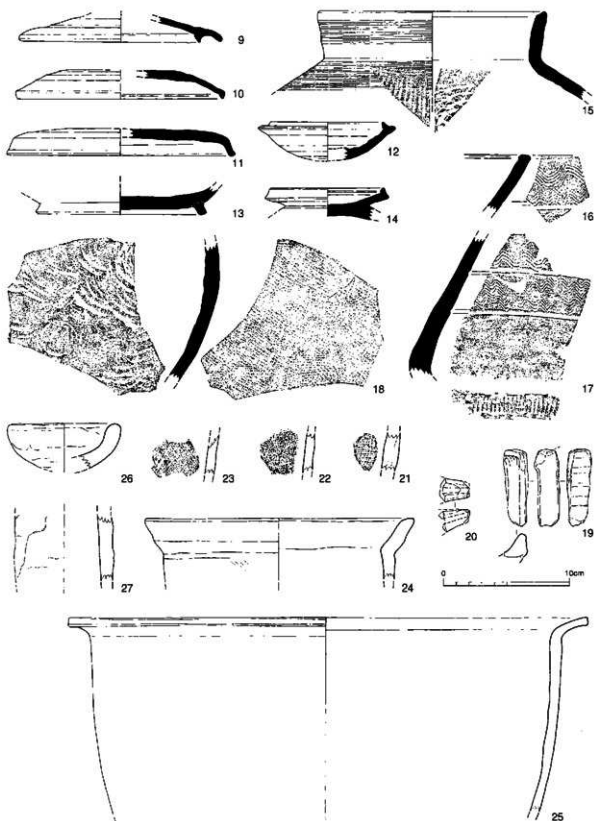
3は天井部に小さく扁平な宝珠形つまみをもつ須恵器杯蓋で、口縁部に鳥嘴状のかえりを有する類のものであろう。焼成は甘い。4～6は須恵器甕若しくは甕の口縁部破片である。いずれも外反して端部が僅かに屈曲し、焼成は硬い。この他に管状上錘 (第80図4・5) も出土した。

3号竪穴 (図版31・3・4、第64図)

調査区東南隅部で発見された遺構で、当初幾つかの上坑が重複する可能性があるかと判断して抜次にわたって掘り下げながら遺構検出の検討を続けたが、重複関係が把握できないまま床面に達した遺構である。西端部で2号土坑と重複してこれより先行する。2号建物とも重複するが前後関係は不明である。調査区域外に続くが、北西辺4.0m、北東辺5.9mで、床面は平坦。床面には直径0.4～0.5m、深さ0.3～0.4mの柱穴らしいビットが壁に沿って、約2.0mの距離をおいて位置し、北東辺に並行する柱穴状ビット間を溝状の土坑が寸断するように掘り込まれる。この土坑の方向はN60°Eを向き、2号竪穴を囲む2号溝の反対側延長線上に位置して、ほぼ主軸方向を同一にする。また竪穴の北東辺および北西辺の方向もこの軸方向とほぼ平行・直交する方向である。

出土土器 (図版32・4、第67図)

9～10は須恵器杯蓋で、ともに復原口径16.0cmの大きさ。9は身受けのかえりが内面側に隠れるもの、10は鳥嘴状のかえりを有する杯蓋である。11は復原口径18.0cmの大きさの、端部で「く」字形に屈曲して開く蓋を想定しているが、あるいは天地逆で盤かも知れない。ただ13の高台外径

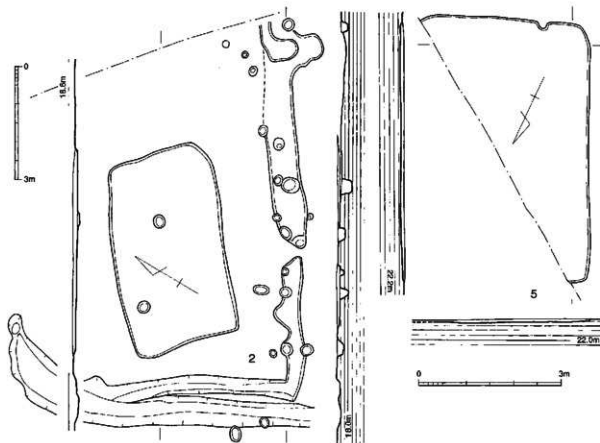


第67図 3号堅穴出土土器実測図 (1/3)

13.4cmを有する杯身底部と胎土・焼成ともに類似するためセット関係の可能性から、蓋を想定している。ともに粗めの砂粒を胎土に含み、器壁が厚めで須恵器としては焼成が甘い。12は復原口径

8.8cm、器高3.0cm、外径10.8cmの大きさの、蓋受けのかえりを有する杯身で、焼成は硬い。14は外天井に高台のような環状のつまみを付ける須恵器蓋の破片で、つまみは外側に低く開くが、蓋全体の形状は不明。天井部の器壁はやや厚め。外径9.8cmの脚棚部は「く」字形に下側へ屈折するように描かれて矢り、内面側に段をもつ。焼成は硬い。15は復原口径18.0cm大の須恵器直口壺の11頸部破片で、口縁端部内面に面を有し、肩部外面には平行叩き痕とカキ目がみられ、焼成は硬い。16・17は直線的に開く須恵器蓋の口頸部破片で、同一個体と思われるものの接合しない。焼成は硬く、口縁端部内面に段をもち、外面には平行沈線と沈線間を飾る波状文が巡る。なお、胴部との接合を強固にするための工夫とみられる、接合面に板小口の連続押斥痕もみられる。

19は土師器の剥落した庇状突起で、本来の形状は不明だが、直線的な面をもった上縁部に接合されていたと想像される。幅、厚さともに2.0cmほどで、長さ6.0cm分が残り、一方の端部を失うが端部でL字形に囲む突起がみられ、本体側との接合面には凹凸を設けている。砂粒を僅かに含む胎土で、暗茶褐色に焼成される。20は長さ2.0cmほどの注口部破片で、これも本体は不明。全体にナデ調整され、黒褐色に焼成される。21～23は筒形長胴の土師器製塩土器の破片で、内面に布目圧痕がみられ、外面はナデ調整されるようだが凹凸がみられる。24は長胴タイプと思われる土師器蓋の口縁部破片で、口縁部は肥厚気味ながら「く」字形に外反し、胴部外面にハケ目が残る。復原口径21.0cmの大きさで、橙褐色に焼成されている。25は口縁部が肥厚せずに如意状に外反する、土師器鉢もしくは蓋の上半部破片で、復原口径41.0cmを有する。胎土に赤褐色粒・角閃石・雲母を含み、茶褐色に焼成されるが、二次的な火熱を受けて赤変する。器面は風化磨滅して調整痕は分からない。26は復原口径9.0cm、器高3.5cm強の大きさの土師器取銅。内外面ともにナデ調整らしい、胎土に



第68図 2・5号壱穴実測図 (1/80・1/100)

砂粒・角四石・褐色粒を含み、淡明褐色に焼成されている。27は復原外径7.8cmの輪羽口とみられる破片である。砂粒を胎土に含み、淡茶褐色に焼成される。これらの土器は7世紀後半～8世紀前半頃に含まれるであろう。この他に管状土鏝1点（第80図3）も出土した。

4号堅穴（図版32-1、第64図）

丘陵の高所にあたる調査区西部で発見されたが、南西側は調査区域外に潜る。方形もしくは長方形プランとみられ、北東辺はN37°W方向を向き、長さ1.9m、深さ0.2mの規模で、北西辺は1.2m分が露呈する。幾分柔らかな茶褐色粘性土が堆積し、床面は硬い。

出土土器（第66図7・8）

7は短く外反する口縁部を有する青磁碗の口縁部破片である。灰白色の胎土でオリブ色の釉が掛かる。龍泉窯系の青磁碗であろう。8は灰白色の胎土で、薄緑色がかった灰白色の釉が掛かる白磁碗の胴部破片である。

5号堅穴（第68図）

丘陵の高所にあたる調査区北部で発見されたが、北東側は調査区域外に潜る。方形もしくは長方形プランとみられ、西側辺はN25°W方向を向き、長さ5.5m、深さ0.05mの規模で、南側辺は3.5m分が露呈する。茶褐色土が堆積し、若干炭化物なども含まれるものの、土器類の出土はみられなかった。床面はやや硬めだが、踏み固めたような状態ではない。

6号堅穴（図版32-2、第64図）

丘陵の高所にあたる調査区北部で発見されたが、北東側は調査区域外に潜る。方形もしくは長方形プランとみられ、西側辺はN25°W方向を向き、長さ5.5m、深さ0.05mの規模で、南側辺は3.5m分が露呈する。茶褐色土が堆積し、若干炭化物なども含まれるものの、土器類の出土はみられなかった。床面はやや硬めだが、踏み固めたような状態ではない。

7号堅穴（図版32-3、第64図）

調査区最高所で発見されたが、北東側は調査区域外に潜る。方形もしくは長方形プランとみられ、南側辺はN95°W方向を向き、長さ3.1m、深さ0.1m弱で、西側辺は2.7m分が露呈する。床面はやや硬めだが、踏み固めたような状態ではない。淡めの茶褐色土が堆積するものの、土器類の出土はみられなかった。直径0.2～0.3m、深さ0.1～0.2mの柱穴状ビットが床面の南寄りに3ヶ所掘り込まれ、南西隅のビットからは土器器小片が出土したものの図示に耐えない。

8号堅穴（第64図）

調査区最高所で発見された堅穴で、7号堅穴の南西側に近接する。台径に近い不整形プランで、西側辺はN9°E方向を向く。南北長3.5m、東西幅3.0m、深さ0.1m弱で、東側辺は3.1mと短い。床面は締まりが弱く、直径0.1～0.3mの不揃いな柱穴状ビットが床面に点在する。堅穴内には淡めの茶褐色土が堆積するものの、土器類の出土はみられず、僅かに柱穴状ビットから土器器小片が出土したものの図示に耐えない。

4) 土墳墓

1号土墳墓 (図版33-1・2、第69図)

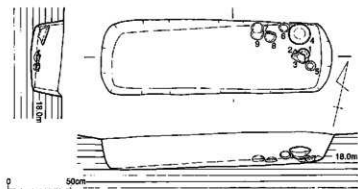
調査区南東部で発見された。上部は削平されて不明だが、検出面では長さ183cm、幅55~60cmで、西側の幅が僅かに広い隅丸長方形を呈し、主軸方向N77° 30' E方向を向く。素掘りの土墳は深さ25cm前後に残り、床面は平坦で東側が僅かに高い。検出面では西側が幅広ながら

も、床面の幅は東側が52cm、西側が45cmと東側が広めで、わずかに高いことから頭位は東とみられる。墳内の北東側壁に沿って完形の白磁碗1点、土師器小皿4点と、この南東側で完形の土師器ミニチュア羽釜1点、白磁皿1点、白磁碗片2点がまとまって出土した (図版33-3)。この他には赤色顔料や人骨などの痕跡、棺材や蓋材などの痕跡は確認できなかった。

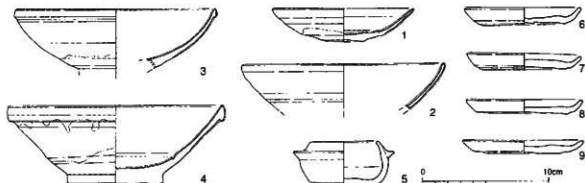
出土遺物 (図版33-4、第70図)

白磁皿 (1) 口縁端部を一部欠損するがほぼ完形で、口径11.0cm、器高2.6cm、底径3.4cmの大きさ。口縁部は直線的に開き、器壁は薄い。内底見込みに段が巡る特徴がある。灰白色の精良な胎土で、幾分黄褐色を帯びた白色釉がかかるものの外底部は露胎である。細かな貫入がみられ、内面には磨減痕がみられる。

白磁碗 (2~4) 2は復原口径16.0cmの1/8ほどの大きさの口縁部破片である。薄めの器壁で内彎気味に開く器形である。胎土・釉ともに淡い黄白色を呈する。3は復原口径15.8cmの1/4ほどの大きさの口縁部から底部付近まで残る破片で、残存器高4.8cm、底径は5.8cm前後であろう。口縁部は内彎気味に開き、口縁端部は低い玉縁をなす。胎土・釉ともに黄色味がかった白色を呈するが、外底部は露胎。内面はやや磨減する。4は口径17.0cm、器高6.8cm、底径7.8cmの大きさ。器壁はやや厚めで、内底見込みに段が巡る。底部は厚く高台の削り出しは浅い。幾分黄色味がかった白色の精良な胎土で、淡緑灰色がかった白色の釉がかかるものの外底部は露胎である。内外面ともに磨減痕はみられない。



第69図 1号土墳墓実測図 (1/30)



第70図 1号土墳墓出土土器実測図 (1/3)

土師器羽釜(5) 口径5.4cm、器高3.5cm、底径5.4cm、羽部外径7.9cmの大きさのミニチュア品である。平底の底部から体部が膨らみ、そのまま内彎気味の11縁部に続き、口縁部下の外面に鋤状の羽が付く器形。羽までの外底部に煤が付着する。赤褐色粒・細砂粒を若干含むが精良な胎土で、淡灰黄褐色に焼成される。

土師器小皿(6～9) 口径9.0～9.5cm、器高1.1～1.3cm、底径6.0～7.0cmの大きさと、口縁部は短く丸みをもって開く。外底面はヘラ切りで、6・7には板目圧痕が付着する。

これらの土器類は大宰府編年を参考にすれば、11世紀末～12世紀第2四半期に該当する。白磁碗では3が4よりも先行する時期のもので、1の皿も3と同時期らしい。1および3の器面が磨減するのに対して、4では使用の痕跡がみられず、4が埋葬時の供献用に新調された可能性を考慮すれば埋葬時期は12世紀第2四半期が想定される。糸切り底の土師器小皿の出現期が豊前地方で大宰府よりも先行するとみられているが、ここでは糸切り底がみられないので出現期直前期に考えるべきであろう。また、土師器羽釜は畿内系の特徴を有したミニチュア品であるが、土師器羽釜が普遍的に確認できない地域にあって、実用品でなくとも外底面に煤を付着させた羽釜の存在は、埋葬時に畿内的な祭祀行為が行われた可能性が高く、被葬者および埋葬を執務した集団と畿内との間に密接な関係を窺わせる。

5) 土 坑

1号土坑(第64図)

3号住居跡埋没土を掘り込んだ土坑で、1号堅穴の南側に位置するが、堅穴の南南端が明確でないため前後関係は不明。西側は調査区域外に潜る。長さ1.2m、幅0.8m以上、深さ0.3mの規模の楕円形の土坑であろう。

出土土器(巻頭図版2、図版36、第72図1・2)

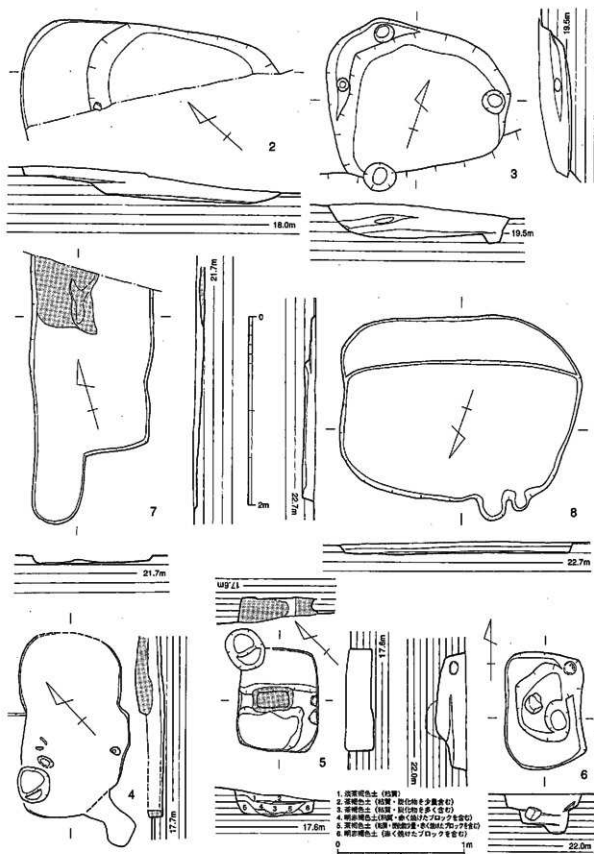
1は土坑北縁部に相当する部分から出土した緑釉陶器水注しとみられる肩部破片である。長さ9.0cm、幅8.0cmほどの大きさの破片で全体の形状までは分らないが、把手部分の下端部が貼り付けられおり、破片の形状からみて、頸部側径が15.0cm、胴部側径が9.0cmほどの大きさになるものと判断される。図では耳壺のような表現になっているが、水注しとすれば把手は一つ所のみであろう。器壁は0.8cm弱である。把手は1.0cm角よりも横かに細い3本の棒状の粘土紐を並べて束ねたもので、体部側にヘラ先の刻み目を施して接合した部分は幅3.0cm、厚さ0.5cmの扁平な形状である。精良な胎土が用いられ、褐色に焼成されている。釉は外面に明るい緑色で濃淡のある緑釉が掛けられていて、白釉緑彩というほうが妥当かも知れない。

2は坑内下層から出土した、復原口径11.6cm、器高3.3cm、脚部径6.3cmの大きさの土師器高台付き小皿である。胎土に細砂粒・赤褐色粒を含み、橙褐色に焼成される。

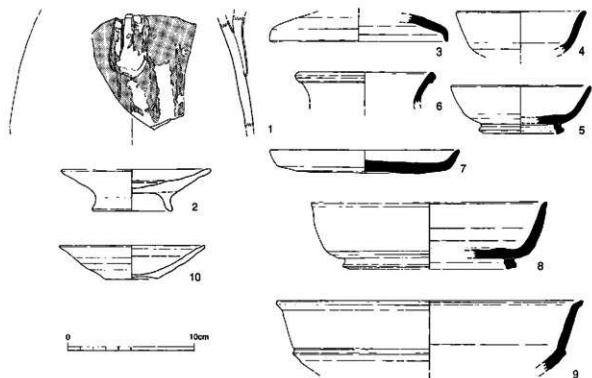
1・2の上器は相伴とは言え難く、坑内から他に土師器小片が出土したものの図示しえない。

2号土坑(図版343、第71図)

調査区南端部で発見された土坑で、南西側は調査区域外に潜り、東南側で重複する3号堅穴より後出する。長さ2.7mの楕円形プランとみられ、北西側に一段高いテラスを有する。坑内から須恵器壺小片、土師器小片などが出土したものの、図示しえる資料はない。



第71図 2～8号土坑実測図 (1/30・1/40)



第72図 土坑出土土器実測図 (1/3)

3号土坑 (図版344、第71図)

4号住居跡の南側に位置する土坑で、上部を削平されるため明確ではないが、4号住居跡より後出するとみられる。直径19m前後の不整形円形プランで、深さ0.3m強に残るが、南側は崖で閉られている。坑内にはやや淡い暗茶褐色土が堆積し、床面は幾分か硬めに締まるが、床面や壁面を掘り込む柱状ビットは上坑よりも後出する。

出土土器 (第72図3-9)

3は「く」字形に屈曲する口縁部を有する須恵器杯蓋で、天井部は不明。4・5は高台をもつ須恵器杯身で、4では高台を失うが口縁部が僅かに外反気味に開く。5は復原口径11.0cm、器高3.8cm、高台外径6.6cmの大きさで、高台は外側に跳ね気味に開く。硬い焼成で自然釉が掛かる。7は復原口径14.9cm、器高1.9cm、底径13.3cmの大きさの須恵器盤で焼成は軟質。8は復原口径18.4cm、器高5.3cm、高台外径13.6cmの大きさの底部から口縁部が直線的に立ち上がる須恵器杯身である。高台は外側に跳ねたように開く。9は復原口径24.0cm、残存器高5.7cmの大きさの一旦短く括れて、開く口縁部が端部で短く外反する器形の口縁部破片で須恵器高杯の杯部であろう。

4号土坑 (図版35-1、第71図)

調査区東端部で発見された長径1.4m、短径0.7mの楕円形プランの土坑で、高さ0.2mの周壁が火熱を受けて赤変硬化している。坑内には炭化物を含む茶褐色土が堆積していたものの、土器類の出土はみられなかった。

5号土坑 (図版35-2・3、第71図)

4号土坑の南側に近接して発見された長さ0.8m、幅0.6mの長方形プランの土坑で、高さ0.2mの

周壁や床面が火熱を受けて赤変硬化している。坑内には炭化物を含む茶褐色土が堆積していたものの、土器類の出土はみられなかった。

6号土坑（図版35-5、第71図）

最高所の調査区で発見された小土坑で、南北0.9m、東西0.6m、深さ0.25mの不整長方形プランで、土坑底中央にビット状の掘り込みを伴う。坑内には炭化物を若干含む茶褐色土が堆積し、中央の床面より少し浮いた位置に人頭大より少し小さな安山岩塊石と、土坑北東隅の壁に接して土師器杯が傾いた状態で出土した。

出土土器（図版36、第72図10）

口径11.4cm、器高2.7cm、底径4.2cmの大きさの、糸切りの底部から直線的に口縁部が開く土師器杯で、口縁部の器壁は薄めである。胎土に角閃石、赤褐色粒、細砂粒を含み、褐色に焼成されるが、内面全体に黒色を呈する炭化物の付着がみられる。なお、炭化物の化学的分析は未実施である。

7号土坑（図版35-5、第71図）

6号土坑の東側に近接する長さ2.8m以上、幅1.3m、深さ0.1mの不整形土坑で、北側は調査区域外に湛る。調査区端の床面に、火熱を受けて赤化した粘土塊が集中して発見されたが、土器類の出土はみられなかった。

8号土坑（図版35-5、第71図）

7号土坑の南側に近接して発見された長径2.5m、短径2.0m、深さ0.1m強の不整円形土坑で、平坦な床面を有するが、南側に一段高いテラスが付く。坑内には淡めの茶褐色土が堆積していたが、土器類の出土はみられなかった。

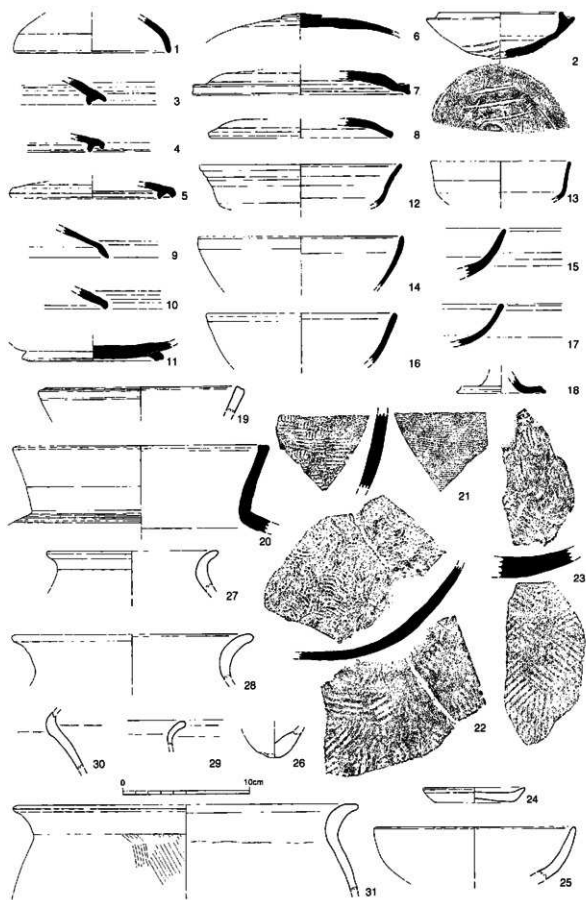
6) その他の遺構と遺物

1号溝 3号・4号住居跡を申刺しするように切り込む溝で、N59°E方向を向き、南西側の調査区端から9.0mほど北東側に進んで東南側に曲がる。この地点から更に約3.0m伸びる支流も北東側に曲がる。検出面では幅0.7～1.1m、深さ0.3～0.4mの逆台形断面に掘り込まれているが、3号・4号建物跡の柱穴よりも後出する。

出土土器（第73図1～5）

1は身受けのかえりが口縁部内側に付く須恵器杯蓋で、復原口径15.0cmの大きさ。2は鳥嘴状の口縁端部をもつ須恵器杯蓋で復原口径17.0cmの大きさ。3は復原口径9.2cm、外径11.0cm、器高2.6cmの蓋受けのかえりをもつ須恵器杯身である。4は高台外径7.2cmの須恵器小形壺か杯の底部破片で、外底部に布目圧痕がみられる。5は復原口径25.4cmの端部が内縁気味の須恵器壺口縁部破片だが、焼成は甘い。これらの土器は4号住居跡や3号建物跡などから招来した可能性が高い。

2号溝 2号竪穴を囲む溝で、東南辺はN59°30'E方向を向き、南辺はほぼ直角方向に曲がる。幅0.5～0.8m、深さ0.1m弱で、南西辺は溝が掘り直されて2条になるが、新しい方の溝は、更に南西側にある6号溝とともに、1号土壌墓を囲る。



第73図 ビット出土土器実測図1 (1/3)

出土土器（第73図6）

外面が平行叩き痕とカキ目、内面に同心円当て具痕が残る須恵器蓋の胴部破片である。

3号溝 2号溝の南東側にあって、2号溝の南西辺に平行する溝で、長さ3.2m分を確認したが、深さ0.1mもない浅い溝で延長は不明。土師器小片が出土したのみである。

4号溝 4号住居跡の北側に発見された溝で、1号堅穴の東側から緩やかに弧を描きながら東に伸びて、5号溝に接したあたりで北側に曲がるが、5号溝より後出する溝である。この溝によって隅丸形状に囲まれた部分には柱穴状ビットが多数点在するものの、比較的ビットの規模は小さく、建物跡を確認するにいたっていない。溝は上幅が0.6～0.8m、深さ0.2m内外で、逆台形に掘り込まれている。

出土土器（第73図7～9）

7は復原口径21.0cm大の「く」字形に屈曲する口縁部をもつ須恵器蓋で、焼成は甘い。8は外面に平行叩き痕とカキ目、内面に同心円当て具痕が残る須恵器蓋胴部破片。9は傾かに開いて立ち上がり、端部上面を平坦にする土師器蓋とみられる口縁部破片である。胎土に砂粒などを多く含む弥生土器的な印象もある。

5号溝 4号溝の東側に隣接して発見された溝で、4号住居跡から北北西に約6m分が伸び、4号住居跡より後出するとみられるものの、住居跡内の堆積上では確認できなかった。主軸方向はN30°E方向を向き、幅0.6～0.8m、深さ0.2m強の断面逆台形に掘り込まれた溝である。

6号溝 1・4・5号溝ともにこの溝に流れ込むように南北方向に貫通する溝で、幅2.0m、深さ0.3mほどの規模をもつ。最近までの水田区画に沿っているので、近現代に機能した溝とみられるが、何度も流路を変更した模様で、5号溝と重なる位置にある蛇行部分は時期的に先行するようである。

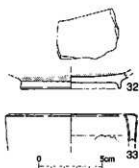
ビット出土土器（第74・75図）

1～17は須恵器の杯蓋、杯身の類である。1は7とともにp159から出土した杯蓋で、1は口縁部が内彎する杯蓋で復原口径12.4cmの大きさ、7は鳥嘴状の口縁部を有する杯蓋で復原口径17.0cmの大きさ。p137出土の犬井部破片には扁平な宝珠形つまみが付き7のような杯蓋に伴うものであろう。P54・p123・p146出土の3～5は身受けのかえりを有する杯蓋、p82・p51出土の8・10は鳥嘴状の端部が退化した形式の杯蓋で、p129出土の9は「く」字形に屈曲する口縁部を有する杯蓋である。

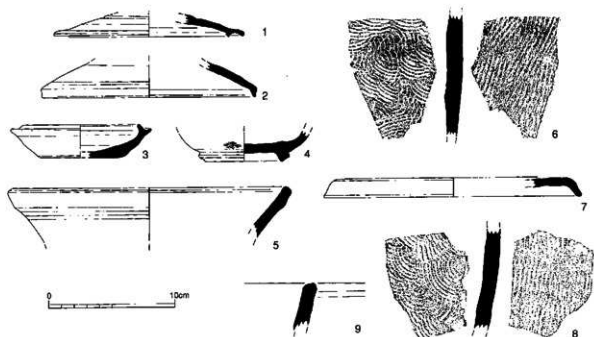
2はp80出土の蓋受けのかえりを有する杯身で、復原口径9.8cm、外径11.6cm、器高3.6cmの大きさで、外底部に3条の短沈線が平行するヘラ記号が付されている。

11は5号建物隅部のp138出土の底部で、外側に踏ん張る形状の高台が付く。

12はp63出土の口縁部が外反する杯身で復原口径16.0cmの大きさ。P79出土の13は直線的に立ち上がる復原口径11.0cmの大きさの杯身。P143・p51・p36出土の14～16は内彎気味に開く杯身で、



第74図 ビット出土土器実測図2 (1/3)



第75図 清出土土器実測図 (1/3)

p117出土の17は瓦器碗に近い形状の杯である。

18は鳥嘴状の裾部を有する須恵器高杯脚裾部破片で、11号・12号建物跡の間に位置するp102から出土した。

19～23は須恵器甕の破片で、p53・p137出土の19・20は直線的に立ち上がる口縁部、p56出土の21は外面にカキ目と内面に平行板目痕が残る胴部破片、p174とp75出土の22・23は底部破片で外面に平行叩き痕と内面に同心円当て具痕が残る。

24はp173出土の復原口径8.0cm、器高1.2cmの土師器小皿である。25はp171出土の復原口径15.8cm大の土師器碗、26はp1出土の小形丸底の土師器片、27はp52、28・29はp1、31はp48から出土した土師器甕の外反する口縁部破片、31は復原口径27.0cmの大きさの口縁部が肥厚気味に外反する甕で、胴部外面はハケ目調整されている。30はp20出土の土師器甕の肩部破片で、器面は風化磨滅するが内面はヘラ削りであろう。

32は2号溝の南側にあるp54出土の復原高台径7.9cmの細い高台が付く底部破片、精良な胎土で軟らかめの焼成の土師器に明るい緑色の緑釉が施軸されている。33は8号建物と9号建物が重複する位置にあるp127出土の復原口径10.4cmの青磁香がらしい口縁部破片で、灰白色の胎土で、青味を帯びたうす緑色の釉が厚めに掛かる。龍泉窯系青磁であろう。

高圧線柱穴 (第76図)

調査区高所の12号建物跡の南側で発見された。羽子板形平面の柱穴が平行していて、2穴が対になって円形の高圧線送電線の柱を立てたものらしい。北東側の柱穴は幅1.6m、長さ2.4m、南西側の柱穴は幅1.6m、長さ2.7mで、上部のみを0.3～0.4m掘り下げたが、松とみられる木材が3本直立していて、上部は鋸で切られているが、揺すっても微動もしない。羽子板の柄になる側は深さが浅くなるようだが、柱が立つほうは深い。ともに3本の柱のうち北西側に位置する太めの柱材は硬い感じで、寸断面は最近切ったかのようなシャープさを留めているが、2本並ぶ方の木材は上面が風

化して樹皮がささくれて裂けるなどの違いがある。2 穴の配置では、硬い方の主柱とみられる柱の芯心距離は3.3mを測り、N35° E方向を向く。

一方、北東側の柱から更に東北東側約4.0mの位置に、長さ2.0m弱、幅0.5mの長方形の土坑が柱穴列に直交する方向に長軸を向け、北東側の壁には小さな浅い突起が刻まれている。坑内には中央を太い鉄針金で縛られた松とみられる木材が横たわり、針金は上側に伸びているが途中で寸断されている。送電線電柱の控えのアンカーとみられるが、突起の方向が電柱側を向かない。

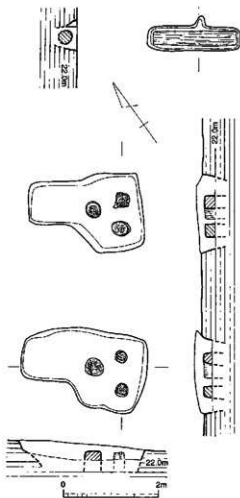
遺物包含層

調査区東南部に比較的厚めの遺物包含層が発見された。主に暗茶褐色土の堆積土であり、その上層に淡茶褐色と黄褐色が混じったような粘土質の層が堆積している盛土による平坦面拡大の整地がなされたようだが、盛土の時期は明確でない。また、追加補足調査した谷部調査区では深く削平されていて、1号建物跡の南東側柱穴を確認できず、N51° E方向を向く竪穴状遺構の北西辺を長さ4.2m分検出したが、大半が削平されて残らず、柱穴状ピットも明確ではない。ここでは再堆積土内に土師器片、須恵器片、青磁片などが発見されたものの図示はしていない。また丘陵最高所に相当する西北端調査区でも削平は進んでいたが、不整形な土坑や柱穴状ピットが点在する。ただし遺物出土の絶対量は極めて少ない状況である。

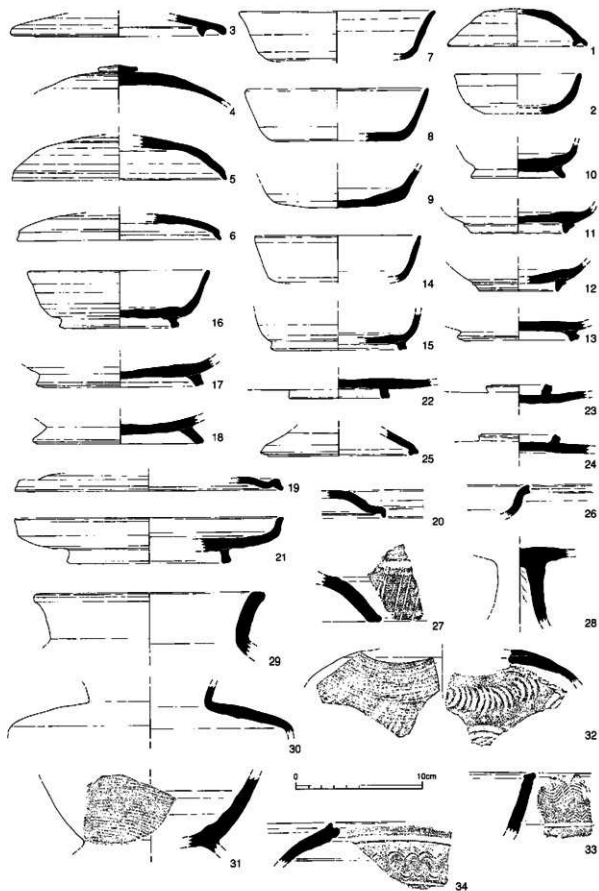
包含層出土土器（図版36、第77・78図）

須恵器（1～38） 1・2は須恵器のつくりで土師器の焼成になる身受けのかえりを有する杯蓋と杯身で、1は復原外径11.0cm、器高3.0cmの大きさ。3・4は天井部に扁平な宝珠形つまみが付き、口縁部内面に身受けのかえりを有する杯蓋、5・6は11縁端部が僅かに屈曲する杯蓋で、復原口径16.8cmと16.0cmの大きさのもの。7～9は底部が平底の杯身で、7の口縁部は外反して開き、9はやや丸底で焼成もやや甘い。10は高台を有する小形の杯、11・12は端部が尖る高台の付く底部破片である。13～17は高台を有する杯身で13・16・17は高台が外側に開くものの15は断面四角形の高台が杯底端部に付き、復原口径14.4cmの16の口縁部は僅かに外反気味である。18は高台が長めに開く底部破片で、杯身よりも体部が深い器形かも知れない。

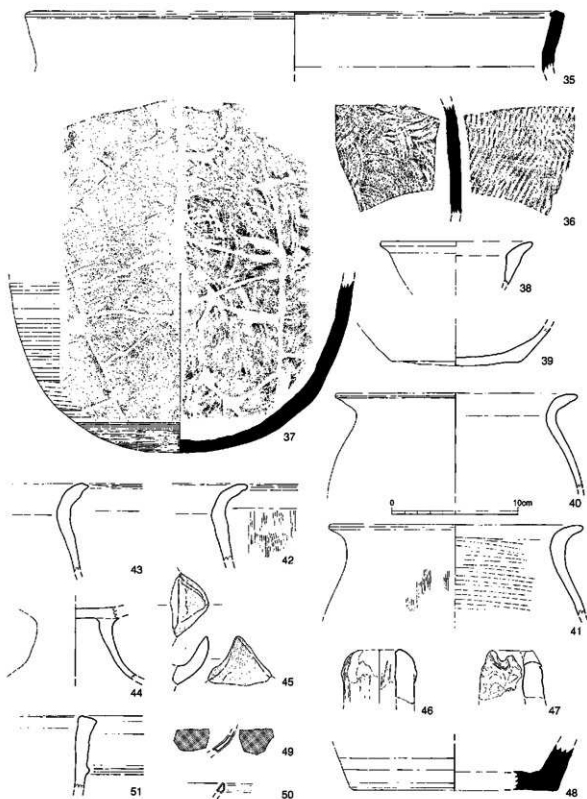
19・20は鳥嘴状の端部を有する口縁部破片で、盤の蓋であろう。21は復原口径21.0cm、器高3.6cm、高台径12.8cmの盤でやや軟らかく焼成されている。22は高台径7.9cmの断面四角形の環高台が付く底部破片で、体部を失うため全体の器形は不明だが、盤よりも平らな底部である。蓋も考慮するべきだが、断面が四角形であるため底部としている。23・24は22に類似する破片で、平坦な体部に径が小さく、断面が外開きの環高台状のつまみが付くもので、23では体部が中くほみで、外面



第76図 高圧線柱穴実測図（1/80）



第77图 包含层出土器实测图 1 (1/3)



第78図 包含層出土土器実測図 2 (1/3)

に自然軸が付着することから蓋を考えている。なお23は堅い焼成だが、24は焼成がamai。

25は小形の脚台部破片で、端部内面に小さな段をもつ。26は小形の外反する口縁部破片。27は内
 髭気味に開く裾部破片で、外面に細い線刻文様がある。高杯の脚台部であろうか。28は高杯の柱状

部破片である。

29～31は壺で、29は復原口径18.0cmの大きさとで端部に丸みをもつ口縁部、30の肩部破片は内外面ともナデ調整される。31は高台もしくは脚台付きの壺底部破片で、外面はカキ目調整される。

32は外面にカキ目、内面に同心円当て具痕がみられ、平瓶の壺が外れた部分であろう。

33・34は外面に波状文が描かれる口縁部破片で、壺の口縁部であろう。また35は内外面ともに回転ナデ調整されて直に立ち上がる壺の口縁部破片で、復原口径42.2cmの大きさ。やや焼成はあまい。

36は外面に平行叩き目、内面に同心円当て具痕のある壺胴部破片。37は丸底の底部で、外面に粗いカキ目、内面に同心円当て具痕がみられるが、焼成はあまい。

土師器 (38～44) 38は小形鉢の口縁部破片で復原口径12.0cmの大きさ。39は僅かに凸レンズ状に外底面が膨らむ底部破片。40～43は外反する口縁部を有する壺で、器面が風化磨滅するものの、41の胴部外面に細かなハケ目、内面に粗いハケ目らしい痕跡、42の胴部外面にハケ目が残る。44は高杯の太い柱状部破片である。

赤彩把手 (45) 上側に摘み上げられたような三角形の把手部分で、外面全体に赤褐色の赤色顔料が塗布されている。壺形土器に付く把手であろう。

罐羽口 (46・47) とともに炉内部に挿入された側の端部破片で、ガラス状の融解物が付着し筒状部も赤変している。47では端部の融解物部分に直径0.7cm程の溝がみられる。

須恵器質土器 (48) 双耳壺の底部とみられる破片で、復原底径15.8cmの大きさ。体部外面はヘラ削り調整されている。

緑釉土器 (49) 精良なつくりの須恵器碗もしくは杯の胴部破片で、内外面ともにうす緑の釉が施されている。

白磁 (50) 小さな玉縁をもつ碗の口縁部破片である。

瓦質土器 (51) 肥厚して直に立ち上がる口縁部の上面が平坦に整えられ、口縁下の外面に縦状の突帯が巡る口縁部破片で、内面には僅かにハケ目の痕跡がみられる。14世紀頃の火倉であろう。



第79図 石器実測図 (2/3)

石器 (図版37、第79図)

旧石器 (1) 1号堅穴から出土したホルンフェルス製の不定形剥片を利用した、エッジを押し付ける機能をもった石器である。ナイフ形石器の一種であろうか。剥片の先端側に一部原面を残すが、先端の尖った部分は彫器のような使い方も可能である。長さ39cm、幅29cm、厚さ13cmの大きさ。

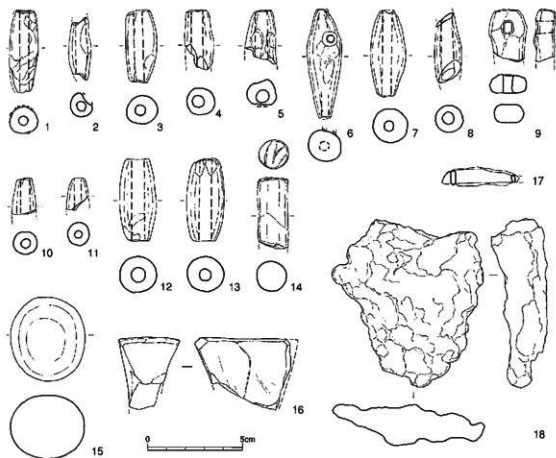
剥片鏃 (2) 1号土坑から出土した、安山岩の不定形剥片の打痕部のみを調整加工して深いわたぐりを設けた鏃である。長さ3.1cm、幅2.4cm、厚さ0.45cm、重量2.3gを測る。

土製品 (図版37、第80図)

管状土鏢 (1～8・10～13) 1・2は1号住居跡から出土した。1は長さ4.5cm、直径1.5cm、2は端部を欠損するが長さ3.3cm、直径1.3cmの大きさ。ともに精良な胎土ながら、焼成が堅緻でないためか、風化が進み、器面が剥落する。3は3号堅穴から出土した、長さ3.8cm、直径1.5cmの比較的ずんぐりした形状の管状土鏢で、膨らみは一方に偏る。4・5は2号堅穴から出土した、ともに半欠資料で中彫らみの形とみられるもの。

6は1号溝出土の管状土鍾で、最大径1.8cmの位置が一方に偏って両端が窄まり、長さが5.7cmを有する。胎土は精良で、二次的な高温の火熱を受けて須恵器のような色調を帯び、別個体の管状土鍾の端部が融着している。

7・8はp58・p93出土の管状土鍾である。ともに中ほどが膨らむ形のものだが、7は端部との間



第80図 土製品・石製品・鉄製品実測図 (1/2)

が括れ気味に整形される。

10～13は包含層出土の管状土鍾で、10・11は破片資料、12・13は中ほどが膨らむ形だが全体にずんぐりとした形状のもの。

棒状土鍾 (9) p103出土の破片資料で、一方の端部のみが残る。扁平な丸棒状の体部で、更に扁平な形状に拡張された端部に凹孔が穿たれている。瀬戸内地方にみられるタイプの土鍾である。

不明土製品 (14) 包含層出土資料で、一方の端部を欠くため全体の形状は不明。残存する部分は、直径1.6cmの丸棒状体部で、端面は平坦に整えられている。精良な胎土で、淡茶褐色に焼成されている。

石製品 (図版37、第80図)

投弾? (15) 遺構検出面で発見された、長径4.0cm、短径4.5cm、厚さ3.3cmの大きさの安山岩円礫で、全体に磨耗している。

砥石 (16) 調査区東南隅の包含層から出土した、乳白色を呈する凝灰岩製の仕上げ砥石の端部破片である。残存長3.7cm、幅5.1cm、厚さ3.2cmの大きさ。

鉄製品（図版37、第80図17・18）

17は1号堅穴の北東側周溝部から出土した用途不明の鉄製品である。長さ4.0cm、幅0.7cm、厚さ0.2～0.3cmの破片。18は4号・5号建物に近いp142から出土した、長さ8.5cm、幅8.0cm、厚さ2.0cmの大ききの鉄流動滓である。



第81図 石帯実測図（1/2）

石帯（図版37、第81図）

丸鞘 調査区中央部の遺構検出時に出土したが、帰属する遺構は不明。灰白色の結晶片岩製とみられるが、軽めで石英質が目立つので、あるいはガラスかも知れないが科学的分析は未実施である。直径2.8cm、厚さ0.6cmの円板の一部を切り取って幅2.5cm、平坦な辺の長さ1.7cmの大きさに整えた、丸鞘としては小形品である。裏面には3ヶ所のV字形のかがり孔を彫り込まれている。一方表面には浅い刻みの線刻がみられる。一部残存する黒漆とみられる黒色顔料塗布の際に定着を容易にする目的であろう。なお顔料と地の間には極薄く黄褐色の面が確認される。

7) 小 結

越路貫船遺跡は、7世紀後半頃～8世紀の堅穴住居跡4軒と、堅穴住居と共存したとみられ、更に中世にまでのものを含んだ12棟の建物跡を代表とする、古墳時代後期～11世紀の集落跡である。

時期的に最も遡る資料は、1点のみだがホルンフェルス製の旧石器がある。褐色または黄褐色ないし波茶褐色の色調を呈する珪質岩のもので越路六郎遺跡にも類例がある。この石材の石器、剥片や塊石は椎田周辺で時々みることができる。例を挙げれば、行橋市鬼熊遺跡出土例や、稲重石並採集品、豊津町鶴先遺跡などの旧石器があり石材名は油質頁岩や珪質岩、琥珀タンパク石などと呼称してきたが、いずれもホルンフェルスとして包括されるものである。石材の異なる例としては椎田町原池、後谷池の黒曜石製細石刃および細石刃、未発表資料で越路北ヶ崎遺跡のガラス質安山岩製の旧石器がある。越路周辺の丘陵は行橋市新田原などの丘陵とともにAso4噴出の火山灰起源のロームが堆積する洪積台地であり、京築地域で発見された旧石器資料の殆どは洪積台地上で発見されている。今後更に旧石器資料増加が期待される。

縄文・弥生時代関係では打製石鏃がある。縄文時代後期中頃に盛行する剥片鏃で、安山岩製のものである。この遺跡では縄文時代の資料は他に発見されていないので、山崎遺跡などを営んだ縄文後期人の狩猟活動に起因する飛来品である可能性もある。

住居跡出土の土器類からみて、越路貫船遺跡では3号住居跡が最も遡る時期のもので7世紀後半、次いで隣接する4号住居跡の7世紀後半～末頃、2号住居跡の7世紀末～8世紀頃、1号住居跡の8世紀前半頃と、4軒の住居跡は僅かに時期が異なる。

住居跡では、3号住居跡のL字煙道付きカマドについて言及しておきたい。本例は7世紀後半頃の住居跡であるが、類例として5世紀初頭～前半期とされる新吉富村池ノ口遺跡の24・27・30号住居跡をはじめとして、椎田町宇留津川角遺跡で1例、5～6世紀頃らしい坂本下ノ森遺跡1例、6世紀とみられる吹其遺跡に3～4例、坂本正毛田遺跡1例、のほか行橋市渡築紫遺跡例、築城町上別府園田遺跡例、豊前市小石原泉遺跡10余例、永久遺跡1号住居跡、塔田琵琶田遺跡6例、新吉富村唐ノ本遺跡、町ノ上遺跡、コシノ木遺跡例などがある。L字煙道付きカマドは、大陸で魏晉時代に既にみられる暖房施設の影響を受けた可能性が高く、高句麗系の人々の移動、あるいは半島情勢

のなかで高句麗方面からの影響を受けた百濟・新羅・伽耶などからの人の移動を考える上で重要であろう。

掘立柱建物跡では、地鎮土坑を伴う7号建物跡だけが8世紀中頃の時期が明確であるが、他の建物跡については柱穴内出土土器よりも遡ることがないと判断せざるをえない。これによると、2号建物跡が8世紀前半以降、3・4号建物跡が8世紀以降、9号建物跡が8世紀前半以降、10・11号建物跡が7世紀末頃以降、12号建物跡が7世紀後半以降となる。

ところで京築地域で近年発見例が増加している古代官道については、岩丸川に面した越路二田遺跡で、現町道を挟む形に2条の溝が溝底の中心で7.0m弱の幅で長さ60m程に発見され、さらにこの溝より先行するほぼ東西方向の溝が発見されているので、官道付設より以前には南北あるいは東西方向を意識した区割り設定されていたことも考えられる。8世紀代に整備されたと思われる官道の痕跡は坂本正毛田遺跡や、豊津町菅見樋ノ口遺跡でも確認され、豊津町下原の航空自衛隊基地内の切り通しや、権田町上り松の切り通しや水田区画、道路などの区画線から求めて直線道路と解釈すれば、官道の推定線方向は概ねN57°Wを向く。この推定線から越路六郎遺跡は約500m、越路貫船遺跡は約550m離れた位置に該当する。

越路貫船遺跡で発見された建物跡は、いずれも官道推定線方向とは平行あるいは直交する方向でなく、8世紀前半以降とみられる建物では約40°の振れに集中するので、官道あるいは関連する条里区割りに規制されていない。官道推定線から南西側に約300m離れた築城町赤幡森ヶ坪遺跡では奈良時代～平安時代の建物跡が38棟発見されている。このうち平安時代とされる1号建物跡などは官道方向に直交する方向であるが、大半は異なった方向であり、むしろ越路貫船遺跡に集中する方向の方が多い。また約590m離れた築城町上別府沖代遺跡の1・2号建物跡は12世紀中頃～後半のもので、官道推定線方向に平行している。従って、官道から距離が離れた遺跡では、平安時代には条里区画の影響もあるかも知れないが、奈良時代においては建物方向設定での影響はなかったとみられる。

竪穴遺構では、1号竪穴が製鉄遺構を伴う遺構として注目される。周溝は丘陵上部からの水を避けるための施設とみられ、製鉄遺構の東側にある不整形円形土坑は竈座であったとみられる。製鉄炉は小規模なものだが、堅く焼き締められた焼上面をもち、粒状の鉄滓と砂が混じった土が詰まるなど、小鍛冶炉が行われたことが窺われる。さらに斜面下の包含層や付近のビッドから竈羽口片や流動滓、炉壁などが出土しているのもこれを傍証する資料であろう。出土土器では時期を明確にしたいが、近接する3号住居跡よりは後出すると思われる、竪穴内の柱穴列は4号建物と主軸方向と平行することから関連性があるかもしれない。4号建物の主軸は5～9号建物の主軸に対応していて、このうち9号建物の時期が8世紀前半以降であり、4号建物に近接する3号土坑が8世紀初頭頃とみられるので、8世紀初頭に近い前半期を考えておきたい。

3号竪穴では7世紀末～8世紀前半の土器類が出土している。この竪穴床面を掘り込んだ溝状の上坑は位置的にも近い2号溝の方向や、1号建物跡・3号建物跡の方向に平行あるいは直交している、関連があるのかも知れない。時間的には3号建物跡が8世紀以降であるので矛盾はない。

ところで、この遺跡出土の須恵器を概観してみると、須恵器の成形・調整の手法をとりながらも、土師器焼成にかかるような融合した土器群の存在がみられる。これは一般的に北部九州の土器生産において、須恵器工と土師器工の整理統合などを契機にした融合とみられるが、寺院建立に伴う瓦窯生産にも関連するのであろう。さらに、平安時代に入って須恵器の供養具は緑釉陶器や黒色

土器、瓦器などにとって替わるが、この遺跡では黒色土器や瓦器は発見されていない。

1号土坑出土の台付皿は9世紀後半～10世紀に相当するものであろうが、1号土坑の上縁と1号堅穴の堀目付近で出土した緑釉水注の破片は、地方の遺跡としては特異な部類に入る遺物であろう。台付皿と確実に伴っていないので時期的な検証は難しいが、9世紀～10世紀のものであろう。

京築地域での緑釉陶器の出土例は、越路六郎遺跡、築城町赤幡森ヶ坪遺跡、豊津町豊前国府、国分寺、幸木遺跡などで出土しており、いずれも9世紀後半の長門系緑釉陶器が主体で、一部畿内(近江など)系のものが含まれているようである。

また、帰属する遺構は分からないが石帯、製塩土器なども特殊な遺物である。石帯は鈿帯の一種で、鉾具、巡方、猪目、鉈尾などとともに皮製腰帯を飾る部品である。当初は銅製が多くみられたが、平安時代以降は石帯が中心になるらしい。衣服令によって官位に応じた材質や色調が規定されていて、白玉や銀製の鈿帯は高位の官人に着用が許され、下級には烏油腰帯や烏黒腰帯が許されていた。烏油などは黒色を呈するもので、黒漆塗布などで黒色になされていたものとみられる。

京築地域での石帯の出土例は、行橋市天正田矢萩遺跡で巡方1点、高来殿屋敷遺跡丸柄1点、豊津町豊前国府で巡方1点、築城町赤幡森ヶ坪遺跡で丸柄1点、豊前市久路上鐘ツキ田遺跡で巡方1点²¹³⁰が出土している。これらの遺跡は古代官道に近い位置にあり、他にも平安時代の特殊な遺物を出土させる遺跡であり、官人の居住などを考慮させる。

1号土墳墓では、一括出土の土器類がある。このうち完形白磁碗1点は内外面の磨減がみられないので埋葬時に極めて近い時期に入手されたものとみられ、上師器小皿も同時期と判断されるが、磨減痕のある白磁皿と白磁碗破片2は使用期間を考慮する必要がある。羽釜が畿内に流行したタイプのミニチュア品で、外底部に煤の付着がみられることから、埋葬祭祀行為として羽釜での炊飯という儀式が行われたことを窺わせるものであり、被葬者あるいは葬儀を執り行った人が畿内と関係が深い立場にあったものと考えられる。12世紀初頭頃の下級官人層を考えておきたい。

越路貫船遺跡では、生活関連遺構として7世紀後半～8世紀前半、9～10世紀の遺構・遺物がみられ、墓地関係で12世紀頃、さらに性格は不詳だが6号土坑に15世紀頃の上器を含むなど散発的に遺構が営まれていたようだが、8世紀前半以降の中断も注目し得る。このような現象は築城町安武深田遺跡でもみられるためであるが、当該地域に関連する記録での注目すべき事件としての、華策対策のために豊前国の民の南九州への200戸移動、天然痘の流行、藤原広嗣の乱などとの関連は今後の課題といえよう。

高圧線木製電柱の柱穴は、越路六郎遺跡と同様のものが2ヶ所発見された。柱間は3.3mで、81mの距離をおいている。また、築城町築城小迫遺跡でも1ヶ所発見されたが、対になる1穴は調査区域外に隠れていた。越路六郎の柱穴からの距離は167m、築城小迫遺跡の柱穴との距離は549mである。同様な例は豊前市今市遺跡A地点でも発見されているが、電柱遺構とされている柱穴は1.5m×0.7m程の広さの長方形土坑で、柱穴内では直径30～35cmの柱1本を横たわった丸太1本で押さえるように配置されている。対応する柱穴はなく1本のみである。

なお基底部まで完掘していないが、高圧線柱穴は、太く長丈の柱を立てるために斜めに傾斜した掘り方を伴う点では、弥生時代の厚葬墓地の大柱遺構あるいは立柱遺構などと呼ばれる大形柱穴と共通する。おそらくは2本の添柱の下部を支点にして、傾斜した部分から落とし込んだ柱材を起こして立てたものと推定される。羽子板状プランであることは異なる点であり、越路六郎遺跡例で確認されるように、掘り方の角を利用して固定材を斜めに噛ませることと、斜めの部分を最小限に

させる合理性によるのであろう。添柱や固定材は長期間堅固に維持される必要性から考慮されたのであろう。

註1 行橋市教育委員会『鬼頭遺跡』（『行橋市文化財調査報告書』第27集、1999）

2 小池史有『豊前地方の旧石器』（『豊前市史』七巻、豊前市、1991）

3 福岡県教育委員会『龜先遺跡』（『一般国道10号福岡市道開闢文化財調査報告書』第5集、1995）

4 栗城達紀『京橋地域の旧石器について』（『とよ』第7号、豊前国府・国分寺調査研究会、1981）

5 越路北々崎遺跡は国営河福パイロット事業に伴う椎田町教育委員会による調査で、旧石器が1点出土した。調査を担当した京橋教育事務所の豊田二氏の御教示による。

6 福岡県教育委員会『池ノ口遺跡』（『一般国道10号豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告書』第3集、1996）

7 国営河福パイロット事業に伴って椎田町教育委員会が発掘調査。椎田町教育委員会の山本健太郎氏の御教示による。

8 国営河福パイロット事業に伴って椎田町教育委員会が発掘調査を実施した。遺構密度が高いことから対象地の大半が盛土保存された。L字溝道とみられる遺構を伴うのは60×75m程度の長方形プランの住居跡で、帯状粘土部分は東側道に沿って30m連続していたが、保存区域のため、遺構内の掘り下げは実施されていない。

9 行橋市教育委員会『流藤築造跡』（『行橋市文化財調査報告書』第23集、1994）

10 福岡県教育委員会『上別府沖代遺跡・上別府園田遺跡』（『福岡県文化財調査報告書』第152集、2000）

11 豊前市教育委員会が工業団地造成に先立ち発掘調査。豊前市教育委員会の栗城達紀・椎田昭仁氏の御教示による。

12 豊前市教育委員会『青垣向原遺跡・永久遺跡』（『豊前市文化財調査報告書』第12集、1999）

13 豊前市教育委員会が園地整備事業に伴って発掘調査。平成12年3月の現地説明会資料による。

14 新古宮村教育委員会が園地整備事業に伴って発掘調査。新古宮村教育委員会の矢野和昭氏の御教示による。

15 黒川江省文物考古研究所『黒川江省友誼風林城址二房址発掘報告』（『考古』2000年第11期）によると、ハナノホに近いウスリ江支流の七重川に近い風林城址で発見された例は、4.0×4.5mの方形プラン住居跡の東南部に燃焼痕をもち、東・北辺の大半に続くL字溝道があり、溝道の上部は21個の小楕円い石を並べて覆われる。竈の時期に相当するらしいが、このような住居跡はロシア海沿地区のクラウノフカ文化の遺跡で発見され、渤海時期以降になると大量出現するが、単線道のものは基本的に消失して双線道あるいは三線道になるという。

16 行橋市教育委員会が園地整備事業に伴って平成9年度に発掘調査。行橋市教育委員会の小川秀樹氏の御教示による。

17 行橋市教育委員会が園地整備事業に伴って平成9～10年度に発掘調査。行橋市教育委員会の中屋博氏の御教示による。

18 豊津町教育委員会の末永泰義氏の御教示による。

19 福岡県教育委員会『蒲ノ神遺跡・南嶺ヶ坪遺跡・十双遺跡』（『豊田バイパス関係埋蔵文化財調査報告書』（8）、1992、福岡県教育委員会）

20 豊前市教育委員会が園地整備事業に伴って平成12年度に発掘調査。豊前市教育委員会の椎田昭仁氏の御教示による。

21 豊前市教育委員会『今市向野遺跡A・B地点』（『豊前市文化財調査報告書』第10集、1998）

支線遺構とされるアンカーはこれと平行に85m、45°方向に11.0mほどの位置に掘り込まれ、電柱遺構は約195m離れて同様の例があり、支線遺構では61m離れた途中に1ヶ所みられることから、中間の調査区域外にあると1ヶ所を想定すれば60余m間隔に立てられていたことになり、電柱の建て替えが昭和43年に行われて木製電柱の地中部分を残して切断されたという。報告書では送電線の電柱模式図として、10m間隔の柱が呼みあうように立てられて、12mほどの高さに横木を渡して横木の中央と両端の3ヶ所に電線が架けられていたらしい。また10mほど離れた位置のアンカーから柱の上部にワイヤーが繋がれて支えられていたらしい。

圖 版



越路地区周边航空写真 (1947年4月 米军撮影)



1 越路六郎遺跡全景
(西上空から)



2 越路六郎遺跡全景
(南東上空から)

1 I区全景
(南上空から)



2 III区全景
(南上空から)





1 I・II区全景
(南上空から)



2 II区全景
(上空から)

1 1号掘立柱建物跡
(東から)



2 3号掘立柱建物跡
(北西から)



3 1号掘立柱建物跡
(東から)





1 1号土坑（東から）



2 8号土坑西側
（南東から）



3 11号土坑（東から）

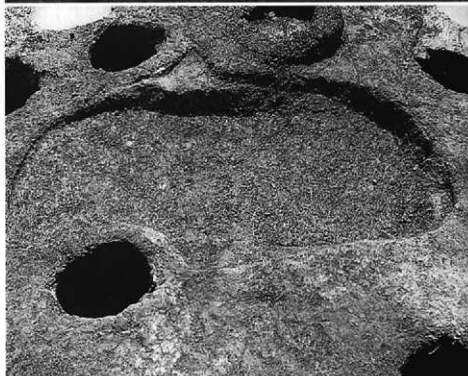
1 13号土坑（西から）



2 13号土坑遺物出土状態
（東から）



3 13号土坑完掘後
（東から）





1 14号土坑（東から）

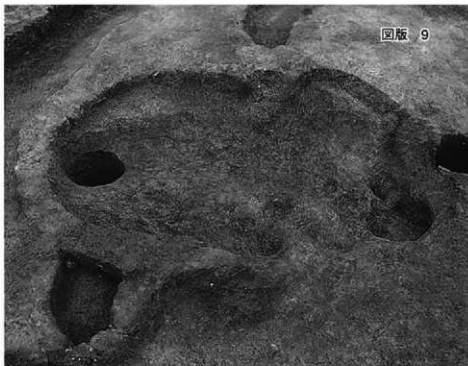


2 14号土坑完掘後
（南から）



3 15号土坑（南東から）

1 15号土坑完掘後
(南東から)

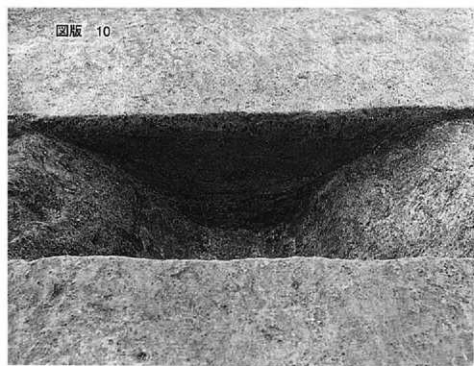


2 16号土坑 (西から)



3 16号・17号土坑完掘後
(東から)





1 1号溝状遺構土層
(西から)



2 2号溝状遺構物出土状態
(北西から)



3 II-3トレンチ土層
(北西から)

1 北東礫群（北から）



2 北東礫群（西から）



3 北東礫群細部
（南東から）





1 南礫群 (南から)



2 南礫群 (東から)



3 I区北西隅 (南東から)

1 II区高压線跡
(東から)

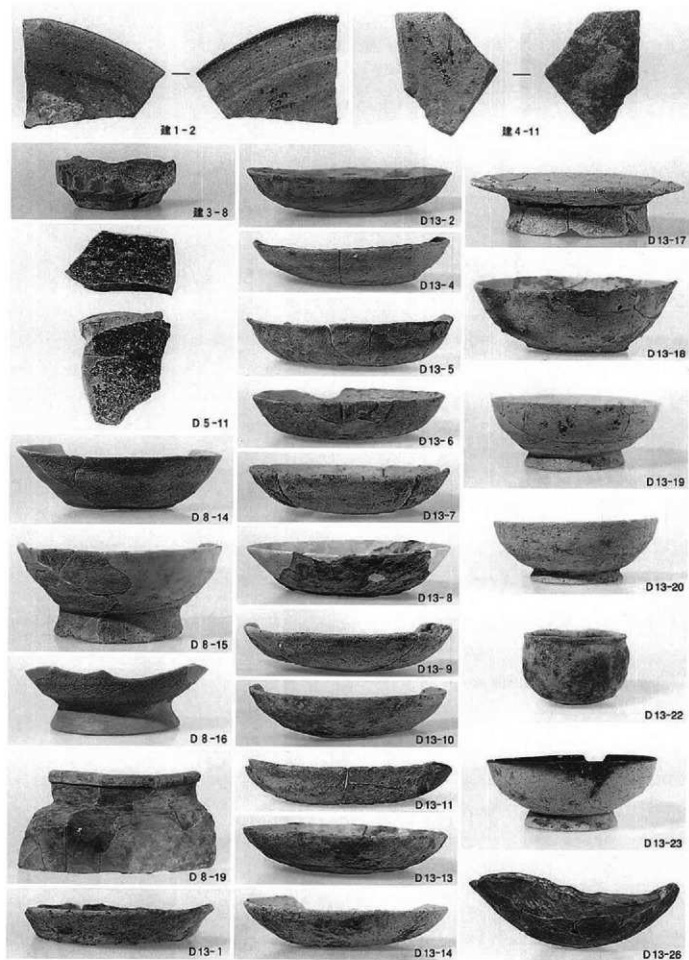


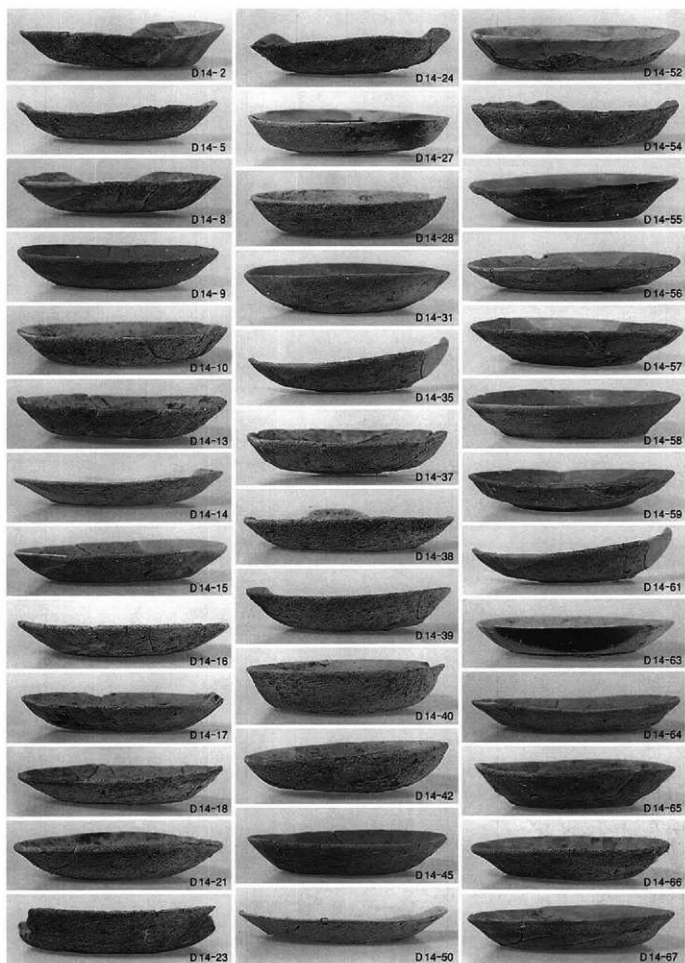
2 III区高压線跡
(南西から)



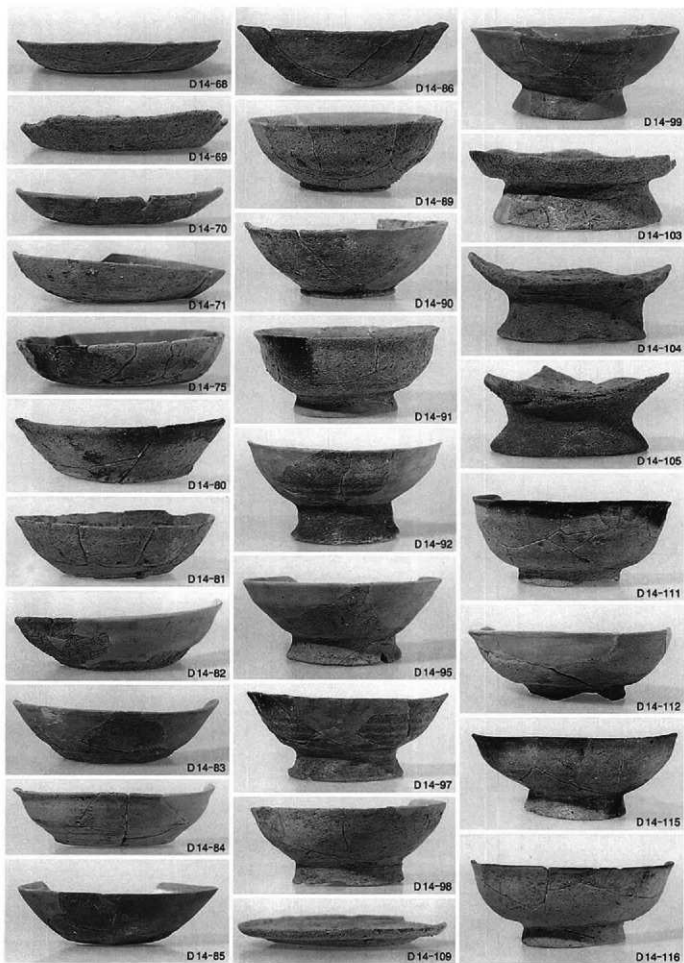
3 III区高压線跡
(北西から)

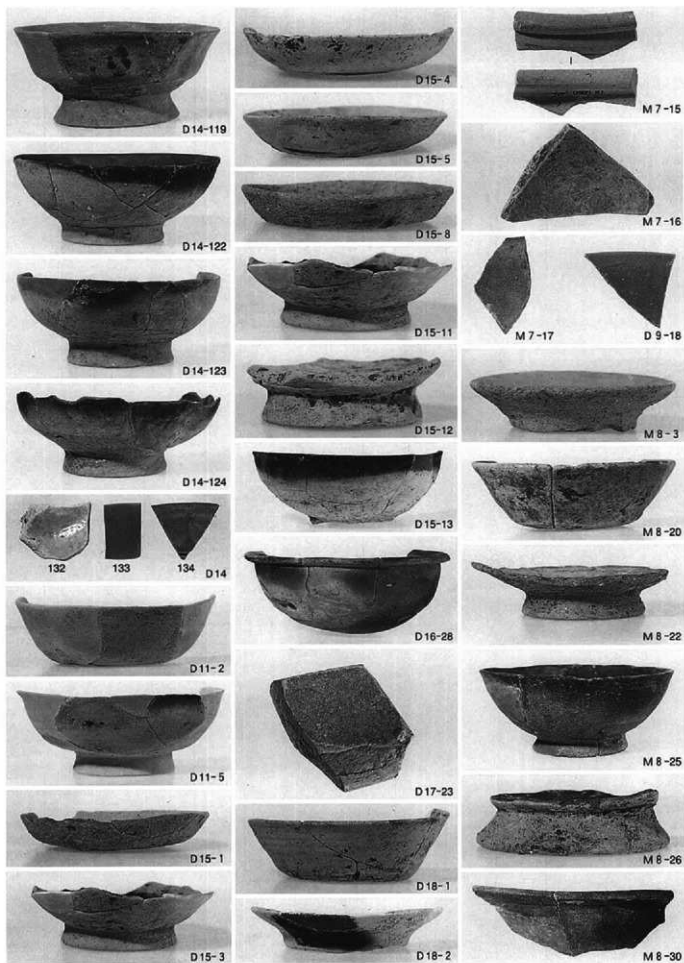




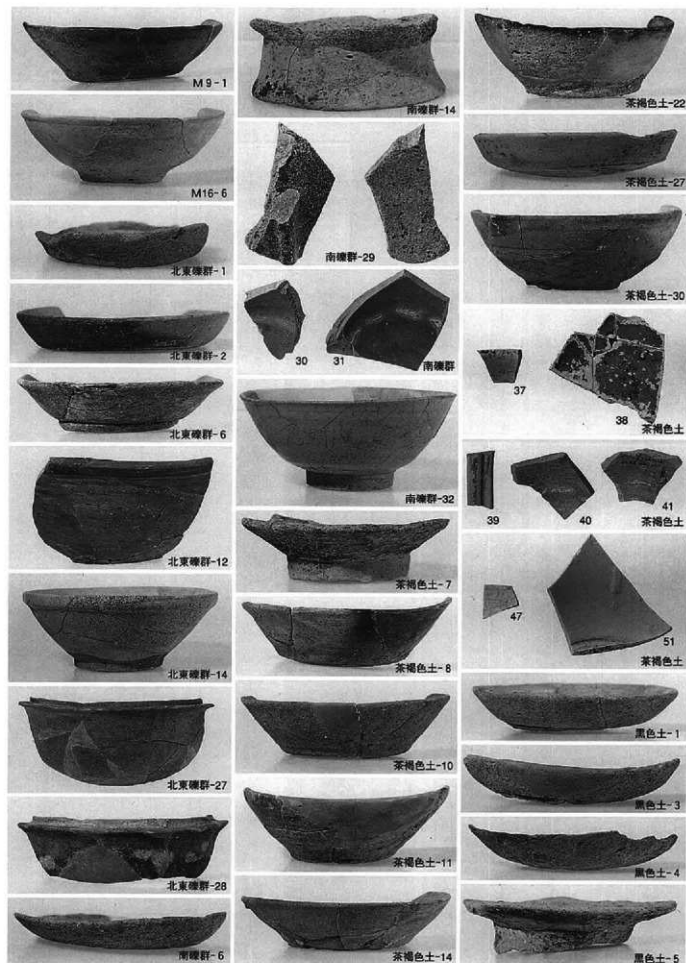


出土遺物 2



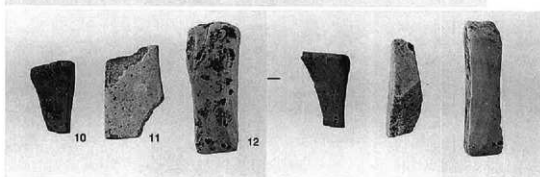
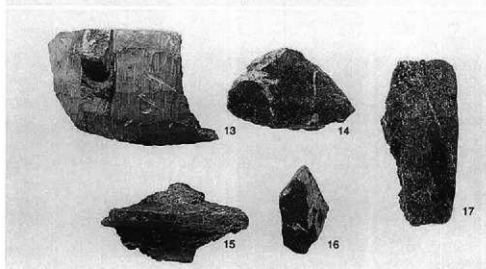
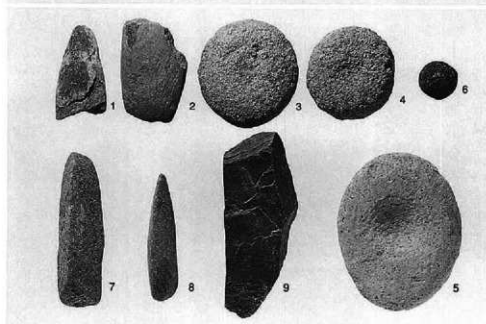
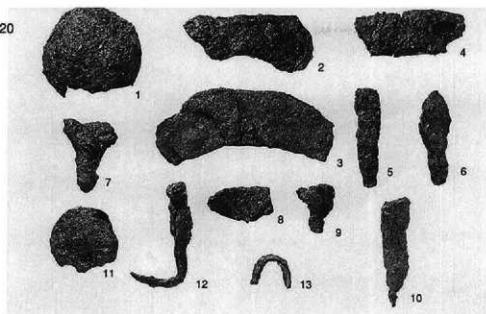


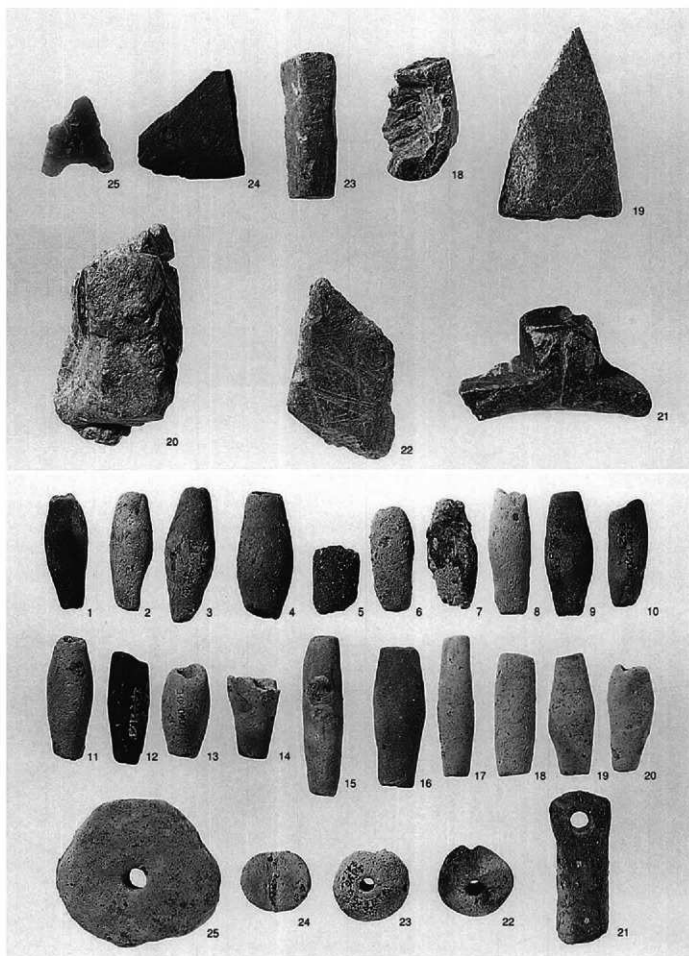
出土遺物 4





出土遺物 6







1



2

1 越路貴船遺跡全景空中写真（西から）

越路貴船遺跡全景空中写真（南東から）

1 越路貨船道跡
調査区西北部
(南西上空から)



2 調査区中央部
(南西上空から)

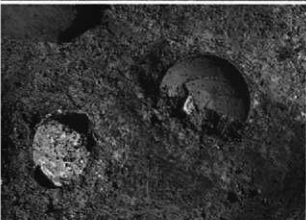


4 調査区東南部
(南西上空から)





1 1号住居跡 (北東から)



2 1号住居跡遺物出土状況



3 2号住居跡 (南東から)



4 2号住居跡カマド (南東から)

1 3号住居跡
(北から)



2 3号住居跡
(西から)



3 3号住居跡
カマド(西から)

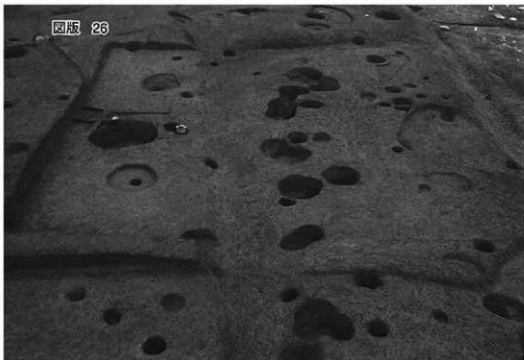


4 3号住居跡
カマド(南から)



5 3号住居跡カマド煙道 (南東から)





1 4号住居跡
(西から)



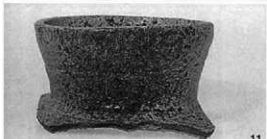
1



2



4



11



12



13



3



6



7



8

2 住居跡
出土土器

1 1号建物跡
(北西から)



2 3号建物跡
(南東から)

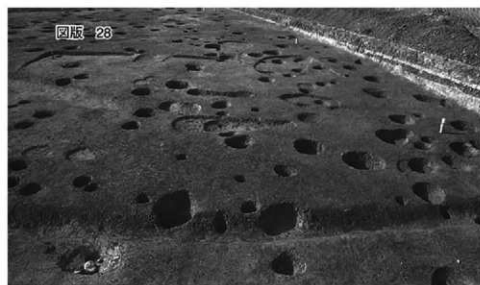


3 3号建物跡
(北東から)



4 4号建物跡
(北西から)

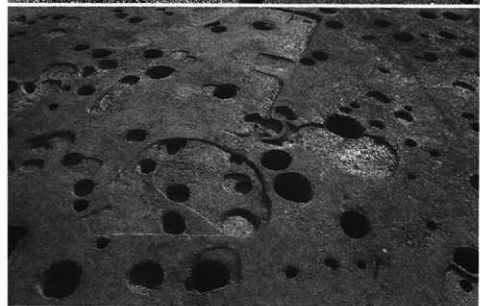




1 6・7号建物跡
(南東から)



2 7号建物跡 (北から)



3 7号建物跡 (東から)



4 7号建物跡地
鎮土坑 (南東から)

5 地鎮土坑出土土器

1 9号建物跡
(南から)



2 10号建物跡
(北東から)



3 11号建物跡
(東から)



1 12号建物跡
(西から)

2 1号竪穴
(北東から)

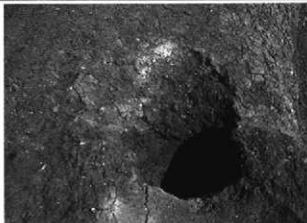
3 1号竪穴 (南から)

4 1号土坑との境目での
緑釉土器出土状況

1 1号堅穴製鉄遺構
(南東から)



2 1号堅穴製鉄遺構 (南西から)



3 3号堅穴 (南西から)



4 3号堅穴
(北西から)





1 4号竪穴（北東から）



2 6号竪穴（南西から）



3 7号竪穴（南西から）



12



14



24



25

4
竪穴出土土器

1



1



3



4



5



6



7



8



9



2



3

- 1 1号土壙墓 (南東から)
- 2 1号土壙墓 (南西から)
- 3 1号土壙墓遺物出土状況
- 4 1号土壙墓出土土器



1 谷部の補足調査区
(北西から)



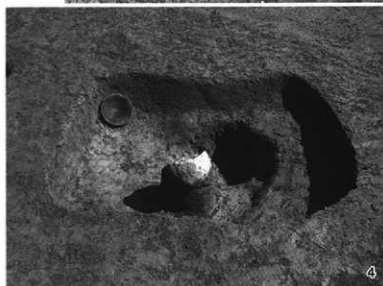
2 調査区東南部での調査風景



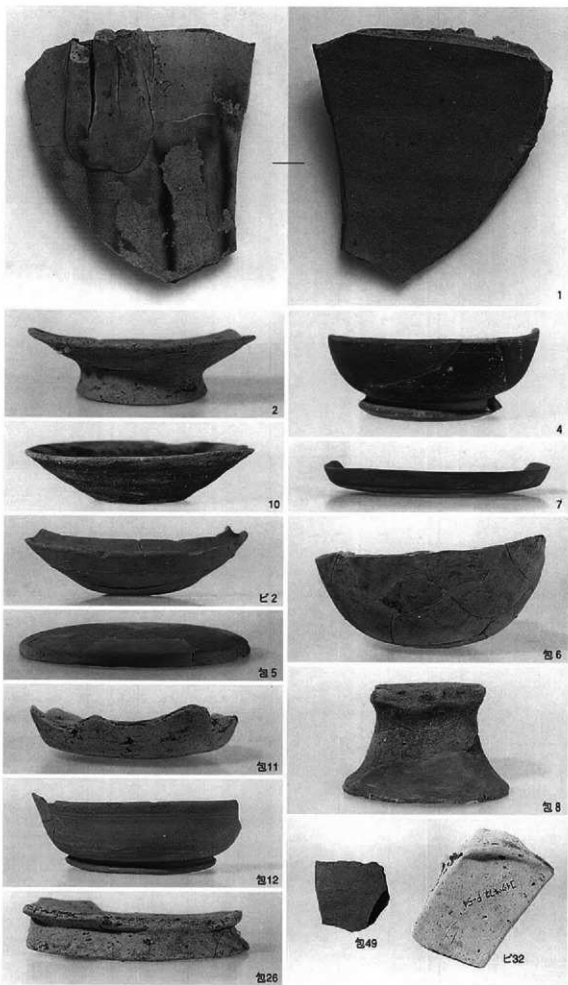
3 2号土坑(南東から)



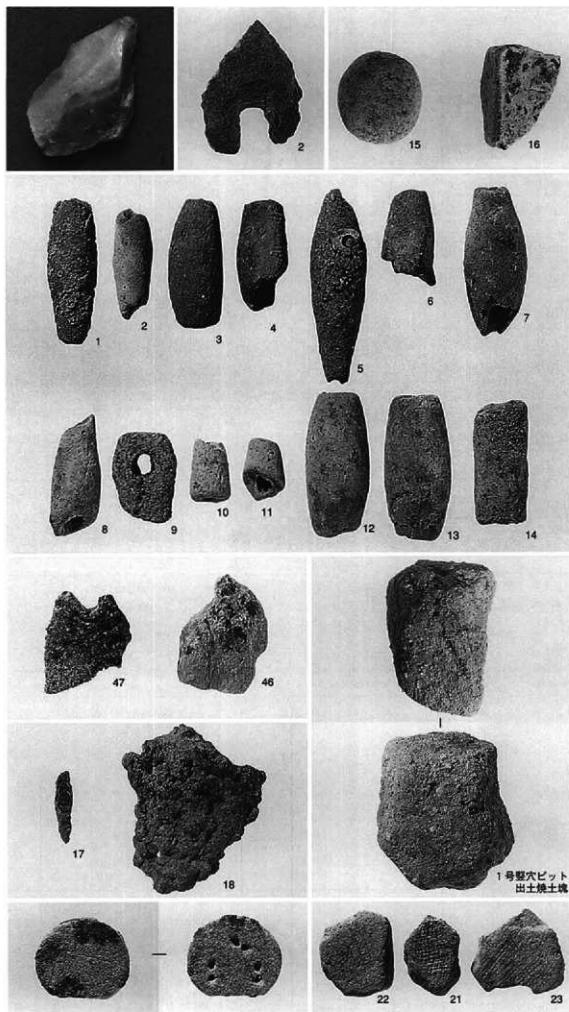
4 3号土坑と4号住居跡
(南東から)



- 1 4号土坑 (南東から)
- 2 5号土坑 (南東から)
- 3 5号土坑堆積状況
- 4 6号土坑 (西から)
- 5 6~8号土坑とその周辺 (北東から)



土坑・ピット・包含層出土土器



旧石器・石器・石製品・土製品・鉄製品

報告書抄録

ふりがな	こいじろくろう		こいじきふね					
書 名	越路六郎遺跡・越路貴船遺跡							
副 書 名	主要地方道椎田勝山線関係埋蔵文化財調査報告 5							
巻 次								
シリーズ名	福岡県文化財調査報告書							
シリーズ番号	第161集							
編 著 者 名	小池史哲・飛野博文							
編 集 機 関	福岡県教育委員会							
所 在 地	〒812-8577 福岡県福岡市博多区東公園7-7							
発行年月日	西暦2001年3月30日							
ふりがな	ふ り が な	コード	北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調 査 原 因	
所収遺跡名	所 在 地	市 町 村	遺跡番号	° °	° °			
こいじろくろう	ふくおかけんちくじょうぐんしだいまち	406414	940119	33°	131°	1997.01.16	約2,000㎡	県道バイパス
越路六郎	福岡県築上郡椎田町			40°	2°	～03.27		
	おおあぎこいじろくろう			37°	45°	1997.05.06		
	大字越路字六郎					～06.24		
こいじきふね	ふくおかけんちくじょうぐんしだいまち	406414	940125	33°	131°	1998.01.06	約3,000㎡	県道バイパス
越路貴船	福岡県築上郡椎田町			38°	2°	～03.31		
	おおあぎこいじきふね			11°	42°	1999.05.19	約110㎡	
	大字越路字貴船							
所収遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物		特 記 事 項		
越路六郎	集 落 跡	古 代	掘立柱建物 土坑・溝等	5	越州窯系青磁・緑 釉陶器・黒色土器 鉄素材 旧石器			
	散 布 地	そ の 他						
越路貴船	集 落 跡	古墳時代 古代～中世	住居跡 掘立柱建物 墓穴 土壇墓 土坑 製鉄遺構 溝状遺構	4 12 8 1 8 1 6				旧石器 須恵器・土師器 緑釉陶器 白磁・青磁 石帯・砥石・土師 輪郭口・製塩土器 鉄滓

福岡県行政資料	
分類番号 JH	所属コード 2133051
登録年度 12	登録番号 6

福岡県文化財調査報告書 第161集

主要地方道糠田豊山線関係遺産文化財調査報告(5)

越路六郎遺跡・越路貴船遺跡

平成13(2001)年3月30日

発 行 福岡県教育委員会
〒812-8577 福岡市博多区東公園7番7号

印 刷 松古堂印刷株式会社
〒819-0373 福岡市西区尾島寺1丁目7番64号